岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第132集

米沢遺跡発掘調査報告書

主要地方道三十刈家ノ上線改良工事関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

米沢遺跡発掘調査報告書

主要地方道三十刈家ノ上線改良工事関連発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保護し、保存して行くことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の動脈として多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する借置をとってまいりました。

本報告書の米沢遺跡は、二戸市中心街を流れる馬淵川沿いに立地する遺跡で、昭和62年の発掘調査によって縄文時代・平安時代の集落跡や縄文時代の狩り場跡などが発見されました。ひき続き出土資料等の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました二戸市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年8月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　中　村　　直

例　言

1．本報告書は、岩手県二戸(にのへ)市米沢(まいさわ)字荒谷(あらや)57-5ほかに所在する米沢(まいさわ)遺跡に対する発掘調査の成果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、岩手県土木部による主要地方道三十刈～家ノ上線の改良工事に関連して行った緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局と岩手県土木部二本土木事務所との協議を経て、記録保存を目的として財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県教育委員会遺跡台帳の登載番号はＩＥ99-0390，遺跡略号はＭＺ87である。

4．発掘調査面積は3,000㎡、調査期間は昭和62年９月１日～10月21日である。

5．整理期間は、昭和62年10月22日～11月30日である。

6．野外調査は、工藤利幸・光井文行の２名が担当し、室内整理および報告書の作成は工藤利幸が担当した。

7．本報告書に掲載した実測図の凡例については、II．調査経過および調査方法等によった。なお、写真図版の縮尺率は不定である。

8．石器・石製品の岩質同定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。

9．野外調査・整理報告に際しては、二戸市教育委員会、関　豊、高田和徳両氏の御指導・御協力をいただいた。

10．調査に係わる諸記録・遺物等の資料は、岩手県立埋文センターに保管している。

<目　　次>

序

例　　言

＜ 本 文 目 次 ＞

Ⅰ．遺跡の位置・環境……1

1．遺跡の位置……1

2．遺跡および周辺の地形……2

Ⅱ．調査経過および調査方法等……5

1．調査の経過……5

2．野外調査の方法……5

3．図版の表現について……6

4．土層について……8

Ⅲ．遺構について……10

1．遺構の分布状態……10

2．縄文時代の遺構……10

3．古代の遺構……17

4．近代・現代の遺構等……21

Ⅳ．遺物について……25

1．土器・土製品……25

2．石器・石製品……29

3．金属製遺物……32

Ⅴ．まとめ……~~33~~ 34

1．遺構について……34

2．遺物について……34

＜表 目 次＞

BIV-01住居址柱穴様小土坑計測表……14
土製円盤計測表……46
石器石製品計測表……32

＜図版目次＞

図版１：遺跡の位置…… 2
図版２：地形模式断面図…… 4
図版３：実測図凡例…… 7
図版４：図版４米沢遺跡土層断面図と
　　周辺地域の模式層準…… 9
図版５：遺構配置と周辺地形……11～12
図版６：BIV—01住居址……14
図版７：CIV—001陥し穴状遺構 ……15
図版８：AV—001土坑 ……16
図版９：AV—01住居址出土遺物……18
図版10：CIV—01住居址出土遺物（１）……22
図版11：CIV—01住居址と
　　出土遺物（２）他……23～24
図版12：縄文土器実測図・拓影図（１）……37
図版13：　〃　〃（２）……38
図版14：　〃　〃（３）……39
図版15：　〃　〃（４）……40
図版16：　〃　〃（５）……41
図版17：　〃　〃（６）……42
図版18：　〃　〃（７）……43
図版19：　〃　〃（８）……44
図版20：　〃　〃（９）……45
図版21：円盤状土製品……46
図版22：剥片石器（１）他……47
図版23：剥片石器（２）他……48
図版24：礫塊石器（１）……49
図版25：礫塊石器（２）……50
図版26：礫塊石器（３）……51
図版27：礫塊石器（４）……52
図版28：礫塊石器（５）……53

＜写真図版目次＞

写真図版１：遺跡周辺の地形と調査区域…54
写真図版２：土層の堆積・分布状態……55
写真図版３：BIV—01住居址（１）……56
写真図版４：BIV—01住居址（２）……57
写真図版５：AV—01住居址……58
写真図版６：CIV—01住居址（１）……59
写真図版７：CIV—01住居址（２）……60
写真図版８：陥し穴状遺構と土坑……61
写真図版９：縄文土器（１）……62
写真図版10：縄文土器（２）……63
写真図版11：縄文土器（３）……64
写真図版12：縄文土器（４）……65
写真図版13：縄文土器（５）……66
写真図版14：縄文土器（６）、土製円盤……67
写真図版15：土師器・須恵器（１）……68
写真図版16：土師器・須恵器（２）他……69
写真図版17：剥片石器（１）……70
写真図版18：剥片石器（２）・礫塊石器他…71

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

米沢遺跡は、岩手県二戸市米沢字荒谷57-5ほか地内で、東日本旅客鉄道東北本線斗米（とまい）駅の東250m付近に所在する。《国土地理院発行 1：25,000地形図「陸奥福岡」NK—54—18—11—3（八戸11号—3）。および1：50,000地形図「一戸」NK—54—18—11（八戸11号）図幅中の北緯40度16分56秒、東経141度17分51秒付近に位置している。》（図版1）

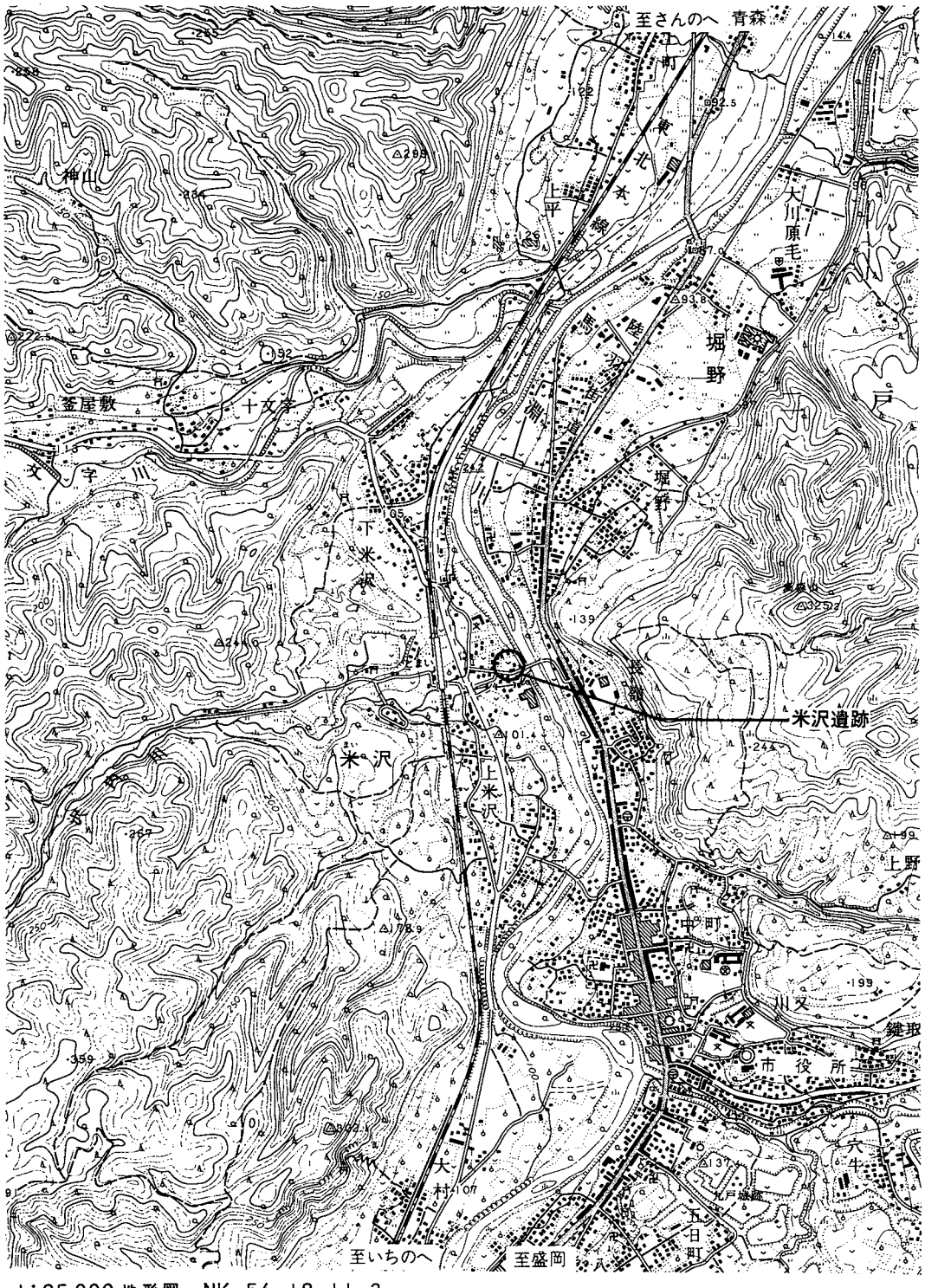
遺跡は、二戸市内を北流する馬淵川左岸に形成された完新世の高・低2面の段丘と、その間の斜面部に広がっている。調査対象区域の標高はおよそ91～98mで、馬淵川との比高は10～17mである。また、調査対象区域の南東40mほどのところには沢内川が流れており、東側で馬淵川と合流している。（図版5、写真図版1）

本遺跡が所在する二戸市は、岩手県の北端部に位置し、青森県に接するとともに北上山地および奥羽山地に挟まれた馬淵川水系中流域に形成された岩手県で最も新しい市政都市である（1872年市政施行）。市境の北縁から西縁は、青森県三戸郡名川町・三戸町・田子町、そして岩手県浄法寺に接し、東縁から南縁は岩手県軽米町・九戸村そして一戸町に接している。その市域は馬淵川とその支流である安比川・白鳥川・十文字川流域にあたる238㎢余りで、市の中心部を岩手郡葛巻町の袖山に源を発する馬淵川が北流している。

2．遺跡および周辺の地形

(1) 二戸市域の段丘地形の区分は、大池・中川他による馬淵川流域研究の業績が大であり、かつ基本となっている（大池・中川他1966）。それによれば、低位から高位へ、堀野段丘・米沢段丘・福岡段丘・仁左平段丘に区分されている。しかし、その後の遺跡調査などから一部地域について疑問がもたれていたが（関　1978）、1981年には松山力により大池・中川他の米沢段丘は高位と低位とに二分され、前者は中町段丘と新たに命名され、後者は大池・中川他の堀野段丘に包括されるものとして報告している（松山　1981）。また、同報告の中では、米沢段丘と福岡段丘の間に長嶺段丘（新命名）が存在すること、更に堀野段丘の下位に中曽根段丘（新命名）の存在を報告している。

(2) 米沢遺跡の調査区域は、以下に説明するように大池・中川他の米沢段丘及び堀野段丘に、そして松山（1981）の堀野段丘・中曽根段丘に相当する地形面に広がっているが、これらの地形形成は本流である馬淵川だけによるものではなく、沢内川による作用も加わっているものと考えられる。なお、調査区域の標高は90.7m～97.8mにあり、馬淵川との比高は10～17mで、



1：25,000 地形図　NK-54-18-11-3
むつふくおか　（八戸11号-3）　国土地理院

0　500　1000　1500

図版1：遺跡の位置

調査区の前面崖はほぼ垂直になっている。（図版２．５）

発掘調査による段丘堆積物・火山砕屑物層の状態確認、そして周辺地形の観察から、調査対象区域の地形面は大別２面、細別３面に区分される。

Ｌ面：多くの貝化石を含む砂岩（末ノ松山層）を基盤岩とし、その上には大礫～巨礫を主体とした円礫層が１～1.2m 堆積している。更にその上位には、小礫質でかつ中～大粒浮石を多量に含む砂層や小礫質浮石層、あるいは明黄褐色～黄褐色の砂質土などの水成堆積物が互層となって２～３ｍ堆積している。これらの堆積層間には、小～大礫の浮石礫層や有機質の黒色～黒褐色土層が介在している。これら水成堆積物層の上位には、うすい有機質の黒色～黒褐色細砂質土層が堆積しているが、層として明確に把握できるのは極く一部分であり、ほとんどが下位の砂層と混在している。これより上位の堆積物は、中掫浮石層・浮石質黒色～黒褐色土層、あるいは十和田ａ火山灰層などの火山砕屑物を主体とした堆積物となる。Ｌ面の堆積物、特に耕作土層から遺構検出に関わる土層については「基本土層」の項を参照していただきたい。

Ｍ面：Ｍ面は、上位のＨ面と同一の大礫～巨礫を主体とした段丘礫層を基盤礫層としているが、Ｍ面の形成は同礫層の浸蝕によって形成されたものである。礫層上部には、礫の間隙をうめる程度に砂質の黄褐色粘性土が堆積し、その上に南部浮石層が堆積している。

この面は、幅2.5～1.5cmほどで、調査開始の時点ではその存在は予測できなかったものである。なお、礫層の層厚は不明であるが、礫層上面の標高は94.5m 前後である。

Ｈ面：Ｈ面は、Ｍ面の基盤礫層と一連のものを基盤とし、その上位には粗砂質でかつ浮石質のにぶい黄橙色～明黄褐色砂層や火山砂様の灰白色砂層、そして灰白色～浅黄橙色の中砂質粘性土などが1.2～1.5m ほど堆積している。しかし、調査区内では上部が造成その他による削平を受けており、これらの上位は南部浮石などを混じえた暗褐色の耕作土層となる。しかし、同一面の離れた地点では水成堆積物の直上位に南部浮石層が形成されている。

以上に説明した各地形面を、大池・中川外（1960）、松山（1981）の区分に対比させると以下のようになる。

Ｌ面：大池他では、堆積物の種類、河川との比高から明らかに堀野段丘に包括される。

松山では、中曽根段丘に相当するものと考えられる。

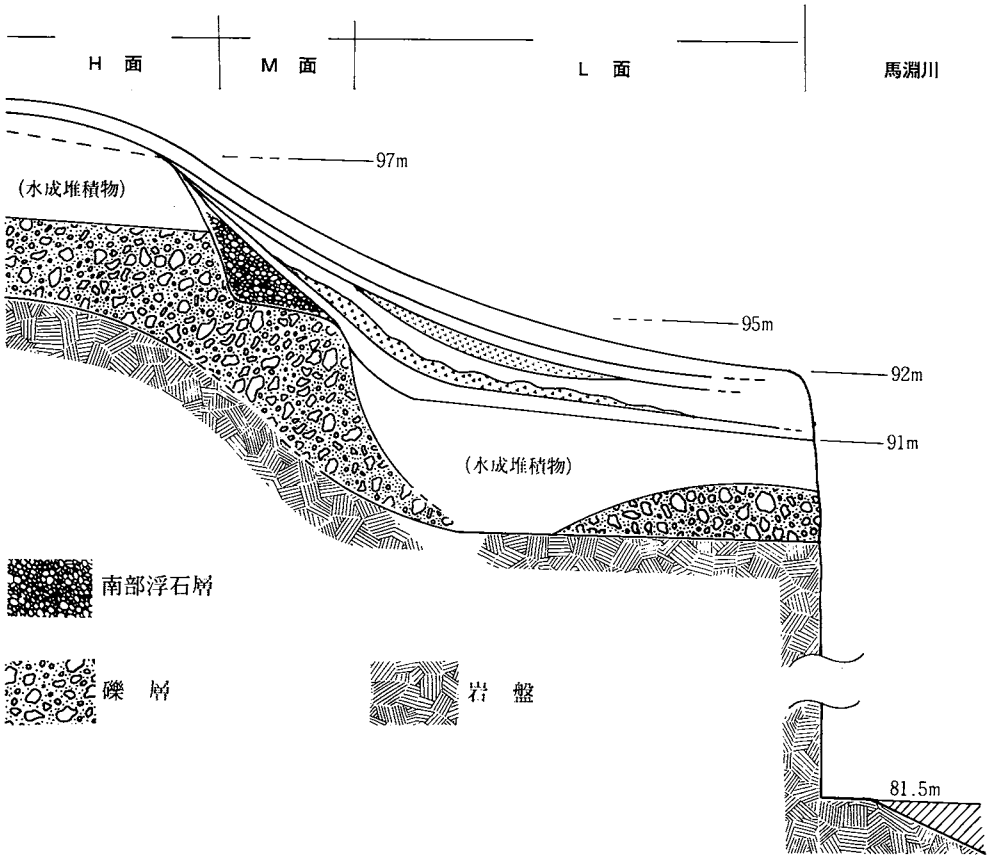
Ｍ面：大池他では、南部浮石層の存在から米沢段丘の低位部分となる。

松山では、堀野遺跡の例や馬淵川との比高などからＨ面と同様に堀野段丘となる。

Ｈ面：大池他では、堀野段丘より高位面でありＭ面と同様に段丘堆積物の上に直接、南部浮石が堆積していることなどから米沢段丘の一部となる。

松山では、南部浮石が堆積し、かつ堀野段丘より高位ではあるが、川面からの比高、段

丘堆積物の性格から堀野段丘となる。（段丘レベルからは中町面の一部かと思われる）



図版２：地形模式断面図

参考文献

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究』第５巻１号

大池昭二（1972）「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』第11巻４号

関　　豊（1978）「中曽根遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会

松山　力（1981）「第II章　自然的環境」『中曽根II遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会

草間俊一（1965）「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会（現二戸市教育委員会）

村井貞充（1976）「北上山系の地形」『北上山系』岩手放送

　　（1975）『九戸の地学』

中川久夫（1981）「第四系」北上川流域地質説明書　長谷地質調査事務所

II．調査経過および調査方法等

1．調査の経過

米沢遺跡に対する調査は、昭和62年９月１日に開始し、同年10月21日の器材撤収をもって野外調査を終了している。米沢遺跡について想定された遺構・遺物などの内容は、隣接する荒谷Ｂ遺跡や近隣の荒谷Ａ遺跡・家の上遺跡などの調査成果や表採資料から縄文時代前期・後期～晩期、古代の集落ならびに関連土坑であった。

調査区の割付・堆積土層の確認・粗掘・遺構検出と作業が進む中で、ＢⅢ・ＢⅣ・ＣⅢ・ＣⅣの大調査区やＡＶ大調査区で灰白色～浅黄色の十和田ａ火山灰の広がりが広範に認められ、多数の古代住居址の存在が推測された。また、同火山灰上面には不整円形～楕円形を呈する小土坑（長径30～60cm）と思われるものや、旧耕作土層から続く長薯・牛蒡の栽培痕が多数認められた（写真図版２－２，６－１，８－５）。十和田ａ火山灰の上位から形成された小土坑は、埋土中に砕石・ビニール片が存在することや樹皮・木根痕の存在から現代および自然によるものである。又、ＢＩ・ＢII大調査では、耕作土直下から長方形の土取跡が確認され、それらの埋土中からは鉄釘・ガラス片・合成樹脂片等が出土している。

2．野外調査の方法

1)　調査区割付と基準点：調査区割付の基準点および基準線は、地形傾斜方向と道路中心方向とがほぼ同一であることから、20m間隔で設置された道路中心杭No 7、No 9、No11の３点を選定して精度確認を行った。しかし、この３点は直線とならず若干カーブしていることから改めてNo 7とNo11の２点を基準点とした。これら２点、および２点がなす直線を基に１辺20mの正方形区画を大調査区とし、更に大調査区は１辺４mの正方形で25小区画に細分した。その後、２点の公共座標等の測量および精度確認を業者に依頼し、３級基準点測量により２点の成果を得ている。なお、精度確認測量の結果、２点間の距離は79.976mであり、当初設定の距離80mとは－ 0.024mの誤差となっている。

基準点１（No 7）X＋31470.922　　Y＋39524.274

B　40°16′57″.187　L141°17′53″.531　H＝91.449m

基準点２（No11）X＋31433.052　　Y＋39453.893

B　40°16′55″.971　L141°17′50″.540　H＝97.047m

2)　調査区の名称：20m四方の大区画に対しては、基準線に直交する方向を北北西からアルファベットの大文字（A～D）を、基準線に沿った方向には西南西からローマ数字（Ⅰ～Ⅵ）

を各々に附与し、これらの組み合わせで大区画の名称とした。

（例――ＡＶ…、　ＢⅢ…、　ＣⅣ…、）

各々の大区画は前述のように辺が４ｍの正方形によって小区画に細分されており、この小区画にはアルファベットの大文字を附与し、大区画名と組み合わせて小区画名とした。小区画の具体的な位置関係については図版５を参照されたい。

3)　遺構の名称と精査方法：検出確認した遺構に対しては、大きく①住居址・住居址状竪穴遺構、②土坑類（フラスコ形土坑・直円筒形土坑・墓坑・その他）に区分し、大区画単位で通し番号を附与し、大区画名と通し番号とを組み合わせて遺構名とすることとした。

①の住居址等にはアラビア数字２桁を用いて…例　ＡＶ―01住、ＢⅢ―01住…のように呼称した。

②の土坑類にはアラビア数字３桁を用いて…例　ＣⅢ―001 陥し穴、ＡＶ―001 土坑…のように呼称した。

３．図版の表現について

本報告書中における遺構・遺物の実測図に用いた表現は、図版３に示した種類、および以下に説明するとおりである。また、遺構数が少ないところから図版３にないものは各図版の中で説明している。

1)　遺構実測図・基本土層図：遺構断面図・基本土層図の十和田ａ火山灰層・中掘浮石層にスクリーントーンを用いているが、同層の撹乱部や貫入ブロックには用いていない。また、長薯等の栽培痕や深耕畝間等の新期撹乱部にはハッチング様のスクリーントーンを貼付している。

住居址の図版中、柱穴・小土坑には Po-1～Po-X を附している。礫・焼土・炭化材あるいは掘方痕・貼床部等についても図版３中で例示している。

遺構図版の縮尺率は、１：40となるように割付しているが、図版中にスケールも示している。

2)　遺物実測図：各種遺物の表現方法は、図版３に示した種類、および以下に説明する内容である。縮尺率については、遺物種、掲載方法について異なることから各図版中にスケールを示している。礫石器等の使用面・加工面は、各々の作用対象・作用程度及び素材岩石の種類、風化状態によって、同様の作用でも異なることが考えられる。以下に、礫石器に見られる作用痕の状態を①～④で、作用痕・自然的現象の一部を⑤として説明する。

＜礫石器・台石等＞

①光沢研磨面……磨石・磨製石斧に見られる作用面で、光沢をもつか、あるいは光沢をもたないまでも非常に滑沢な面となっている。多くの場合、細く小さな線条痕を伴っている。なお、

磨製石斧には本種スクリーントーンは用いていない。

②荒敲打面……比較的平滑であるが、ペッキング状の敲打痕跡だけでザラザラし、擦・敲打や緻密敲打面に比べて面の凹凸が強い。条痕・擦痕は認められない。

③緻密敲打面……比較的平滑な面をなし、線条痕やペッキング状敲打痕をもたない敲打面。

④荒研磨面……主たる作用が擦る・擦りつぶす作用面、あるいは擦られた面であると考えられる面で、粗い線条痕が観察される。ただし、砥石には本種スクリーントーンは用いていない。

⑤白ぬき部……礫石器・台付等の欠損部、風化剝落部は白ぬきとしている。

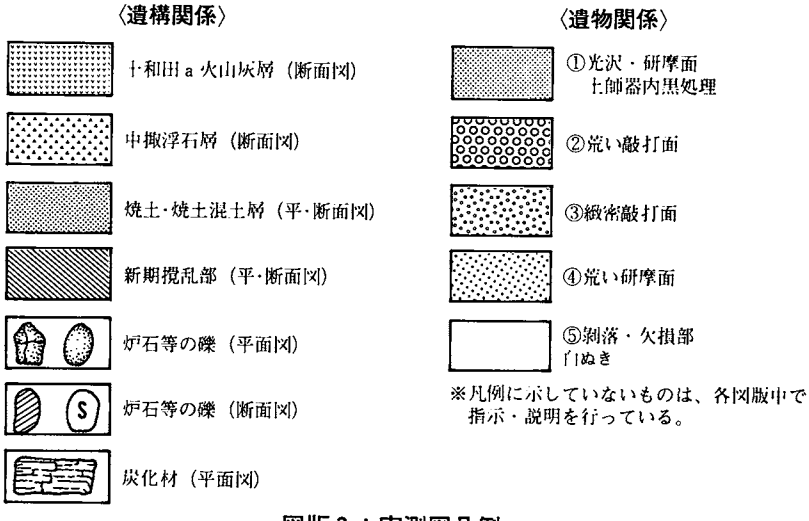
＜剝辺石器・石核石器＞

剝辺石器、礫石器を除いた石核石器は、原石の表皮（自然面）にリングの有無にかかわらずドットを落とし、他の加工部と区別している。

＜土器・土製品＞

土器のうち、土師器については内黒処理のものについてスクリーントーンを用い、須恵器についてはその断面を黒つぶしとした。土製品のうち、土製円盤については研磨整形が施された部分に ├──┤ の印で範囲を示した。

3)　計測位置：石器・石製品・土製品の計測位置・方法は、図版に配した位置で、上下を長さ、左右を幅とし、各々の最大値を計測、厚さについては各遺物の最大厚を計測しているが、剝片の残庇部等の突出部を除外している。



図版３：実測図凡例

４．土層について

本遺跡における土層の堆積状態は、地形面によって若干の差異が認められるものの図版４―Ａに示した堆積状態が遺構を検出した区域（低位面）の標準的堆積状態である。これらの土

層には、十和田火山を噴出源とする十和田ａ降下火山灰・十和田ｂ降下浮石・中掫浮石・南部浮石の各火山噴出物が層をなしたり、黒色土中に混在する形で確認された。しかし、南部浮石は図示した地点では層として確認されておらず、また十和田ｂ降下浮石は純粋層としてではなく、黒色土層の構成物として確認している。（図版４―Ａ・Ｂ、写真図版２）

＜基本土層の記録＞

Ⅰａ層：小粒浮石質の暗褐色土（10ＹＲ3/3～3/4)。現耕作土である。締り・粘性なし。15～25cm。

Ⅰｂ層：小粒浮石質の黒褐色土（10ＹＲ3/1～3/2)・褐色砂の小～中ブロックや中粒～大粒の浮石などが散見される。本層は斜面地形のたるみ部に認められる層であり、下部からⅠＣ層上部にかけて木炭片等の炭化物・ガラス小片などが含まれていたことから近代～現代の造成層と考えられる。締りややなく、粘性なし。10～20cm。

ⅠＣ層：小～中粒浮石質の黒褐色～極暗褐色土（7.5ＹＲ2/2～2/3）旧耕作土である。締り普通・粘性がなし。15～25cm。

Ⅱ　層：小粒浮石質の黒色～黒褐色土（10ＹＲ2/2～2/3）であるが、地点により浮石含有率・色調に若干の差が見られる。また不規則に中～大粒浮石が散在している。10～30cm。

Ⅲ　層：灰白色～浅黄色（５Ｙ7/2～7/4）の火山灰で十和田ａ降下火山灰層と考えられるものである。堆積・分布域は、斜面傾斜が平坦面へと変化する区域を中心として住居址等の凹部に堆積しており、上部・下部とに大別される。上部は極小粒浮石を含むシルト状火山灰で淡黄色（2.5Ｙ7/3～7/4）を呈し、灰白色～淡黄色（2.5Ｙ8/2～8/3）の砂質小ブロックや暗褐色～黒褐色の小ブロックが散在している。下部は砂質～シルト質で灰白色～浅黄色（2.5Ｙ8/2～8/3）を呈し、小粒～極小粒の白色浮石が散在する。古代の住居址内では、前述の上部・下部が水成ラミナを介在して堆積している。層厚は、遺構内で15～20cm、遺構外で５～10cmである。粘性なし。締りやや軟らかい。

Ⅳ　層：本層は浮石質黒色土であるが、浮石含有の状態及び浮石の種類によって上部層（Ⅳ*u*）と下部層（Ⅳℓ）とに区別される。

Ⅳｕ層：本層は十和田ｂ浮石（２～７mm）を30～40％含む黒色土（N2/0が主）であるが、浮石の多少、上位の十和田ａ火山灰の侵入、あるいはガラス質砂の多少によって暗灰色部（N3/0やN1.51）などの色調を呈する。また本層は下部へ漸移的に変色し、十和田ｂ浮石の少ない小粒浮石質黒色土（10ＹＲ1.7/1）となる。15～25cm。

Ⅳｌ層：Ⅳ*u*層と接する付近は極小粒浮石質黒色土（10ＹＲ1.7/1）であるが、十和田ｂ浮石は全く含まない。本層は下部へ移るに従って中掫浮石粒と考えられる小粒浮石が増加し、色調も黒色～黒褐色（10ＹＲ2/1～2/2）へと変化する。なお、下位のＶ*u*層に

近い部分では浮石質土ブロック（Ｖｕ層土）の浮上が認められる。Ⅳｕ・Ⅳℓ層中には、第Ⅲ・Ⅳ群土器を主体として第Ⅰ群～第Ⅳ群土器が含まれる。第Ⅴ群土器は、極少量ながらⅣｕ層上部で散見される。15～30cm。

Ｖｕ層：小粒浮石70％以上、中粒浮石10％以上で構成される暗褐色浮石質土（7.5ＹＲ3/3～3/4）層でＶℓ層の土壌化層あるいは２次層と考えられる。第Ⅲ群土器を主体として第Ⅰ～Ⅲ群土器を含み、一部区域のⅣ層がうすい地点では第Ⅳ群土器も含まれる。５～20cm。

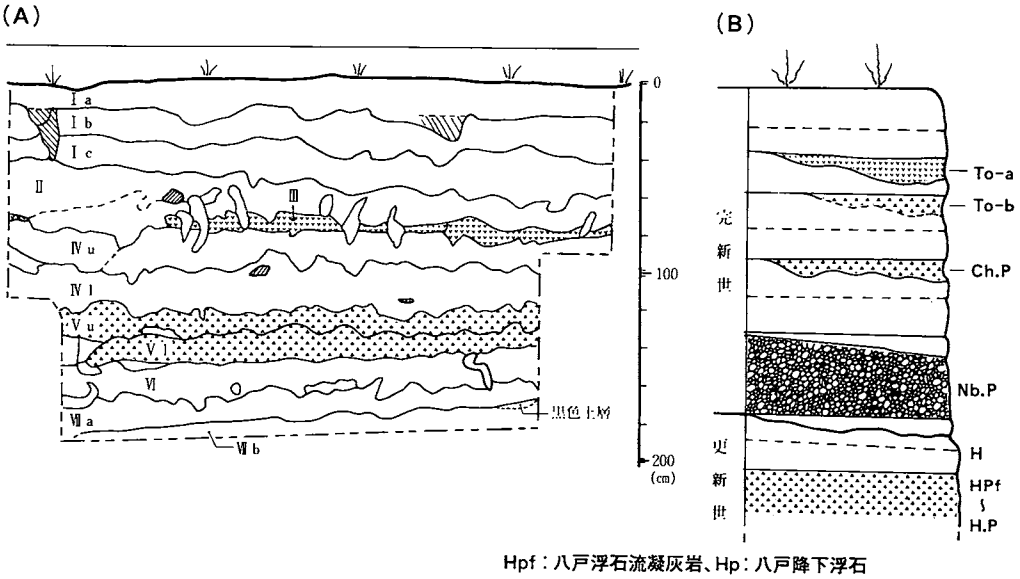
Ｖｌ層：中掫浮石層。木根その他による撹乱が多く認められ、純粋層は不連続的分布となっている。10～20cm。

Ⅵ　層：細砂～シルト質の黒褐色～暗褐色土（10ＹＲ3/2～3/3）。比較的緻密で若干粘性が認められる。本層および下位のⅦ層上部には第Ⅰ群土器が含まれる。15～20cm。

Ⅶ　層：褐色の細砂質中砂層（10ＹＲ4/3～4/4）で、部分的に暗褐色部も見られる。また一部には、鉄・マンガン等の集積・結核も認められる。以下の層は、このⅦ層の状態が４～５層堆積しており「第Ⅰ章　２．遺跡および周辺の地形」で述べたＬ面の堆積物の状態となっている。

なお、図版４－Ｂは、周辺地域における更新世低位段丘以上で観察される堆積状態の模式図である。図Ｂの層厚は不定である。

To-a：十和田ａ火山灰、To-b：十和田ｂ浮石、Chp：中掫浮石、Nbp：南部浮石、H：八戸火山灰（ローム）



Hpf：八戸浮石流凝灰岩、Hp：八戸降下浮石

図版４：米沢遺跡土層断面図（Ａ）と周辺地域の模式層準（Ｂ）

Ⅲ．遺構について

本章では、竪穴式住居址３棟、陥し穴状遺構他の土坑２基、現代の土取跡等についての説明を行う。しかし、土取跡等現代のものについては図等は用いず、また内容説明も簡略にした。

遺物については、次章と重複する部分も生じるが、本章では遺構内出土の遺物について出土状態を中心として説明を行う。

１．遺構の分布状態

調査対象区域は、馬淵川に面し全体的に東北東～北東に向いた比較的日当りの良い地形である。地形の状況については「Ⅰ．遺跡の位置と環境」の中で説明しているので本項では省略する。

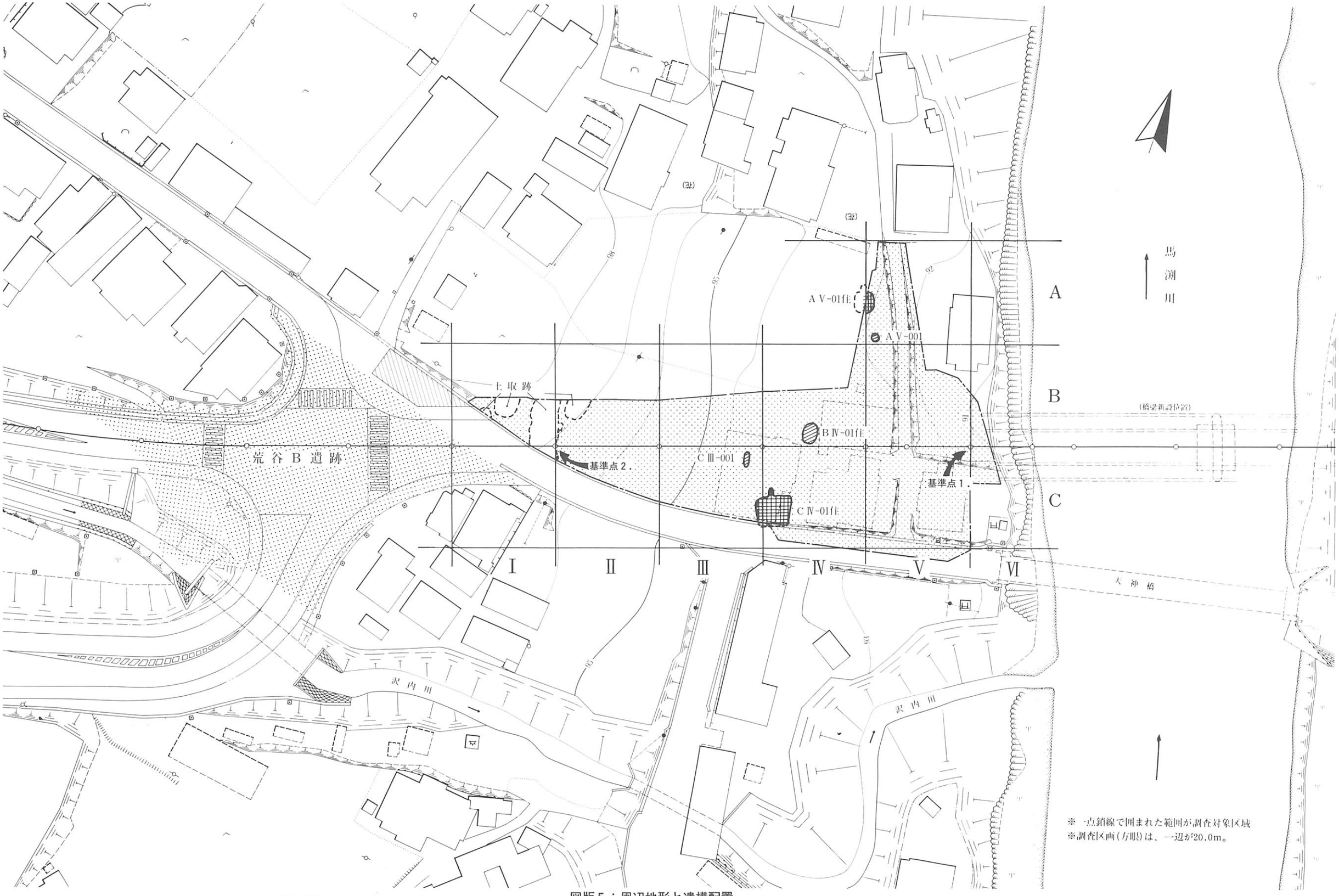
検出された遺構は、近代～現代の土取跡を除けば何れも低い面（地形面分類のＬ面）で検出している。検出した遺構の種類、数、所属する時代等は以下のとおりである。縄文時代の竪穴式住居址一棟、平安時代と考えられる竪穴式住居址２棟、縄文時代と考えられる溝状の陥し穴状遺構と不整楕円形の土坑が各１基である。平安時代と考えられる竪穴式住居址は、その一部あるいは半分以上が調査対象区域外にあるためその全容は不明である。これらの分布状態は時代が異なるものの耕地造成前の地表標高93～94mの等高線に沿っている。標高95～98m間の斜面からは縄文時代の遺物は出土しているが、縄文時代・古代の遺構は存在せず、97.5～98mの比較的平坦な所で近代～現代の土取穴４ケ所を検出している。しかし、これらの土取穴については位置概略を記録しただけである。（図版５）

２．縄文時代の遺構

1)　ＢⅣ-01住居址　（図版６、写真図版３、４）

本住居址はＢⅣ－Ｖ区にその大部分が存在し、一部がＢⅣ－Ｕ区にある。本住居址を検出した地点の旧表土面は現表土に比較して平坦であり、また検出層・直上位層ともほぼ水平に堆積している地点である。

検出状況は、基本層の第Ｖu層上面に十和田ｂ浮石混じりの細粒～小粒浮石質青黒色土や細粒浮石質黒色土、炭化物粒の散在していたことによって確認した。なお、北東の一部に木根痕か小土坑かは不明の不規則な撹乱部が認められたが、確認調査することなく住居址の精査を進めた。その結果、この撹乱部の底部で住居址床面の上位４ cm から口縁の一部が欠損した小型の深鉢形を呈する土師器１個が出土している（図版10―16、写真図版16―22）。



図版5：周辺地形と遺構配置

平面形は不整な楕円形を呈し、その規模は長軸上端長346cm（下端長306cm）、短軸上端長290cm（下端長264cm）、壁は最大高28cm、最小高22cmであるが、24～25cmの所が多い。長軸の方向は、ほぼ磁極の南北方向にある。

埋土は、前述の撹乱部を除き作物栽培痕を1層とすれば7層に細別される。埋土全体は構成浮石等の分級が所々に認められることから自然堆積を主体としているが、2a層と2b層の層埋面、および2b層の上部に褐色粘性土や南部浮石の混合した大ブロック土（3層）が散在する。このブロックは、自然層順では入りえない状態であることから人為投げこみの可能性が高い。なお、床面および床面を直接覆う1層や2層の下部には多量の炭伐材・炭化物・焼土がみとめられることから、本住居址は焼失によって廃棄されたものと考えられる。

床は、基本土層に第VI層上部に形成され、全体的に炉の周辺が低く壁よりが高い。また、床土は炭化物・焼土・黒色土ブロックなどが混在し、変色した黒褐色～暗褐色粘性土が3～5cmの厚さで認められるが特に貼床の形跡は認められない。炉周辺と南側壁付近をのぞけば軟らかい。

床面で検出された施設・構造等は、炉址1ケ所、柱穴等の小穴8穴である。また、変色土層下を5～7cmの厚さで除去し、小土坑2基、柱穴等の小穴7穴を検出している。壁際の小穴列・周溝、あるいは出入口部と考えられる施設・構造は検出されていない。これらのうち柱穴・土坑の検出状況・配置から、床面利用のあり方と上屋の改築が考えられる。

壁は、大部分が内湾状～外傾して立ちあがっており、特に壁保護等の施設や貼壁の痕跡は認められない。第Vℓ・Vu層が壁の層となっている。

炉は、焼土（長径32cm×短径26cm）とその南東側に4個の礫が「コ」の字状に配置されているが、北西側の半分ほどには礫および礫埋設痕は認められない。炉床は、床面レベルより約5cm掘りさげられており、埋土は焼土ブロック炭化物を混じえた軟らかい浮石質黒褐色～暗褐色土である。炉床下は、基本土層第VI層が6cmほど赤変し固くなっている。設けられた位置は、長軸線上で中心からやや北に偏っている。

土坑（P—01）：平面形・規模は、上端径が40cm×35cm、下端径22×18cm、深さ40cmほどの楕円形を呈する。断面形は長径・短径方向とも逆台形を呈する。埋土、黒色～黒褐色土ブロックを不規則に混じえた暗褐色土である。

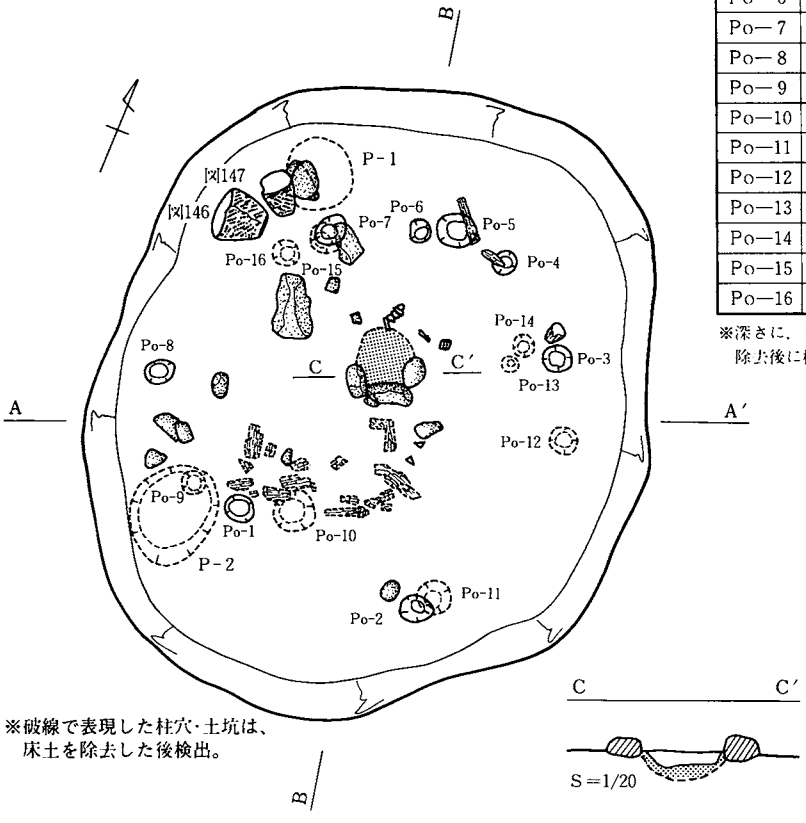
土坑（P—02）平面図・規模は、上端径が54cm×44cm、下端径46×36cm、深さ25cmほどの不整な楕円形を呈する。断面形は、長径・短径ともやや不整な逆台形を呈する。

出土遺物：北西壁近くに粗製の深鉢形土器2個体が傾いた状態で出土している。それらの最も下となる底部縁辺が床よりも2～3cmほど浮いている。2個とも二次火熱を受けており、図版20—147は、火熱によるものかどうか不明であるが、口縁の一部が粉々に破砕しており接合

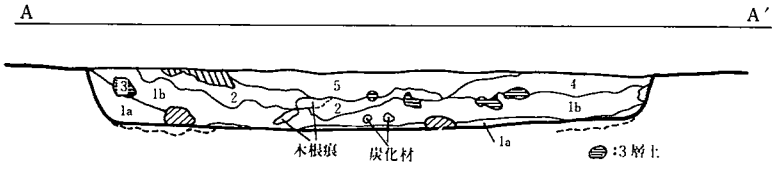
〈BⅣ-01住柱穴様小穴計測表〉

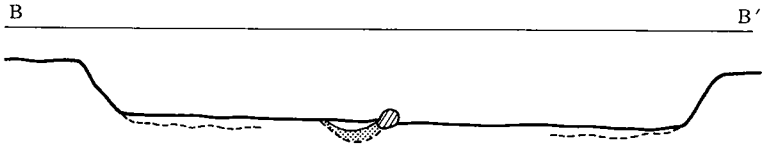
柱穴番号	間口部径	底部径	深さ
Po—1	16×14	8×7	16.0
Po—2	17×15	8×6	13.0
Po—3	16×14	9×8	10.5
Po—4	14×13	8×5	13.5
Po—5	20×17	11×10	9.5
Po—6	12×11	8×6	13.0
Po—7	18×14	8×8	19.3
Po—8	16×13	10×8	15.0
Po—9	14×12	9×8	(27.0)
Po—10	22×22	16×12	(20.0)
Po—11	18×18	9×8	(45.0)
Po—12	15×14	11×8	(21.0)
Po—13	9×8	4×4	(20.0)
Po—14	12×12	9×6	(22.0)
Po—15	17×16	8×7	(45.5)
Po—16	15×14	7×7	(40.0)

※深さに、カッコのついた柱穴番号は、床土除去後に検出したもの。(単位：cm)



※破線で表現した柱穴・土坑は、床土を除去した後検出。





破線は、汚損土(貼床土？)。

図版6：BⅣ—01住居址

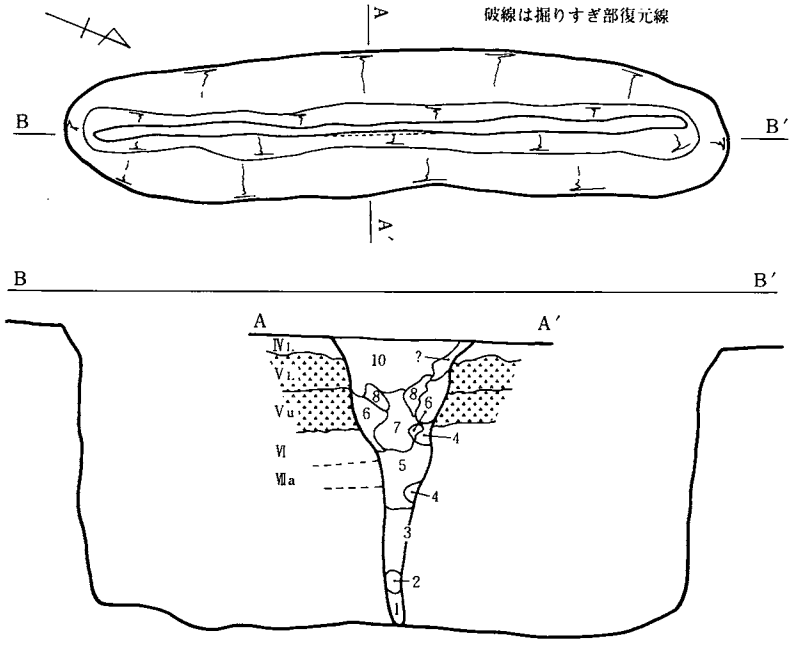
不可能であった。また同図版の146土器は、圧砕されていたが、破片の状態は良好で完形状態に復元している。その他、検出時・精査中に図版16—60・61・63、18—114 、19—128（写真図版11—48・53・61、12—99）など16点の土器片が出土しているが、６点は繊維土器の小破片である。石器・石製品としては、埋土中部から剥片が３点出土しただけである。

2） **ＣⅢ—001陥し穴状遺構**（図版７、写真図版８）

検出された区域は、地形面のＬ面からＭ面へ移行する斜面に近いＣⅢ—Ｅ調査区である。検出状況は、基本土層Ⅳ*u*層およびⅣ*ℓ*層上部を除去したところ、粒径３～５ cmの炭化物や小・中粒浮石が散見される黒色土の広がりを確認したことにより遺構と判断された。

規模は長軸上端353cm（同下端長314cm）、短軸上端長74cm（同下端長４～８ cm）で、底部が非常に狭長な溝状の遺構である。横断面形は、部分によって若干異なるが、全体的に幅の狭いＶ字状を呈する。

埋土は10層に細別されるが、各堆積状況等を考慮すると５つに大別される。１・２層は明黄褐色～黄橙色の浮石質中砂を主体とする層であり、３層は黒褐色土・暗褐色浮石質土を主体に明黄褐色中砂ブロックが混在した層である。５層は中掫浮石・中ブロック・暗褐色土ブロックの不規則な混合層であり、その中にある４層は中掫浮石の大ブロックである。６～９層は、中掫浮石・浮石質黒褐色土や基本土層第Ｖ*u*層のズレ（大ブロック）によって構成される。10層は、小中粒の浮石や３～５㎜の炭化物を含む黒色土である。



図版７：ＣⅢ—001陥し穴状遺構

出土遺物としては、耕作による撹乱部から土師器の破片１点、その他の埋土から縄文土器片２点、調整痕のある剥片１点（図版22—12）が出土している。

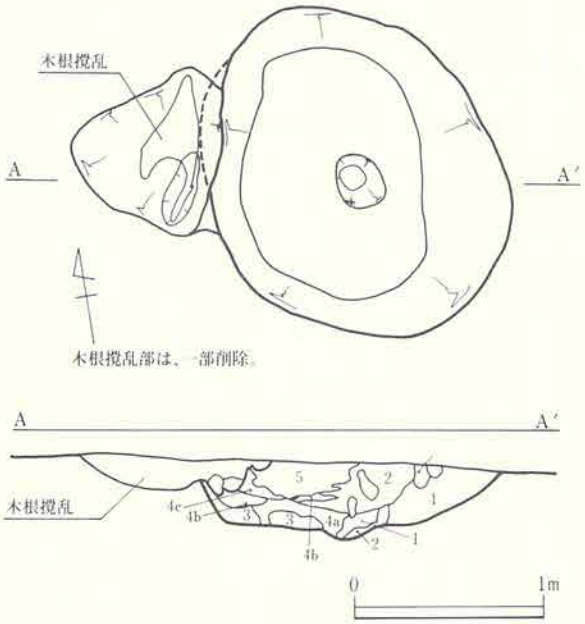
3)　**ＡＶ—001土坑**（図版８、写真図版８）

検出された区域はＡＶ—Ｕ調査区で、地形面分類のＬ面である。検出は、基本土層のＩａ・Ｉｂ層および不連続に分布するII層を除去した段階のVI層である。耕作土表面からおよそ25～30cmの深さである。本遺構やＡＶ—01住居址の周辺は、畑地整備等によるものかその他の原因によるものかは不明であるが、遺構外ではII～Ｖｕ層はほとんど認められず、またＶℓ層とVI層上部が不連続に存在するだけである。検出当初は、本土坑の西側を破壊している木根痕を別な土坑と考えていたが、空洞・樹皮・未分解繊維等の存在から木根痕と判断した。これらの木根部は本土坑にも伸びており、埋土の一部を撹乱している。

平面形は上端径189×152cm・下端径136×98cmでともに不整な楕円形を呈し、深さは36cmである。さらに、底面には径32×22cm・深さ９cmの浅い小穴が認められる。長軸の方向は、上端が北北西 — 南南東にあり、下端はほぼ南 — 北にある。壁は、東側では下端から内湾しつつ緩やかに立ちあがり、西側では傾斜角70度前後で直線的に立ちあがっている。

埋土は５層に区分したが、木根の影響力や大ブロック構成の層も見られる。また、堆積状態から人為的な埋めもどしか、あるいは自然崩落層と考えられる１・３・４層の下部と、指向関係の堆積にある２層・５層（上部）との２つに大別できる。

遺物は繊維を含まない縄文だけの土器片２点が出土しているが、土器片の所属時期を明確にできる状態ではない。



図版８：ＡＶ—001土坑

3．古代の遺構

（1） **ＡＶ―01住居址**（図版９、写真図版５）

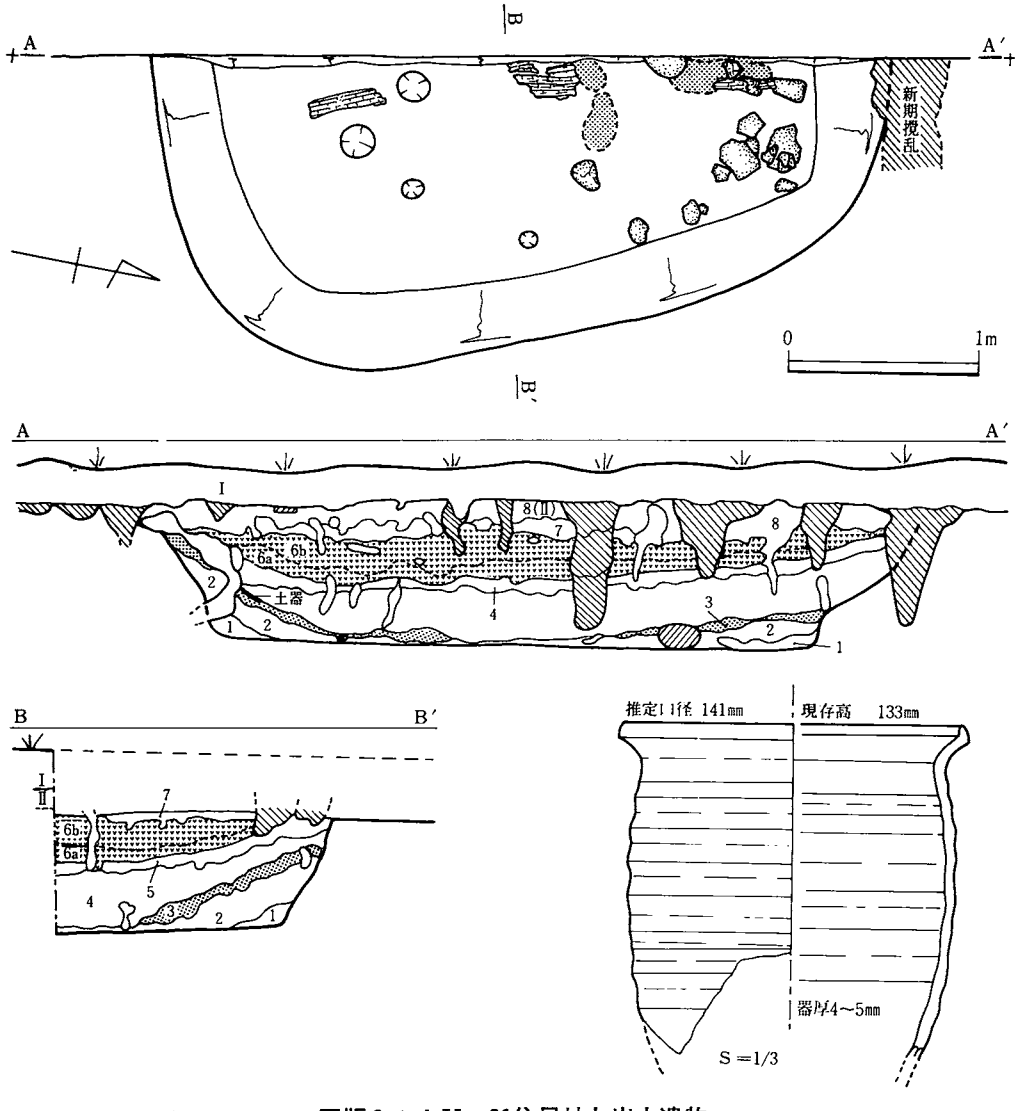
本遺構は、ＡＶ―001土坑と同様、地形面分類のＬ面にあるＡＶ―Ｋ・Ｐ調査区で検出しているが、検出状況は、基本土層のＩａ・Ｉｂ層およびII層（埋土の最上位等に堆積）を除去した段階のVI層上部で、耕作土表面からおよそ25～30cmの深さである。II層は、周辺・遺構部を含めて不連続で薄く、かつ耕作痕による撹乱も多いためII層を除去しIII層の十和田ａ降下火山灰上面の確認によって遺構を明確にした（写真図版７―１）。なお、本遺構の西側は大部分が調査区域外に広がっており、遺構の全容については不明である。

平面形はコーナー部が円くなっており、辺は外方に膨らんではいるが、方形を基調とした形態と思われる。確認した規模は、北西―南東方向の上端380cm・同下端310cm、南西―北東の上端170cm・同下端130cm、壁高は土層断面による深さは62～64cmであるが、埋土の一部となっていたII層等を除去したことにより、50～54cmとなっている。

埋土は除去したII層を含めて全８層に区分される。１層は小粒浮石質暗褐色土（10ＹＲ3/3～3/4）で北隅の壁下では炭化物を含むが他では含まれず全周する層である。２層は十和田ｂ浮石を含む小～中粒浮石質黒色土（10ＹＲ1.7/1）で炭化物・焼土ブロックを不規則に含むが、床中央付近では少なく、北側下部と南・北の３層との層理付近では多い。また、構成粒子は中央では小粒となり、緻密である。なお、３層との層理面を中心として炭化材が分布し、中には床～３層上部に伸びる材も見られる。３層は小粒浮石質の暗赤褐色中砂質度（５ＹＲ3/3～3/5）を主としたものに黒褐色土、黒色土小ブロック（7.5ＹＲ2/1～2/2）や赤褐色の焼土ブロック（５ＹＲ4/6～4/8）が混じり、大～中粒の炭化材片が混在する。また、南側の本層上面（４層との層理面）にロクロ土師器の大破片が存在する。４層は小粒浮石質の黒色～黒褐色土（10ＹＲ2/1～2/3）で、同一層でも地点によって色調・構成混在物が若干異なる。全体的に下部には十和田ｂ浮石・炭化材・焼土ブロックが多い。５層は４層上部層に十和田ａ火山灰が混在した状態の小粒浮石質黒褐色土で、部分によって火山灰ブロック混入量で色調が異なる（10ＹＲ3/1～3/2：2/2～3/3など）。６層は十和田ａ火山灰層である。構成している浮石・ガラス質砂・水成ラミナの介在あるいは色調によって２層に大別される。上部の６ｂ層はラミナとブロック構成層との関係から更に細分可能であるが、区分線が連続しない。詳細については記述を省略するが、水成によるラミナとそれ以外のラミナ・構成物・色調を手掛りとして区分すると噴出単位（ホール・ユニット）が２度以上あった可能性が考えられる。７層はにぶい黄褐色～黄褐色土（10ＹＲ5/3～5/6）を主体とし、十和田ａ火山灰ブロックが不規則に混在し、全体的に６層の撹乱的傾向の強い層である。８層は基本土層のII層である。

床は、基本土層第VI層の中～下部に形成されている。床を形成する土はシルト質～細砂質の黒褐色～暗褐色土（10ＹＲ3/2～3/3）で、上部に炭化物・炭化材小片・焼土、あるいは不規則に黒褐色土ブロックが散在するが、特に貼床を行った形跡は認められない。また、床は周辺を除いて固く締まっている。

床面で検出された施設・構造等は、柱穴状の小穴３穴（Ｐｏ－１、Ｐｏ－２、Ｐｏ－３）であるが、Ｐｏ－２は埋土上部から形成されており、その南東側にある炭化材を破壊している。Ｐｏ－３・４は、細い杭状の痕跡で、柱穴とは考えられない。Ｐｏ－１は、深さ８ cm と浅いものである。その他、構造物ではないが、カマドに使用したと思われる板状切り石の破砕され



図版９：ＡＶ―01住居址と出土遺物

たもの12点、比較的偏平な巨円礫２個が確認されている。これらは何れも強い火熱を受けており、切り石片の一部には炭化物膜も付着している。その他の柱穴状小穴・壁柱穴列・周溝、カマドは確認されていない。

出土遺物：前述の埋土３層上面から出土したロクロ成形の土師器カメ破片（図版９、写真図版16―18）、２層下部から縄文土器片数点、板状礫片出土周辺から土師器カメの細片が数点出土しているがロクロ成形の土師器を除くと調整等が不明瞭である。

（２） **ＣⅣ―01住居址**（図版10、11、写真図版６、７）

本住居址は、不連続ながら広範に分布する十和田ａ火山灰層の一部が基本土層第Ⅳｕ層に落ちこんでいることから遺構と判断したものである（写真図版８－１）。遺構はＣⅣ―Ｋ・Ｐ区にその大部分が広がっているが、ＣⅢ―Ｏ・Ｔ区、ＣⅣ―Ｌ・Ｑ区にも広がっている。本遺構の周辺の基本土層は、住家等の建造物基礎のためＩａ層・Ｉｂ層は不明であり、Ｉｃ・II・III層が存在する。しかし、Ｉｃ層からIII・IV層まで長薯栽培の跡が多数観察され、これらは遺構の一部を破壊している。また、現県道「三十刈～家ノ上線」際で検出し、道路保全の必要から一部を確認調査できなかったものである。表土から確認面までの深さは45～55cmである。

平面形・規模は一部が不明であるが、北西辺が上端710cm・同下端660cmで、その中央よりわずかに南西よりにカマドが設けられている。北東辺はやや外方へ張り出しているが、上端470cm・同下端452cm、南西辺上端406cm・同下端380cmを確認している。本住居址の全景は、図示したように南西辺と北東辺の一部が不明であり、特に南東辺は全く不明である。しかし、おおよその平面形は、破線を含めて図示した台形を呈するものと考える。壁高は、南西辺が41～47cm、北西辺は45～31cmカマド付近は34cm前後である。北東辺は25～40cmである。

埋土は７層に細分される。１～５層は十和田ｂ浮石・炭化物・焼土粒等を含む浮石質黒色土であるが、１層および３ａ層の下部には焼土粒・炭化物が多く含まれ、一部の壁も赤変している。また、５層中には上位の十和田ａ火山灰が木根痕等を通して侵入しており、やや灰黒色を呈する。６層は十和田ａ火山灰層で基本土層の第III層であり、上位の７層は小～中粒浮石質の黒色土層（基本土層第II層）である。その他、埋土断面図中に右下りのハッチングで示した部分は長薯栽培の耕作痕等であり、極新期の撹乱部である。

床の大部分は第IV層上部に形成されており、北北東～東壁付近には汚れたＶℓ層がまだらに分布している。西～南西側には広く貼り床が認められ、この床土を除去したところ漣状の工具痕跡が広がっていた。貼り床に用いられた土は中掘浮石を多量に含んだものであり、カマド周辺では固く締まっている。

カマドは北西壁の中央付近に設けられているが、袖部等のカマド本体部は最奥に設置された礫１点を除いて崩壊しており、燃焼部の上や周辺に散乱した芯材の礫や袖部等を形成した灰褐色細砂質粘性土を確認しただけである。燃焼部の床面は、幅60cm・奥行40cm・厚さ８cmの範囲が明瞭に赤変している。煙道部は幅60～80cmで壁上端から外方へ約160cm延びており、煙道部底面は凹面をなして燃焼部最奥から煙道部下端に向かって傾斜している。煙出し部直下の深さは、検出面から約95cmの深さとなっている。煙道部の埋土は、下半が焼土・炭化物・獣骨片（骨粉状）を主体とした暗褐色浮石質層、浮石質黒褐色土、カマド形成土、中振浮石などが堆積し、煙出し部直下では十和田ａ火山灰のブロックが中ほどと上部に混在する。上部の埋土は基本土層の第Ⅳ層であるが、本来の層レベルよりも陥没した状態を呈している。

柱穴はＧ・Ｉ・Ｊ・Ｋの４穴を確認している。柱穴類似の小土坑としてＨが存在するが、Ｈの確認は貼床土や汚損床土を除去した段階で確認したものであり、深さも他の４穴に比べて３分の１～４分の１と浅いこと、また埋土の状態が異なるところから柱穴とは考えられないものである。Ｇ・Ｉ・Ｊ・Ｋの４穴の底面は、２段あるいは２面の固く締った部分が認められたが、埋土の状態は十分に観察できなかった。なお、柱穴のＫは、その上部に土師器のカメ形土器が落ちこんでおり、柱穴南側の床面に存在した破片と接合し、１個体の土器として復元した（図版10―４）。

壁は貼りつけ土、叩き固め、あるいは矢板材等の打ちこみ痕跡が認められないこと、また壁に沿う小穴列や周溝等も認められないことから、素掘りのままと考えられる。

出土遺物：埋土中から縄文土器片と剥片、床面から土師器の坏形土器・カメ形土器、須恵器の坏形土器、土製玉、砥石、鉄製品が出土している。（図版11―１～７、10―１～15）。土器は柱穴Ｋの上部から出土したカメ形土器を除けば何れも完形品とは言えず、一部あるいは50％以上を欠失している。なお、図版10-1～15に図示した遺物は何れも床面および煙道煙出し部から出土した資料である。床面から出土した遺物の多くは、二次火熱によるものと考えられる変色を生じている。

（坏形土器）　土師器坏形土器は２個体分出土している。何れも完形復元はできなかったが、器形をうかがう程度に復元できた。図版10-1は、ロクロ成形の糸切り底で底部周辺は手持ち？ヘラ削り調整がなされている。また内面は黒色処理、および口縁付近が横位のヘラミガキ調整されている。なお、本資料の器外面の下半には、底部切り離し時に生じたと考えられる２条１対の螺旋状の線条痕が数組認められ、条痕は特に調整されていない。図版10-2は、高台付の坏形土器で、外面の口縁付近と内面全体にヘラミガキ調整が認められ、また内面は黒色処理が施されている。須恵器坏形土器は２個体分の破片３点が出土しているが、全体をうかがい知るほどの破片ではない。図版10-3は、底部を除いた約３分の１ほどの破片である。

（カメ形土器）　カメ形土器は、何れも土師器であり、須恵器のものは認められない。カメ形土器の製作方法には　1)輪積み成形、ヘラケズリ・ヘラナデ・ハケメ調整によるもの（図版10―４・６・７・８・10・11）、2)輪積み成形、ヘラケズリ・ヘラナデ調整、およびロクロ調整を併用したもの（図版10―９）、3)ロクロ成形・調整によるるもの（図版10―５）の３種類が存在する。2)と3)の体部下半あるいは底部の状態は不明であるが、1)の底部はヘラケズリ調整、木葉痕、砂目痕などが認められる。

（土製玉）　比較的カマドに近い床面から２点出土している（図版10―12・13）。何れも平玉状のもので直径12～13mm、厚さ10～11mmで、ほぼ中央に径２～３mmの穴があいている。

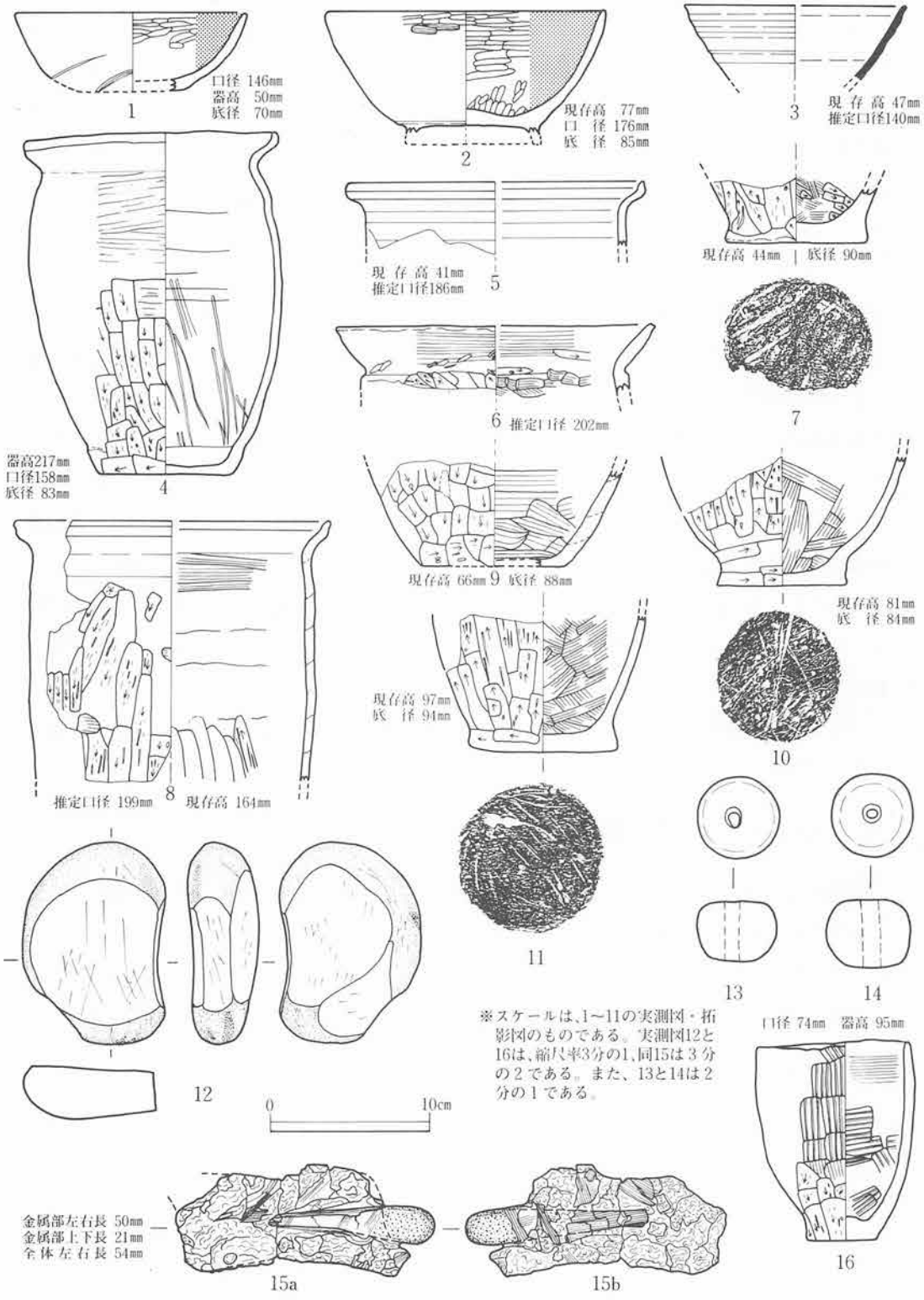
（鉄製品）　うすい板状の鉄を木製の摘み、あるいは把りと考えられるものに挟みこんだもので、図下側が刃部、上側が棟と考えられる刃器である。木質は炭化し、全体的に錆化に伴って錆化物の中に浮石や砂粒がとりこまれている。また、図破線部が新期の破損によって不明である。

（石製品）　明らかな石製品としては、砥石（図版10―14）だけである。本資料は、自然礫の大別３面を使用面としており、特に成形加工の痕跡は認められない。石製品とは言えないが、何らかの作業用台石と考えられる巨礫１点がカマドの前にある。使用痕跡としてはわずかな粗い敲打痕と、自然剝離か使用による剝離かは不明であるが、ハゼ状の剝離が上面に認められる。

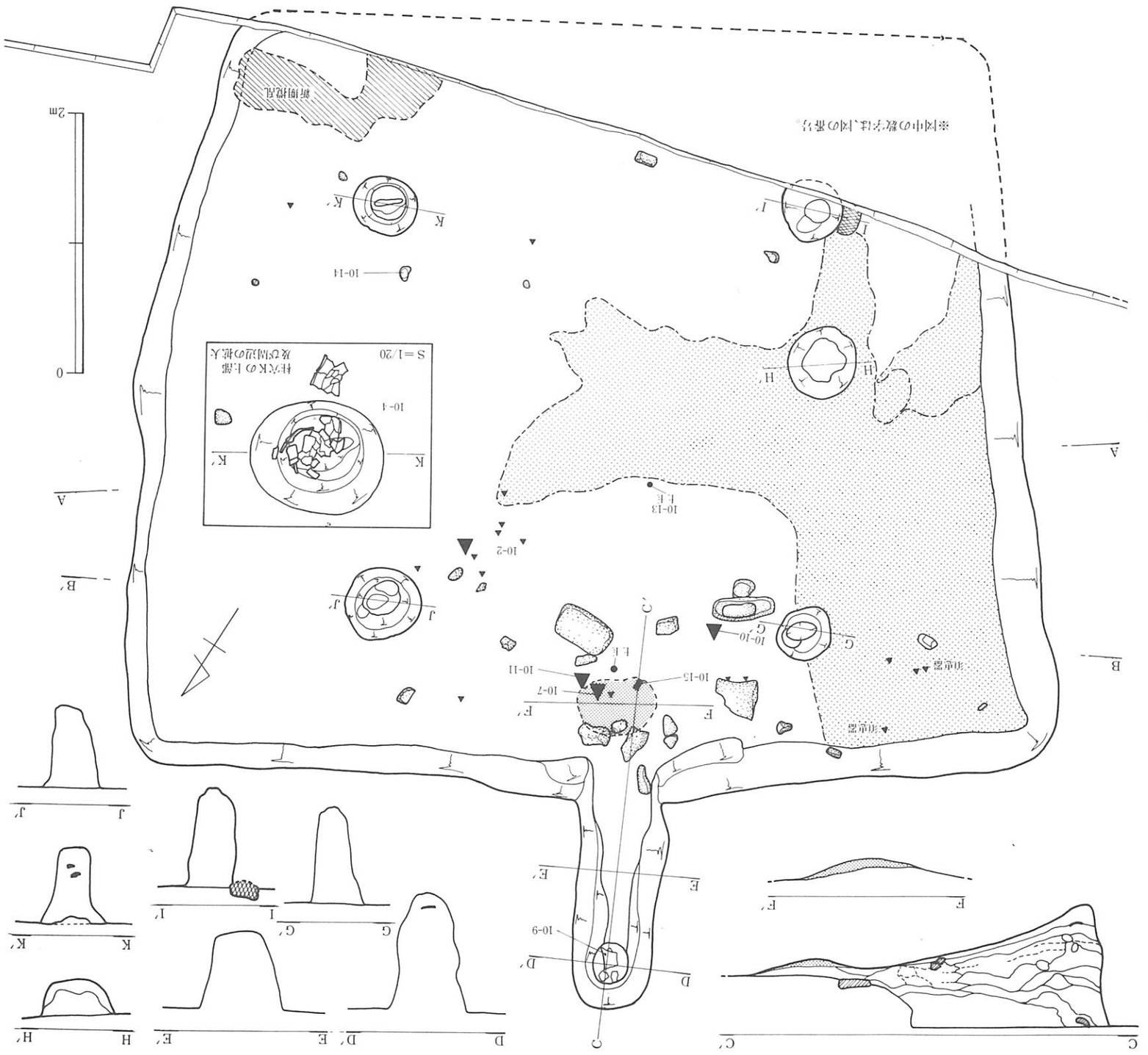
（その他）　焼土周辺、および煙道部底面から焼変した獣骨片が出土しているが、骨分状であり、動物種や部位等も全く不明である。

４．近代・現代の遺構等

近代・現代の遺構や活動痕跡としては、土取跡、多数の農作物栽培痕跡、畑地整地層、そして住家等の建物跡が確認されている。これらの活動痕跡については特に記録は行っていないが、土取跡と建物跡については遺構配置図（図版５）に位置と平面規模を示している。また、長薯等の農作物栽培痕は、遺構埋土の断面図中や検出状況写真の中に一部を記録している。



図版10：CⅣ—01住居址出土遺物(1) 他


※図中の数字は、図の番号。
新期掘乱
10-14
10-13
10-2
10-4
10-7
10-9
10-10
10-11
10-15
土器
石器
柱穴Kの上部
及び掘込の底入
S＝1/20
0
2m
※実測図５はスケール約10cm。
0
5cm
※拓影のスケール。

Ⅳ．遺物について

1．土器・土製品

本遺跡で出土した土器は、繊維を含む斜行縄文だけの一群（第Ⅰ群土器）、縄線文・木目状撚糸文・刺突文・隆帯で文様が構成される一群（第Ⅱ群土器）、楕円形の区画文を主文様としその内外を磨消したり、刺突文を加えたりする一群（第Ⅲ群土器）、並行する沈線に挟まれた縄文帯・磨消縄文帯が曲線状あるいは直線状など種々の文様を構成する一群（第Ⅳ群土器）、そして土師器・須恵器の古代土師器（第Ⅵ群土器）が出土している。土製品は、土器片を利用して製作された円盤（土器片製円盤）一種類だけである。なお、調査中には縄文時代晩期かと思われる土器もみられたが、整理の結果第Ⅳ群土器の一部であることが判明した。

各土器群の出土層位は、第Ⅰ・Ⅱ群土器がⅤu・Ⅵ層から出土しているが、一部の地点では第Ⅲ・Ⅳ群土器に混在し、Ⅳℓ層からも出土している。第Ⅲ群土器は、BⅣ区を中心としたⅣℓ層から、第Ⅳ・Ⅴ群土器及び土器片製円盤はⅣu・Ⅳℓ層から出土している。第Ⅵ群土器の土師器・須恵器は少数の小破片や近代・現代の撹乱部を除けば、２棟の古代住居址内から出土しているが、小型の土師器１点は縄文時代の住居址撹乱部から出土している。

第Ⅰ群土器（図版12～15、写真図版９・10）

口縁部文様帯をもつもの、もたないものとが存在するが、口縁部文様帯をもつものでは胴体部とを区別・区画するような隆帯・沈線は施されていない。器形が明瞭なものはないが、口縁は平縁で、底部は平底であり、口径・底径の比が大きいものと小さいものとが見られる。胎土には、繊維を含むがあまり多くはなく、また一部には繊維束状の痕跡も認められる。文様は、口縁部文様帯として連続穴結節回転による綾絡文や、少数ながら押圧縄文が施されるものがあり、胴体部には単節・複節・異条などの斜行縄文が施され、特に文様帯をもたないものの場合、全体に斜行縄文が施される。なお、一部の土器では口縁上端に指頭等による押圧、棒状工具による刺突をもつもの、そして底面に縄文をもつものもある。

１類土器

口縁部文様帯をもち、この文様帯には連続結節回転文（綾絡文）が横位に施され、体部には単節・複節・異条の斜行縄文が施されるが、他の文様や隆帯は施されない。器形は、平縁・平底の深鉢形土器で、口径・底径比が大であるもの（図版12―１・２・３、写真図版９―１・２・３）と、この比が小さいもの（図版12―９、写真図版９―８・９・10）とがある。しかし大部分が破片であり、器形全体については不明瞭である。

口縁部文様帯のあり方については、a)口唇直下に地文部が認められず、また地文と重複施

文されない。（図版12―１・２、13―10・11・12、写真図版９―５・11・12）

b)口唇直下に地文（ＬＲℓ、ＬＲｒ）部が15～25cm認められ、その下位に地文に重ねて綾絡文が施されるもの（図版12―４・５・６・７・８、13―13・23・24、写真図版９―６・19・15・17・13、13―23）

c)口唇直下に地文部が認められないが、地文である各種斜行縄文に綾絡文が重ねて施されている（図版13―14・15・16、写真図版９―４・７）の３種が存在する。

胴体部の文様（地文）には、斜行縄文（単節・複節、異条縄文）が認められるが、その他の撚糸文や多軸絡条体によるものなどは認められない。斜行縄文は、概ね条が斜行するものがほとんどであるが、部位によっては横走するものも認められる（図版14―27・31・34）。

２類土器　（図版13―20・21、14―41．写真図版９―16）

第１類土器のc)と同様の文様構成をとるが、口唇上端に指頭等による押圧や棒状工具による刺突が認められる。また、器形は口縁部が若干外反するが、胴体部の状況については不明である。

３類土器　（図版14―29・30、写真図版９―14）

口縁部文様が綾絡文をとらず、平行あるいは斜行する押圧縄文を施したものである。一部に、地文と重複する部分が認められるが、第１類b)・c)のような重複ではない。器形は、平縁・平底の深鉢形土器と思われるが不明瞭である。

４類土器　（図版13―22、写真図版９―21，10―41）

口縁部文様帯・隆帯等をもたず、地文（斜行縄文LRℓ）だけのものである。器形は、平縁・平底の深鉢形土器と考えられ、器壁の傾斜復元から口径・底径比が大きいと思われる。

第Ⅱ群土器

本群土器としたものは（図版15―42～48、写真図版10―22・23・24・39・40・44・45）の資料である。土器型式の分類では、２型式に区別されるものである。

１類土器（図版15―45・46・48、写真図版10―39・40・44・45）

口縁はゆるやかな波状（４波状？）を呈し、口頸部文様帯と体部文様帯とが、施文手法の違いによって区別されている。明確な隆帯はもたないが口頸部器厚は、胴体部のそれに比べてやや厚く、縄の圧痕（縄線文）によって文様が施され、また口頸部文様の最下部には円形の刺突列が施されている。胴体部文様は、木目状撚糸文が全面に施されている。胎土は、小礫・沼鉄・小粒浮石が散見され、極少量の短い繊維痕が観察されるが内面は丁寧にナデられている。

２類土器　（図版15―42・43・44・47、写真図版10―22・23・24）

２～３条の細い隆帯が頸部に施されており、その隆帯上には円形の刺突列が施されている。

隆帯の上・下位には斜行縄文が施されているが、何れも破片のため上下の文様構成等は不明である。胎土には小礫・沼鉄・小粒浮石を含むが、繊維の痕跡は不明である。

第Ⅲ群土器　(図版16—52～70，17—71・72、写真図版11—47～65)

沈線による縄文区画文を形成する一群の土器である。この区画文は縦長の逆「u」字状や楕円区画文、あるいは横位の楕円区画文で、器面全体にわたって展開されるものと思われる。区画文の内外には磨消縄文の手法がとられており、a)逆u字状の区画文では区画外が、b)縦長楕円区画文では、区画内が磨消されるものb_1）と区画内が磨消されるものb_2）とが見られる。また横位の楕円区画文では区画外が磨消されているc)。また、磨消された区画内や、渦巻状沈線の間に棒状工具や竹管によって刺突文が施こされるものも認められる。

器形は、キャリパー状深鉢の名残りを示すもの、倒卵形を示すものなどが見られるが、何れも破片のため明確ではない。

第Ⅳ群土器　(図版17—73～93，18，19—119、写真図版11—66～92，12，13—102～104・107・132)

比較的細い並行沈線による帯状の縄文帯・磨消縄文帯により文様を展開するものを主体とするが、無文地に方形の沈線区画文わとるものや、鎖状その他の沈線（比較的太い沈線）と貼付文とが組み合わせるものなどが含まれる。また、本群1～4類土器と同時期と考えられる縄文・撚糸文などの土器も本群の5類土器とした。何れの資料も深鉢形土器の破片である。

1類土器　(図版17—73～84，86～93，18—94～105・116～118・119)

器形は、波状口縁が主であり、口縁下部～頸部がゆるくくびれ、胴体部がやや膨れる。文様は口縁に並行する2～3条の沈線と、沈線間に狭い縄文帯が施され、それらの下位には帯状の縄文帯・無文帯によって入組文・渦巻状など種々の曲線状文様やカギ状の直線状文様が展開されている。

2類土器　(図版17—85，18—110・112・115)

器体全体については不明であるが、無文地に沈線による区画文が施され、磨消縄文手法や充塡縄文の手法がとられているものである。110では波状部に隆帯状の貼付がなされ、その上に刺突文が施されている。

3類土器　(図版18—106～109・111・113)

縄文地（LRℓ）に並行する曲沈線、鎖状沈線による文様が主体をなし、一部の並行沈線間は磨消されている。更に、それに粘土貼付により有尾四肢獣状の浮文を施している。頭部は、破損により欠落し、浮文の周囲には長短の平行する沈線が縦横に施されている。

4類土器　(図版20—141～144)

2種類の土器を一括した。141・142の波状口縁部の破片2点は、胎土が1～3類と異なり、143・144と近似するものである。文様は細い斜行縄文地に平行する縦位の沈線を施し、一部を磨消し、また波状項部には2～3条の沈線状の刻みが施されている。143・144は無文研磨地に沈線文が施されているが、沈線による文様構成は不明である。

第V群土器　(図版19—120～139, 20—140・145・148～153、写真図版13—105・106・108～136)

出土状況から第III群土器・第IV群土器の1～4墨に伴うと考えられる単軸絡条体回転文、沈線を伴わず無文地・縄文地の土器、底部周辺資料を本類とした。

a)　山内清男1979による単軸絡条体第2類に担当する一群（図版19—120～130）。

本種撚糸文は、文様表出の状態が山内の呈示したものとはやや趣が異なるものの、原体構造がほぼ一致することから、同絡条体の変異と考えられる。器形は、口縁部が外反～やや外傾し、頸部がゆるくくびれ、胴部が膨む深鉢形土器と考えられるが、口縁形態は平縁なのか、ゆるやかな波状を呈するのか判然としない。

b）山内による単軸絡条体第5類に分類される縄文（網目状撚糸文）。

(図版19—131～134)

破片で見る限りは、あまり屈曲の見られない深鉢形土器のようであるが、推定は困難である。

C)　斜行縄文が主体となっているが口縁部に無文帯をとるものも見られる。器形は、波状口縁や平縁に山形突起をもつものなどが見られ、縄文は縦位方向の回転によって施されているものが多い。（図版19—137～139, 20—140・145・151・153）

d)　全体的に底部周辺資料は少ないが、図示した4点の資料は底面に双子葉植物の葉圧痕（148）や笹等の単子葉植物の葉圧痕（149・150）、アジロ痕とその他の圧痕が重複したもの（152）である。図示資料における器面調整・底部縁調整・整形にはヘラケズリ・ナデの手法がとられているが丁寧なものではない。

第VI群土器

古代の住居址から出土した土師器・須恵器を本群とする。各資料の特徴等の説明は、各遺構の出土遺物の項の中で説明しているので本項では省略する。

土製円盤　(図版21、写真図版14—141～155)

本稿で土製円盤としたものは、土器片を打ち欠き、一部の研磨の製作方法によって不整円形、隅円の方形・長方形などに加工・仕上げしたもので、「円盤状土製品」「土製メンコ」などと呼ばれることもある。本遺跡では15点出土しており、その製作方法は2点が打ち欠きと一部研磨の方法を併せもっているが、他の13点は、打ち欠きだけによる。また、完形と考えられるものは15点中12点で、3点は2分の1～3分の1を欠損している。

本種遺物に利用している土器破片は、深鉢形土器の胴部付近のものと、底部を利用したものとがある。文様は、単節の縄文だけのもの8点、縄文・沈線文あるいは磨消縄文などのもの4点・無文研磨だけのもの2点、底部利用のものはアジロ痕1点が見られる。なお、縄文だけの文様をもつもののうち、1点は胎土に繊維を有するもので、縄文時代前期前葉？の土器破片を用いている。出土状態は、他の土器片・石器等と同様に大調査区のBⅢ・BⅣ・CⅢ・CⅣの区域に集中しており、CⅣ—Ⅰ小調査では耕作土からの出土を含めて6点出土している。しかし、特に集中集積の状態での出土ではない。

用途については、編物等の錘具説，土器補修用説，祭祀などがあるが何れも定説には至っていない。当遺跡では、前述の説等を肯定あるいは不定できるような遺物の出土状態は確認されていない。

2．石器・石製品

石器・石製品の出土量は少なく、また剥片石器では定形性のある器種が少ない。石器・石製品が所属する時代は、出土層位・形態・製作方法などから数点の礫石器を除けば、何れも縄文時代に属するものと考えられる。

＜剥片石器＞

1)　石　鏃　(図版22—1・2・4、写真図版17—1・2・3)

明らかに本種石器と考えられるものは2点、疑問のあるもの1点の、計3点が出土している。これらのうち（図版22—1・2）は、横長剥片を素材とし、片面の一部に素材剥片方面を残した平基～弱凹基の無茎石鏃である。図版22—4は粘板岩製で、先端よりまたは茎部を欠損していることや、調整加工の状態が他の2点と異なることから石鏃とは断定しがたいものである。

2)　尖頭石器　(図版22—5・7・8、写真図版17—4・5・6)

明確に石鏃あるいは石槍と分類しかねるものを本種とした。22—5は縦長剥片を素材とし、両面には縁辺からの調整剥離が施されているが、各剥離の状態は均質ではない。また、両面とも素材剥片の剥離面を残している。22—7は、横長剥片を素材とし、剥片端側を折断調整した

のちに縁辺調整の加工を行っており、両面には剥片剥離面が広く認められる。22—8も横長剥片を素材とし、主要剥離面側は打瘤部および打点周辺を調整しているが、剥片端周辺は全く成形調整が施されていない。背面は、先端および図の左右から調整加工がなされているが、図下半の白ヌキ部が大きくハゼ剥離を生じている。

3) 掻　器　(図版22—10・12, 図版23—14・15、写真図版17—11・13・14・15)

定形的形態のものは認められず、何れも剥片端、あるいは側縁などに並行する剥離調整などを施し、刃部としているものである。これらは、①剥片端の突出した一部に浅く急角度の剥離調整を施し、エンドレスクレイパー様の刃部を形成しているもの（図版22—10）、②剥片端側の一部に浅く角度の並行する剥離調整を施し、湾入状の刃部を形成しているもの（図版22—12）で、左側縁、剥片端右側、そして基部側が折断？されている。③剥片長軸の側縁に急角度で並行する剥離調整を施し、刃部を形成しているもの（図版23—14・15）である。23—14は縦長剥片を素材とし、両面から剥片の左側縁を湾入状に調整し、刃部としている。右側縁に見られる表裏の不規則な剥離は、調整剥離と思われるものも認められるが、大部分が使用その他による剥離と考えられる。

23—15は、横長剥片の剥片端側に急角度の並列剥離によって刃部を形成している。調整剥離の大部分は、背面側に認められるが、主要剥離面側にもわずかになされている。

4) 調整痕・使用痕の見られる剥片　(図版22—9・11, 23—16～18、写真図版17—10, 18—16・17)

剥片の一端、あるいは側縁に不規則な調整剥離や使用痕跡をもつものとして図版22—9・11, 23—16～18の5点が存在する。

22—9は棒状剥片の剥片端側で、打点・打瘤周辺は除去？されていた素材である。一部に使用によると考えられるウロコ状剥離が認められる。22—11は、打面形式がなされた剥片で背面および主面の各左側の一部に調整剥離が認められ、剥片端の表離には使用によると考えられる不規則なウロコ状剥離などが認められる。23—16は、打瘤を除去しているが、他には加工調整は認められず、縁辺には使用等によると考えられる不規則な剥離が認められる。23—17・18は、自然面を残す大型の剥片で加工・調整と認められるものは打面形式および残庇除去の剥離だけである。側縁には、使用等によると考えられる不規則で微小な剥離が認められる。

5) その他

特に調整・加工の認められない剥片12点が存在する。これらの中には、側縁に不規則な小剥離をもつものもあるが、使用による剥離とは考えにくいものである。

＜磨製石斧・打製石斧＞　(図版22—13, 28—47、写真図版18—19・18)

1) 磨製石斧　(図版22—13)：刃部は、刃面刃縁が弱凸する蛤刃の石斧で、基部は折損後に

2次加工によって整形されている。刃面・主面を区別できる明確なしのぎは認められない。

2) 打製石斧 (図版28—47) ：打製石斧としたが、土掘具としての用途が考えられるものである。素材は偏平円礫を分割した剝片状の板状素材で、分割時に生じた打瘤の除去・側縁の鋭角部潰し、そして刃部形成の加工を施している。しかし、剝離・潰し以外の加工調整（敲打・研磨）は認められない。

＜礫石錘＞ (図版28—49、写真図版18—26)

扁平な円礫の短軸両側縁に、敲打剝離により紐掛け部と考えられる抉り部を形成したものである。敲打剝離以外に、研磨加工痕や樹脂・変色などによる緊縛痕跡は認められない。

＜石製円盤＞ (図版23—19・20、写真図版18—20・21)

石製円盤としたのは、偏平、板状の礫を利用して円盤状に加工、仕上げをしたもので、2点出土している。この2点は、製作、加工の方法によって2種類に区分される。

①偏平、板状の礫の周辺に打ち欠き加工を施して、不整な楕円形に仕上げたものである。打ち欠きは片面からで、その断面形は台形状となっている。(図版23—19、写真図版18—20) 2平坦面には、研磨痕跡や敲打痕跡などの製作・使用等の痕跡は認められない。

②偏平、板状の礫の周辺に研磨面が認められるものでほぼ円形であると考えられるが、2分の1前後を欠損しているため全形については不明である。また、1平坦面には加工研磨とは異なる擦痕が認められ、周辺や平坦面の一部には打ち欠きによると考えられる剝離が認められる。この剝離の存在から、本石製品は打ち欠き→研磨の工程を経ているものと考えられる。(図版23—20、写真図版18—21)

＜塊石器＞ (図版24, 25, 26, 27, 28、写真図版18)

擦石・磨石・敲石・ハンマー・クボミ石などと呼称される礫塊石器、および半円状打製石器と呼ばれるものを一括した。これらは、一個体に単一の作用痕跡だけをもつものは少なく、2種類以上の作用痕跡を併せもつものが多い。

1) A 種：断面形が楕円形を呈する偏平な円礫の1面あるいは2面に、摩滅・摩耗による光沢面・滑沢面が広く形成されており（A—1）、礫の長軸端周辺や側縁の一部にB種に見られるような敲打痕面を併せもつもの（A—2）、摩滅面に集中するペッキング様敲打痕面が重複形成されているもの（A—3）などが見られる。更に、A—1，A—2の作用痕を併せもつもの（A—4）も見られる。

A—1：図版24—22・23　　A—2：図版24—21・25

A—3：図版24—24　　A—4：図版25—27・28・32

2) B 種：偏平な楕円礫の一側縁、あるいは周縁の一部に敲打または擦る作用によると考えられる細長い作用痕面をもつものである。本石器種の主作用痕と同様の痕跡はA種でも認められ

ている。また、平坦面の一部には不規則ながら、集中する敲打痕を併せもつものも見られる。（図版25—33，図版26—35・37・38・39）また、図版27—40は、偏平な礫の周辺を敲打剝離によって半円状に成形しているが、この成形痕以外の作用痕は、本種とした他の石器と同様であることから、本種の一部とした。

3) C　種：円礫の比較的平坦な面に集中する敲打痕をもつもの（図版24—26，図版25—29・30・31，図版27—43）と、平坦面以外の周辺や礫長軸端に敲打痕をもつもの（図版26—34，図版28—46・50）などが、存在する。図版26—34はわずかに線状の敲打痕が認められ、敲作用を行った結果、その作用部に剝離を生じたものと考えられることから本種の一部とする。

4) D　種：クボミ石（凹石）と呼ばれるもので比較的偏平な礫の1面あるいは2面に集中する敲打作用の結果、凹部が形成されているものである。凹部の形成状態は1面に1ケ所のものと、数ケ所のものとが存在する。（図版27—41・42・44）　図版27—41は、礫長軸の1端および側縁の一部にB種・C種に認められる作用痕を併せもっている。

5) E　種：礫の長軸端付近の比較的平坦な部分に摩滅によると考えられる滑沢面をもつものである。（図版27—45）

6) F　種：扁平な巨礫の周辺が敲打剝離によって整形されていると思われ、その1平坦面には不規則に散在する敲打痕と摩滅痕とが認められるものである。（図版28—48）

3．金属製遺物

金属製遺物としては、CⅣ—01住居址出土の鉄製刃器、大調査区BⅡ区の土取跡から出土した釘・煙管の雁首が存在する。CⅣ—01住居址出土の刃器については、遺構の項で説明しているので本項では省略する。

1)　釘：釘は、その形状・製作方法から2種類が存在する。1種類は、角釘とか和釘と呼ばれる手打ち鍛造によるものである。他の1種類は頭部が円く平坦で、脚部が円柱状を呈するものである。角釘の頭部形態は平頭と平折との2種類が見られるが、寸法については錆化・折損のため不明である。また、後者の釘は、“普通丸釘”と呼ばれるもので線材を機械加工したものと思われる。寸法は、3寸と2寸5分である。

2)　煙管の雁：銅合金（青銅？）の板材から成形したもので、合せ目が左側にあり、火皿部は欠損している。なお、内部には炭化した羅宇（竹類）が残っている。（写真図版16—24a・b）

表1：石器・石製品計測表

図版番号	出土区・層位	法量 (mm, g)				岩質・産地・生成年代	写真図版	備考
		長さ	幅	厚	重量			
22—1	CⅣ-G-u	29	14	5	1.6	チャート・北上山地・中生界	19—1	
22—2	BⅢ-0Ⅳ	28	16	4	1.4	凝灰質珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統	19—2	
22—3	CⅢ-Ⅰ-Ⅳu	43	19	8	5.04	粘板岩・奥羽山地・中生界	19—9	
22—4	CⅣ-01住	29	12	4	1.74	粘板岩・奥羽山地・中生界	19—3	
22—5	BⅤ-A・F-Ⅴ	33	18	6	3.55	粘板岩・奥羽山地・中生界	19—6	
22—6	CⅣ-01住	28	21	8	4.45	チャート・北上山地・中生界	19—7	
22—7	CⅣ-01住	29	9	4	1.05	玻離質流紋岩・北上山地・中生界	19—5	
22—8	CⅣ-01住	19	12	6	2.35	輝緑凝灰岩・北上山地・中生界	19—4	
22—9	CⅣ-01住	20	16	8	2.80	チャート・北上山地・中生界	19—10	
22—10	BⅣ-P-U-Ⅳ L	45	39	11	17.8	玻離質流紋岩・北上山地・中生界	19—13	
22—11	CⅢ-001陥し穴	29	26	7	4.4	チャート・北上山地・中生界		
22—12	CⅢ-E-Ⅳ L	35	42	6	9.05	チャート・北上山地・中生界	19—11	
22—13	CⅤ-Ⅰ盛土	39	28	9	19	チャート質淡緑色凝灰岩・北上山地・中生界	20—19	
23—14	CⅣ-A-Ⅳ	101	42	19	46.6	粘板岩・奥羽山地・中生界	19—15	
23—15	CⅣA-Ⅴu	75	43	8	35.85	粘板岩・奥羽山地・中生界	19—14	
23—16	AⅤ-F-K-Ⅳ	49	49	10	20.06	硬質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統	19—12	
23—17	BⅢ-Y-Ⅳ L	96	54	28	160	凝灰質珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統	20—17	
23—18	BⅢ-R-Ⅳ L	81	90	17	155	珪質泥岩・奥羽山地・新第三系中新統	20—16	
23—19	BⅢ-QR-Ⅳ L	44	43	12	36.94		20—20	
23—20	CⅣ-B-Ⅳu・Ⅳ L	40	22	10	12.1	両輝石安山岩溶岩・奥羽山地・第四系	20—21	
24—21	CⅣ-D表土	150	80	67	1.275	花崗閃緑岩・北上山地・中生界		
24—22	BⅣ-QⅣ L	79	62	58	312	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
24—23	CⅡ-A-Ⅳ	92	69	45	395	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
24—24	BⅢ-E-Ⅳu～Ⅳ L	126	82	54	755	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—22	
24—25	CⅣ-01住	105	81	62	807	花崗閃緑岩・北上山地・中生界		
24—26	AⅤ-FK-Ⅳ	113	101	78	1.035	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
25—27	BⅢ-Q-Ⅳ L	95	81	60	645	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—25	
25—28	BⅢ-S-Ⅳu	129	102	39	785	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
25—29	AⅤ-01住	121	90	40	545	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
25—30	BⅣ-u-Ⅳ	102	61	37	375	輝緑凝灰岩質硬砂岩・北上山地・中生界		
25—31	BⅢ-Q・R-Ⅳ L	106	66	31	347	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
25—32	CⅢ-L-Ⅳ L	125	78	60	810	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—27	
25—33	BⅤ-P-Ⅵu	130	63	35	485	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—23	
26—34	AⅤ-01住	168	121	63	1.188	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—24	
26—35	BⅢ-Q・R-Ⅳ L	170	89	36	790	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
26—36	BⅢ-Y-Ⅳ L	137	76	16	253	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
26—37	CⅢ-N-Ⅳ L	107	66	35	452	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—28	
26—38	BⅣ-P-Ⅴu	136	106	56	1.147	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
26—39	BⅣ-u-Ⅳ	105	100	64	965	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
27—40	CⅣ-F-Ⅴ L	151	83	23	398	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—31	
27—41	CⅡ-A-Ⅳu	173	84	47	987	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
27—42	BⅣ-R-Ⅳu	83	81	35	315	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—29	
27—43	BⅢ-Q・R-Ⅳ L	62	59	37	190	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
27—44	BⅢ-X-Ⅳ L	117	79	70	660	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—30	
27—45	BⅢ-X-Ⅳ L	140	85	47	780	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
28—46	BⅢ-T-Ⅳ L	127	62	40	475	輝緑凝灰岩質硬砂岩・北上山地・中生界		
28—47	BⅢ-W-Ⅳu	109	75	18	205		20—18	
28—48	BⅢ-Ⅳ-Ⅳ L	169	152	57	1.768	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		
28—49	BⅣ-V-Ⅳ	43	66	19	78	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	20—26	
28—50	CⅡ-A-Ⅳu	59	106	67	472	輝石安山岩・奥羽山地・新第三系		

V. ま と め

1. 遺構について

1) 縄文時代の住居址は、柱穴の検出状況・配置から少なくても１度の建替、あるいは改築がなされた住居と考えられる。また、床面等に散在する炭化材（住居の上屋構造材と考えられる）、２次火熱を受けた土器などの状態から推定すると、本住居址は火災焼失によって廃棄されたものと考えられる。住居址の所属時期は、住居址の構造、埋土や床から出土した土器から縄文時代後期（第IV群土器）の時期と考えられるが、詳細な時期については判断しかねる。

2) 陥し穴状遺構・土坑の所属時期は、時代・時期を判定できるような遺物は出土していない。検出層位および今日までの他遺跡の成果から縄文時代中期後半以降から同後期までの時期に構築・使用されたものと考えられる。

3) 古代の住居址２棟は、埋土として堆積する十和田ａ火山灰層の降下年代や出土した土師器・須恵器から９世紀中頃から10世紀初頭までの間に構築・使用されたものと考えられる。また、２棟の住居址の新旧関係は、遺物の出土状態・住居址形態からＡＶ―01住居址が古くＣIV―01住居址が新しいものと考えられる。なお、２棟の古代住居址は、炭化材・床面等の焼土・出土遺物の炭化などから何れも焼失によって廃棄されたものと考えられる。

2. 遺物について

1) 土器の所属時期は、第Ｉ群土器が円筒下層ａ式～同ｂ式の古い時期（縄文時代前期）に相当するものと考えられる。しかし、土器の特徴そのものは円筒下層ａ・ｂ式以外の特徴も見られる。第II群土器は、円筒下層ｄ式及び同上層ａ式期に比定されるものと考えられる。第III群土器は、器形にキャリパー状深鉢形土器の名残が見られること、縦位・横位の楕円形区画文・逆Ｕ字状区画文が磨消縄文の手法や区画内への刺突文の充塡、そして渦巻文が見られないことから大木９式土器の比較的新しい時期の土器と考えられる。第IV群・Ｖ群の土器は、一部の資料を除けば縄文時代後期前葉の十腰内Ｉ式期の土器と考えられる。第VI群土器は、ロクロ成形・調整による内黒処理された坏形土器と輪積成形で一部ロクロ調整を併用した中型カメ形土器、須恵器坏形土器、そしてロクロ成形・調整の小型カメ形土器で構成される。これらの土器群は、住居址の中でも述べたが、十和田ａ火山灰降下前であることや小型土器の製作にロクロの使用が定着していること、そして須恵器を伴うことなどから、年代的には９世紀中頃から10世紀初頭までの間に位置するものと考えられる。

文様として注目されるものに第IV群3類に含まれる有尾四肢獣様の浮文をもつ土器片がある。これらの土器片は、波状口縁の深鉢形土器の破片と考えられ、浮文の周囲には他の縄文帯・無文帯等を区画する沈線とは異なる短い沈線の並列文様や三又状沈線、そして比較的長い沈線が配列されている。このような浮文、あるいは沈文との組み合せについては、その意味を判断しかねるが近年馬淵川流域で“狩猟文土器”“漁撈文土器”として報告されている資料のうち、縄文人の狩猟模様を表現したものの一部と考えられる。

狩猟模様を表現したと考える馬淵川流域の資料は、岩手県二戸市馬立II遺跡、青森県八戸市韮窪遺跡・丹後谷地遺跡・同六ケ所村沖附(2)遺跡・同平舘村間沢遺跡などからも出土している。また、漁撈模様を表現したと考えられる土器として岩手県二戸市上里遺跡の資料が存在する。

2) 土製円盤は、その用途・機能を想定させるような出土状態は認められず、従来から言われている“錘具説”、“土器補修用説”、“祭祀具説”など、何れの説についても肯定・否定することはできない。使用されている土器の分類では、第I群土器1点、第IV群土器4点、第V群および不明の土器群に相当するもの10点となっている。また、大きさでは大別3種に区分されるが、計測数量が少ないことから面積・重量による傾向分類には無理がある。

3) 石器は、石錐・定形的掻器・楔形石器・台石および石皿の類が出土しておらず、器種組成にまとまりが認められない。今回の調査で出土した石器の大部分は、その出土層位から第III～V群土器に伴うものであるが、出土量の多い第I群、および第II群土器に伴うと考えられる石器は非常に少ない。また、石製品については、第IV～V群土器を出土する遺跡の多くでは、石製円盤（打製・磨製ともに）はもとより他の石製品も見られるが、本遺跡では、2点だけである。このような傾向は石製品だけではなく、土製品の種類でも同様である。

4) CIV—01住居址のカマド燃焼部周辺・煙道部から出土した骨については、火熱を受けて粉状となっていることから、その種類・部位については同定できなかった。このようなカマド周辺からの骨の出土については、近年の二戸市周辺の調査でも注目されており、数遺跡では炭化した殻類・魚骨・獣骨などが検出されている。なお、遺構説明の中では記述していないが、CIV—01住居址のカマド周辺の土壌については十分な分析を行っていないので、骨以外の種類については不明である。

＜参考文献＞

佐藤　達夫　1958「青森県上北郡早稲田貝塚」（考古学雑誌43－２）

奥山潤・高橋昭悦　1968「円筒下層Ａ式およびその直前の土器」（秋田考古学４）

江坂　輝彌　1970「石神遺跡」

村越　　潔　1974「円筒土器文化」

三宅　徹也　1974「青森県における円筒下層式土器群の展開」（北奥古代文化６）

小笠原好彦　1974「東北における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』（東北考古学会）

青森県教育委員会　1973「中平遺跡発掘調査報告書」

〃　1975「中の平遺跡発掘調査報告書」

〃　1977「青森市三内遺跡」

〃　1978「熊沢遺跡」

〃　1983「韮窪遺跡」

〃　1983「売場遺跡」

〃　1985「今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書」

〃　1986「沖附（２）遺跡発掘調査報告書」

青森市蛍沢遺跡調査団　1979「蛍沢遺跡発掘調査報告書」

二戸市教育委員会　1981「中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」

岩手県教育委員会　1978「荒谷Ｂ遺跡発掘調査報告書」

岩手県埋文センター　1977「長瀬Ｃ遺跡・長瀬Ｄ遺跡調査報告書」

〃　1978「二戸市沢内Ｂ遺跡」

〃　1979「二戸市沢内遺跡」

〃　1981「上田面遺跡発掘調査報告書」

〃　1982「家ノ上遺跡・長瀬Ａ遺跡発掘調査報告書」

〃　1982「長瀬Ｂ遺跡発掘調査報告書」

〃　1983「上村遺跡・下村Ａ遺跡・下村Ｂ遺跡発掘調査報告書」

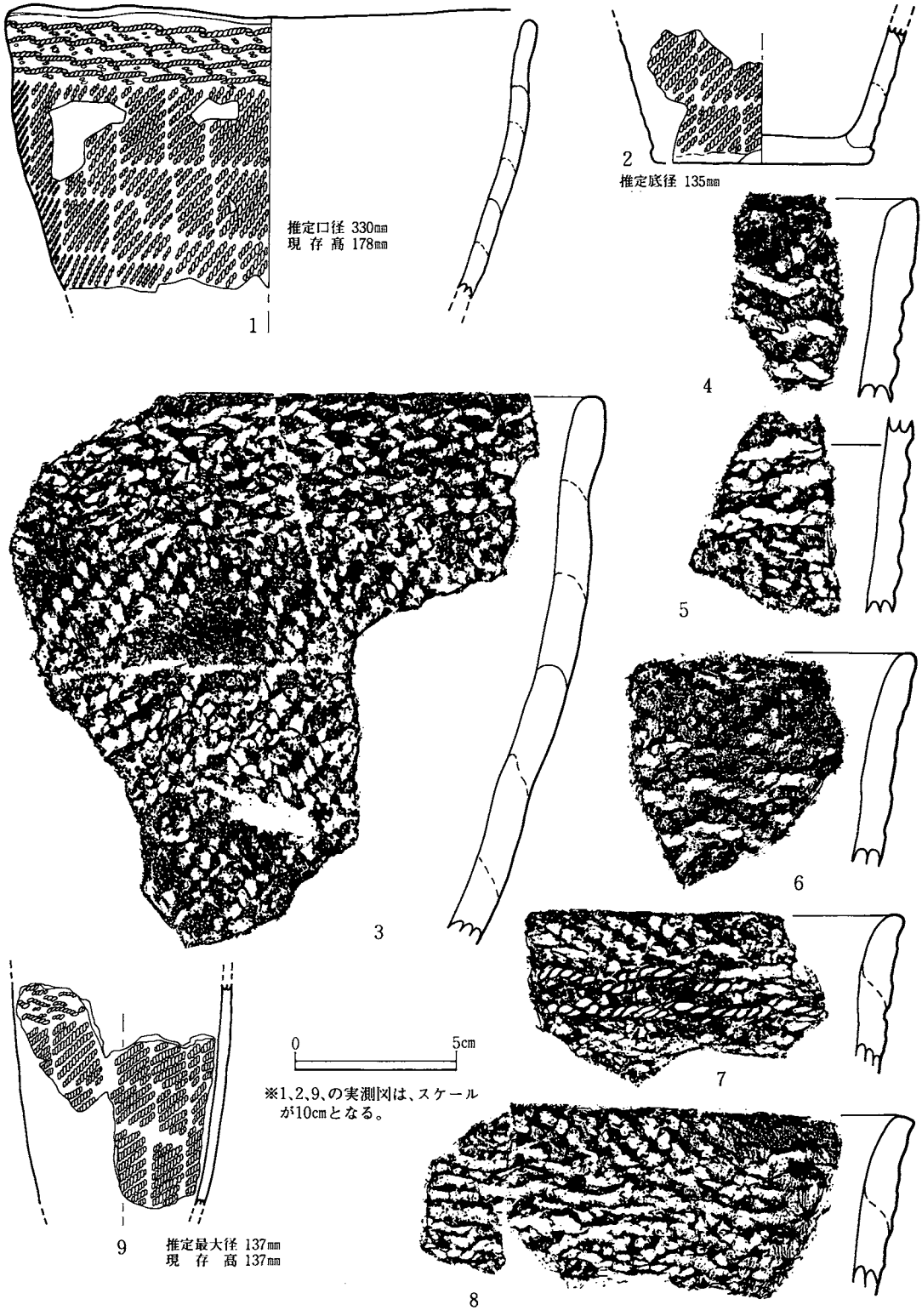
〃　1983「荒谷Ａ遺跡発掘調査報告書」

〃　1983「上里遺跡発掘調査報告書」

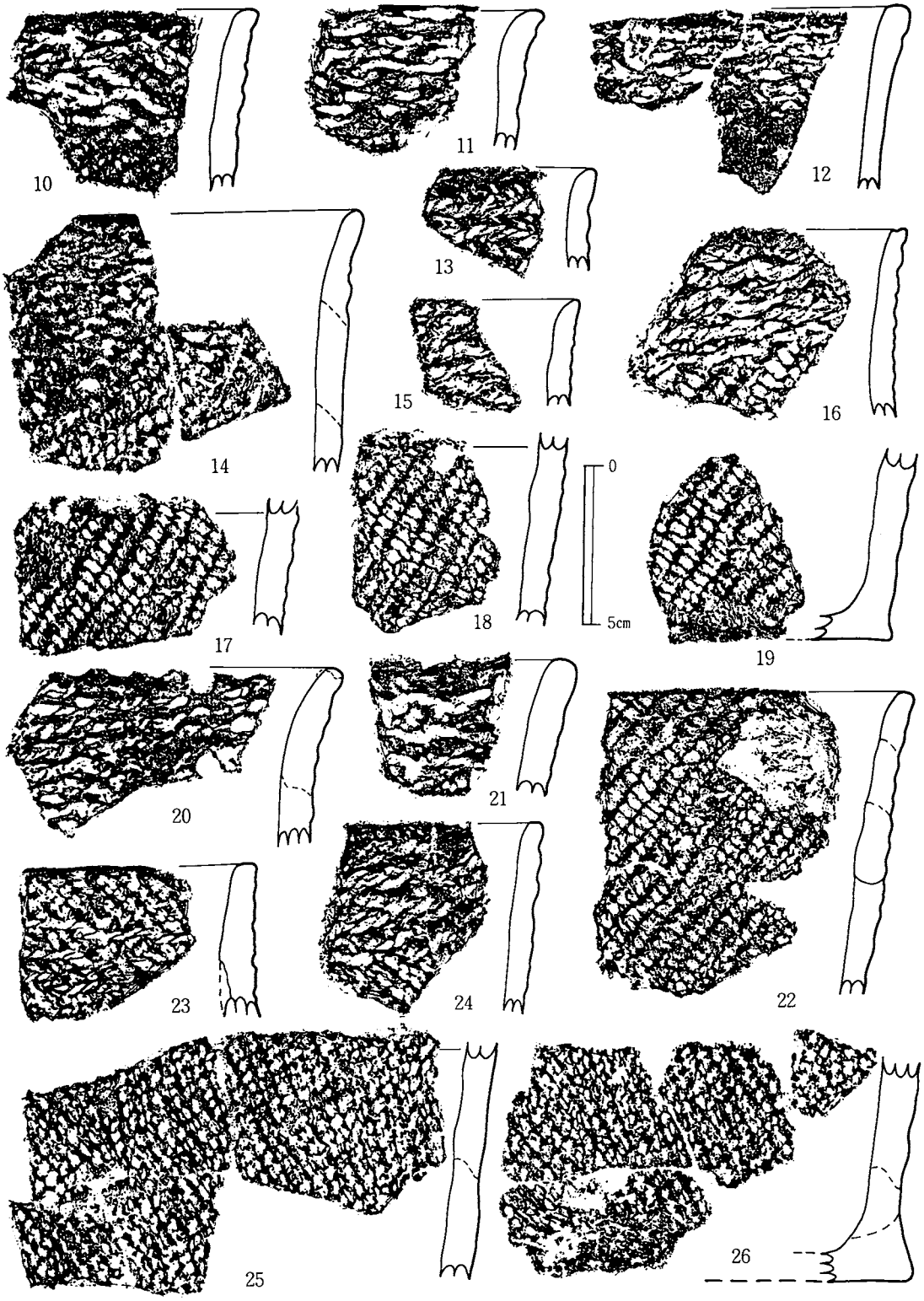
岩手県文化振興事業団　1986「駒板遺跡発掘調査報告書」

〃　1986「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」

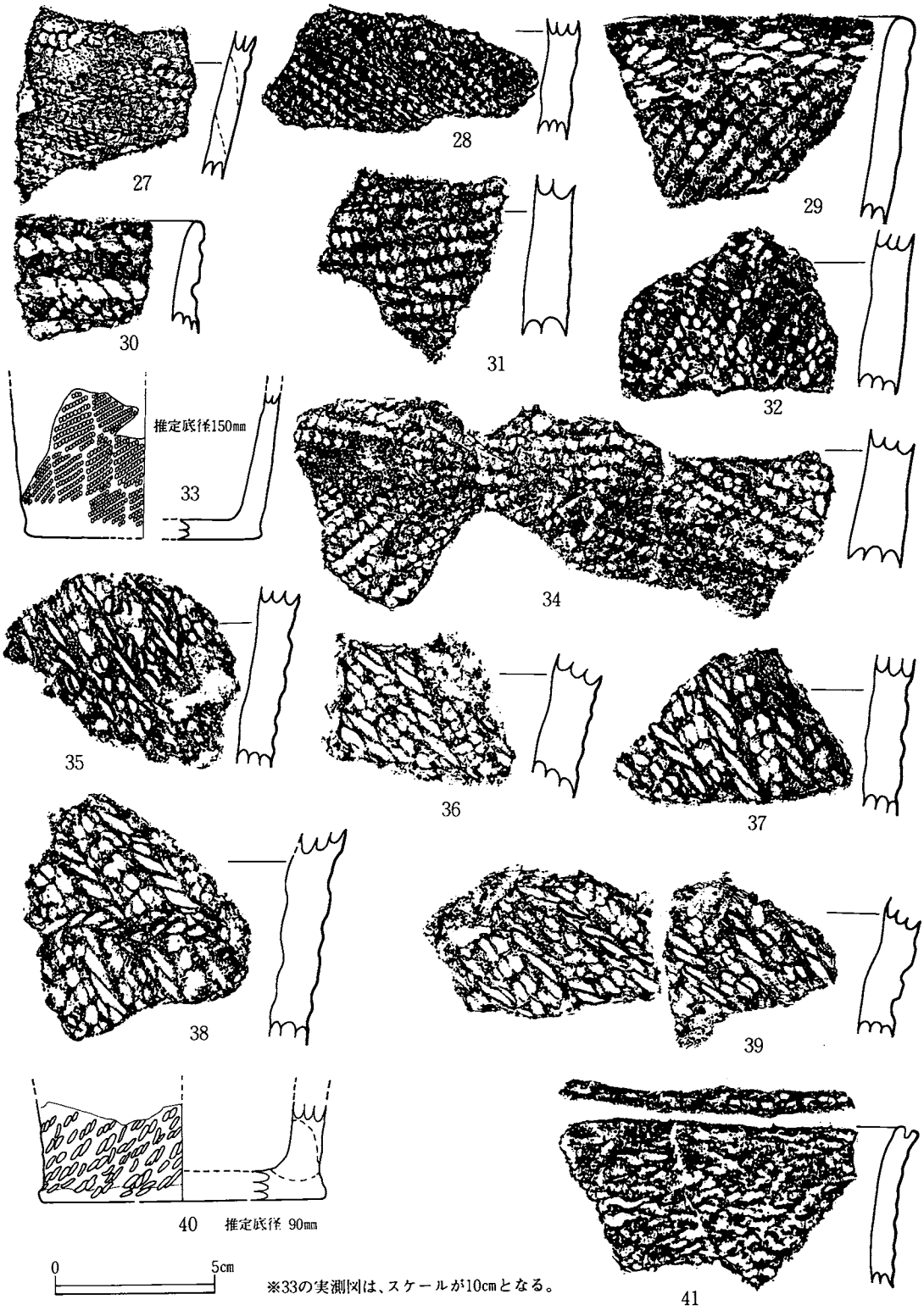
〃　1987「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和61年度分）」



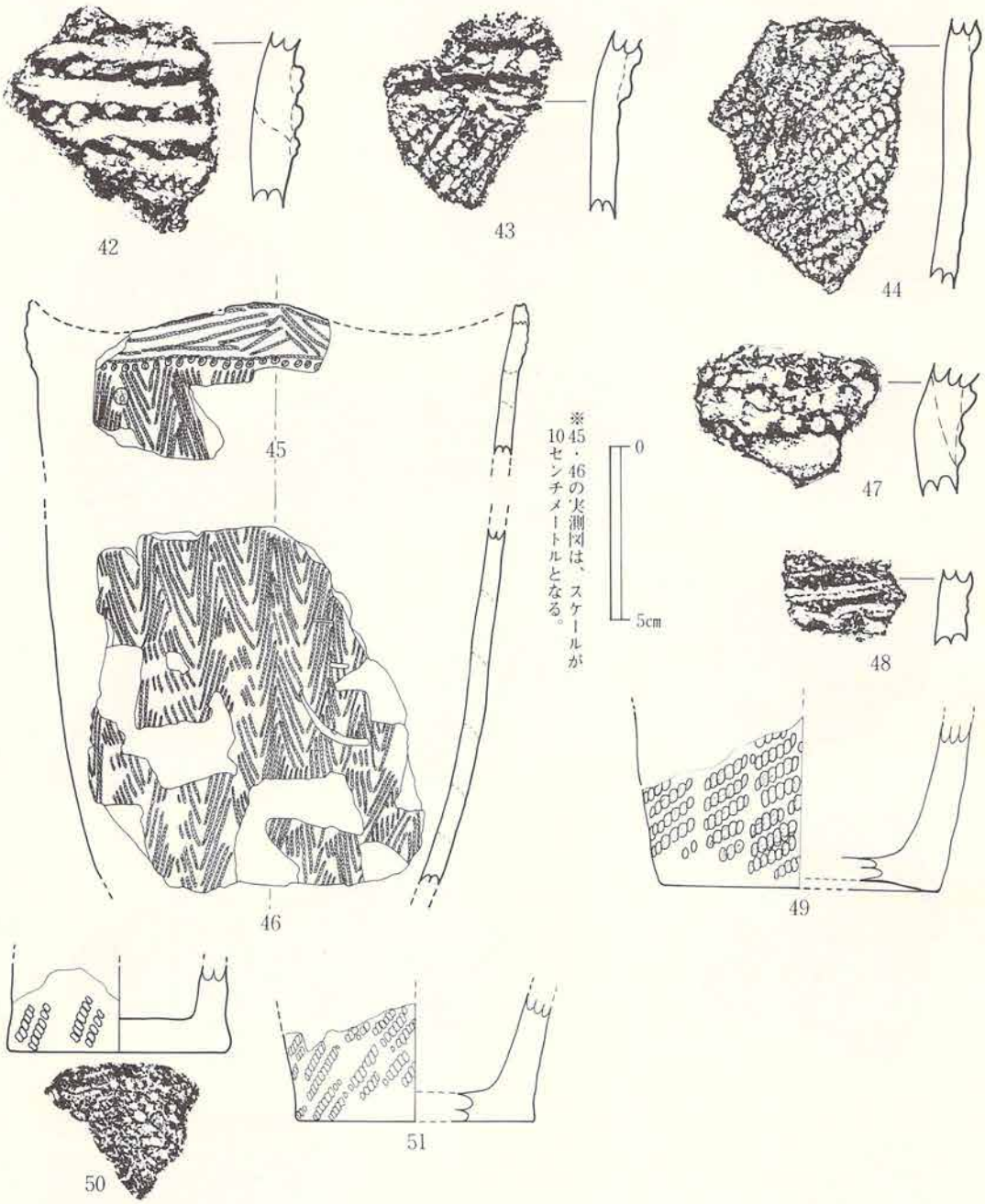
図版12：縄文土器実測図・拓影図(1)



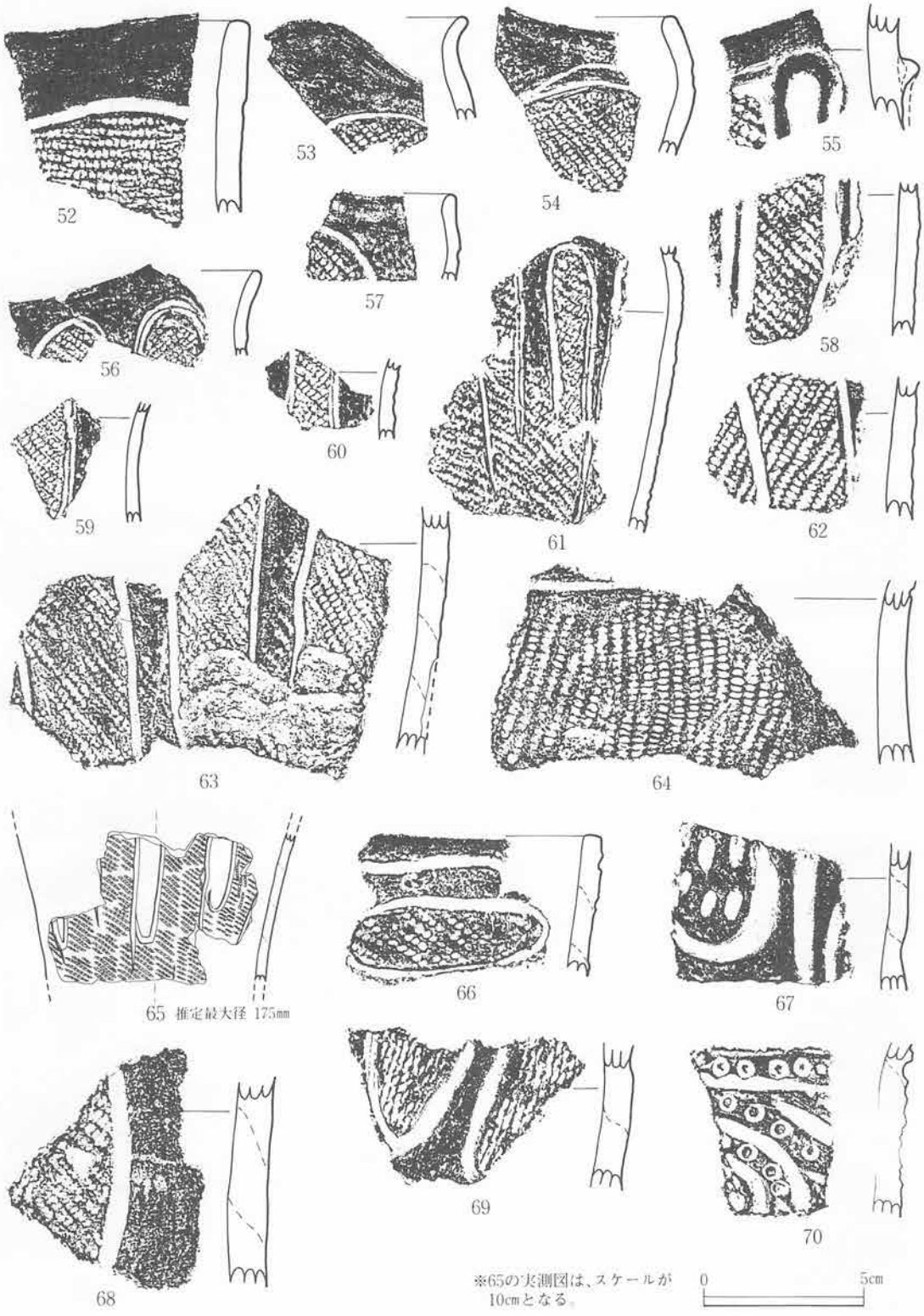
図版13：縄文土器実測図・拓影図(2)



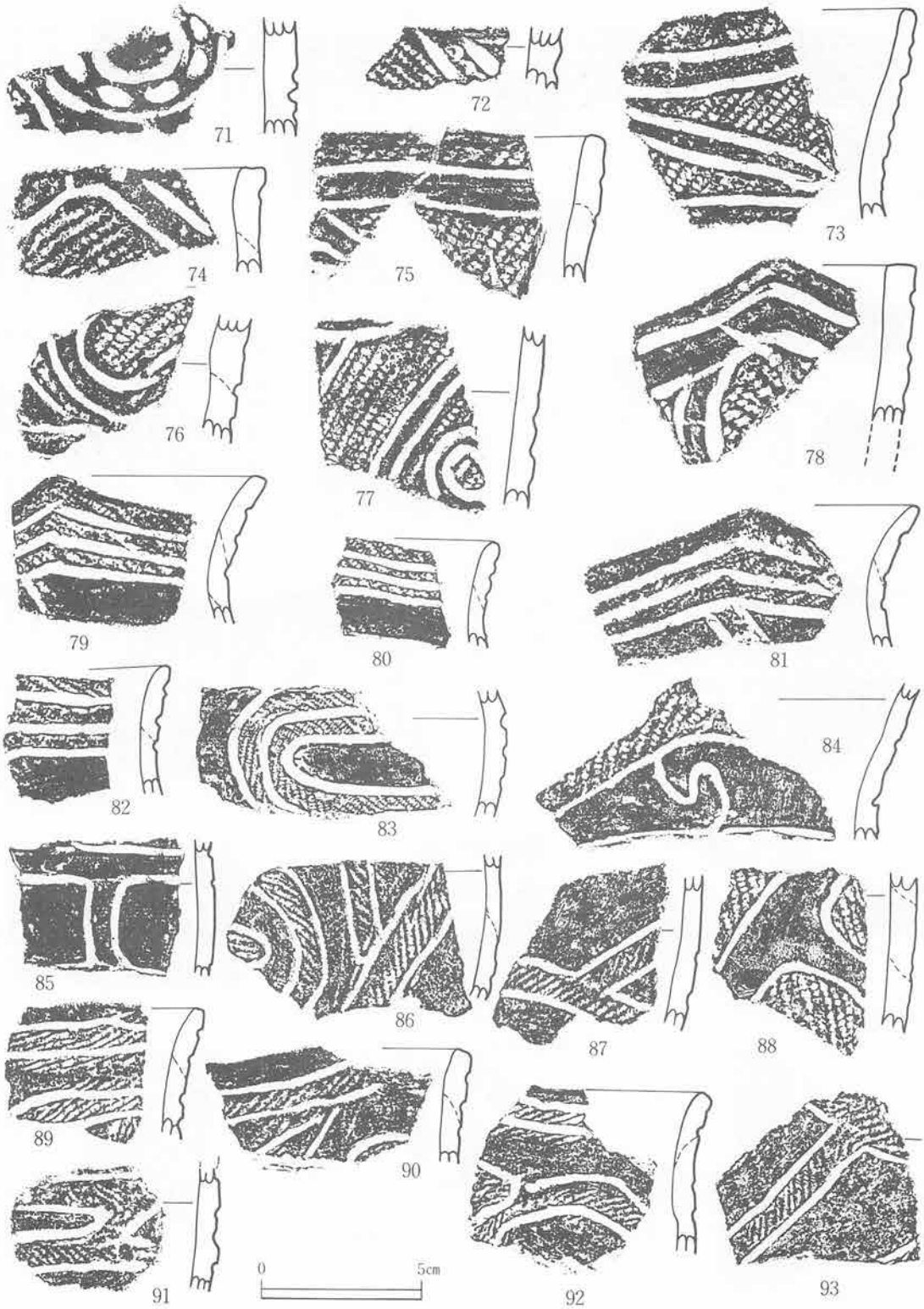
図版14：縄文土器実測図・拓影図(3)



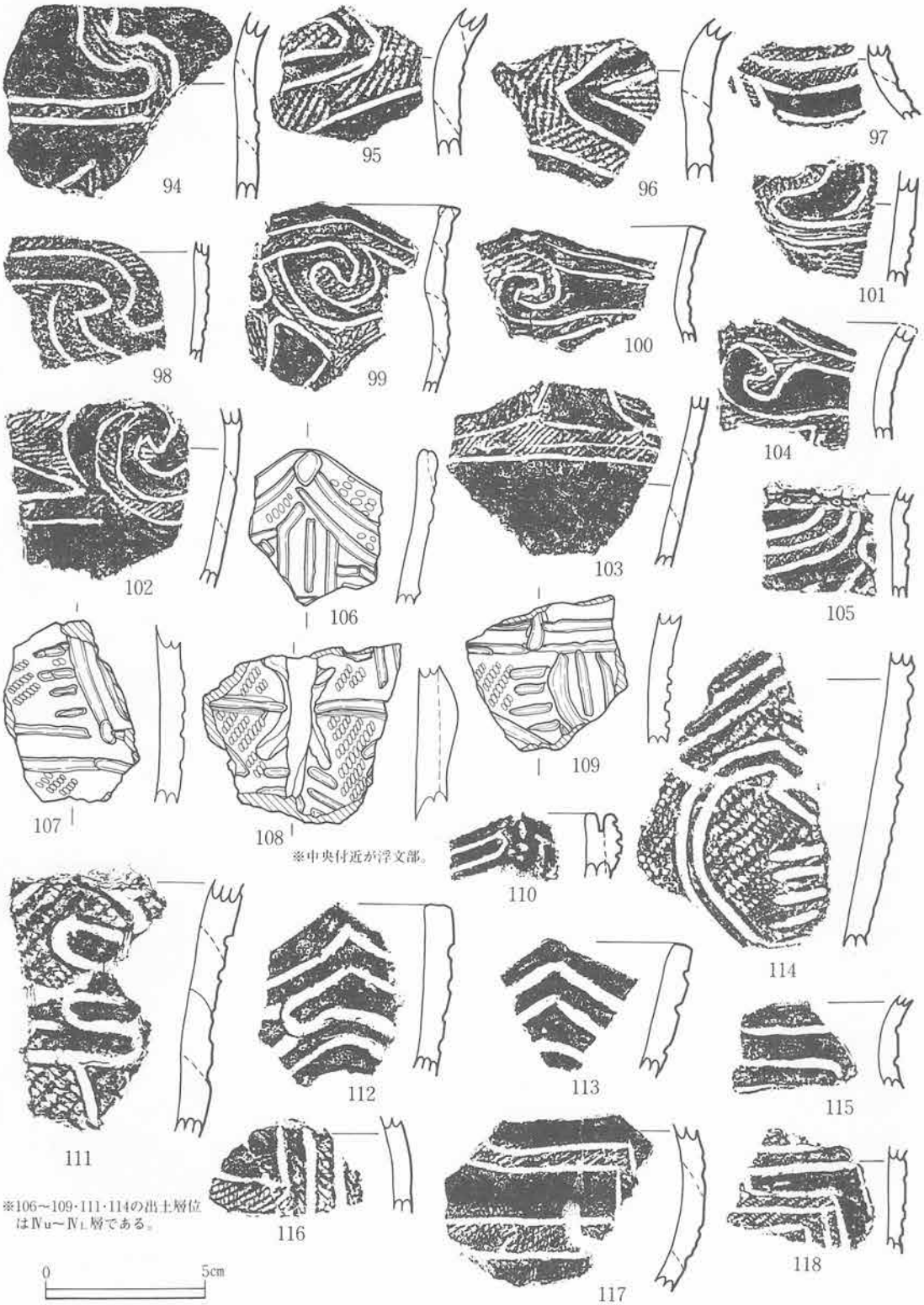
図版15：縄文土器実測図・拓影図(4)



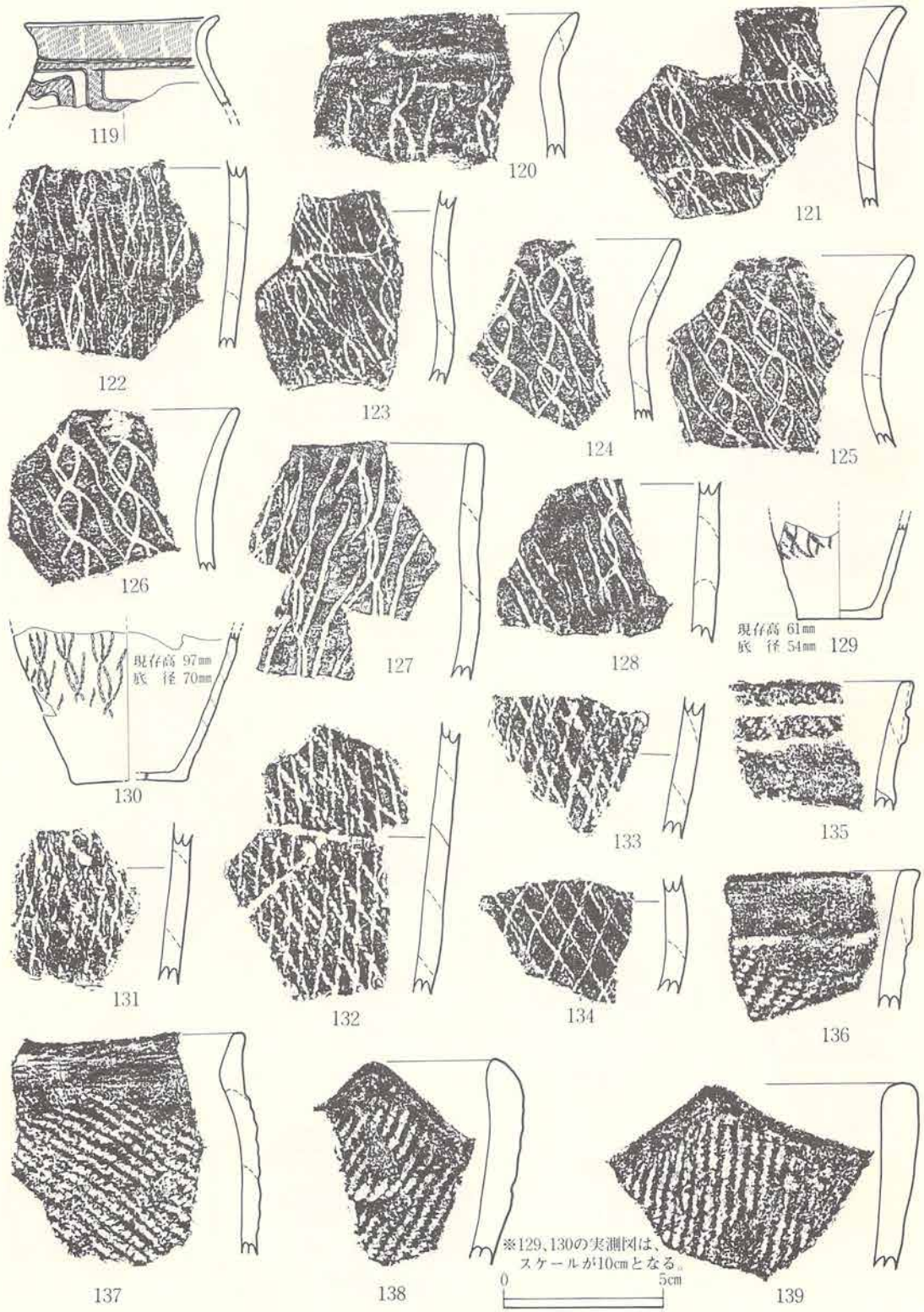
図版16：縄文土器実測図・拓影図(5)



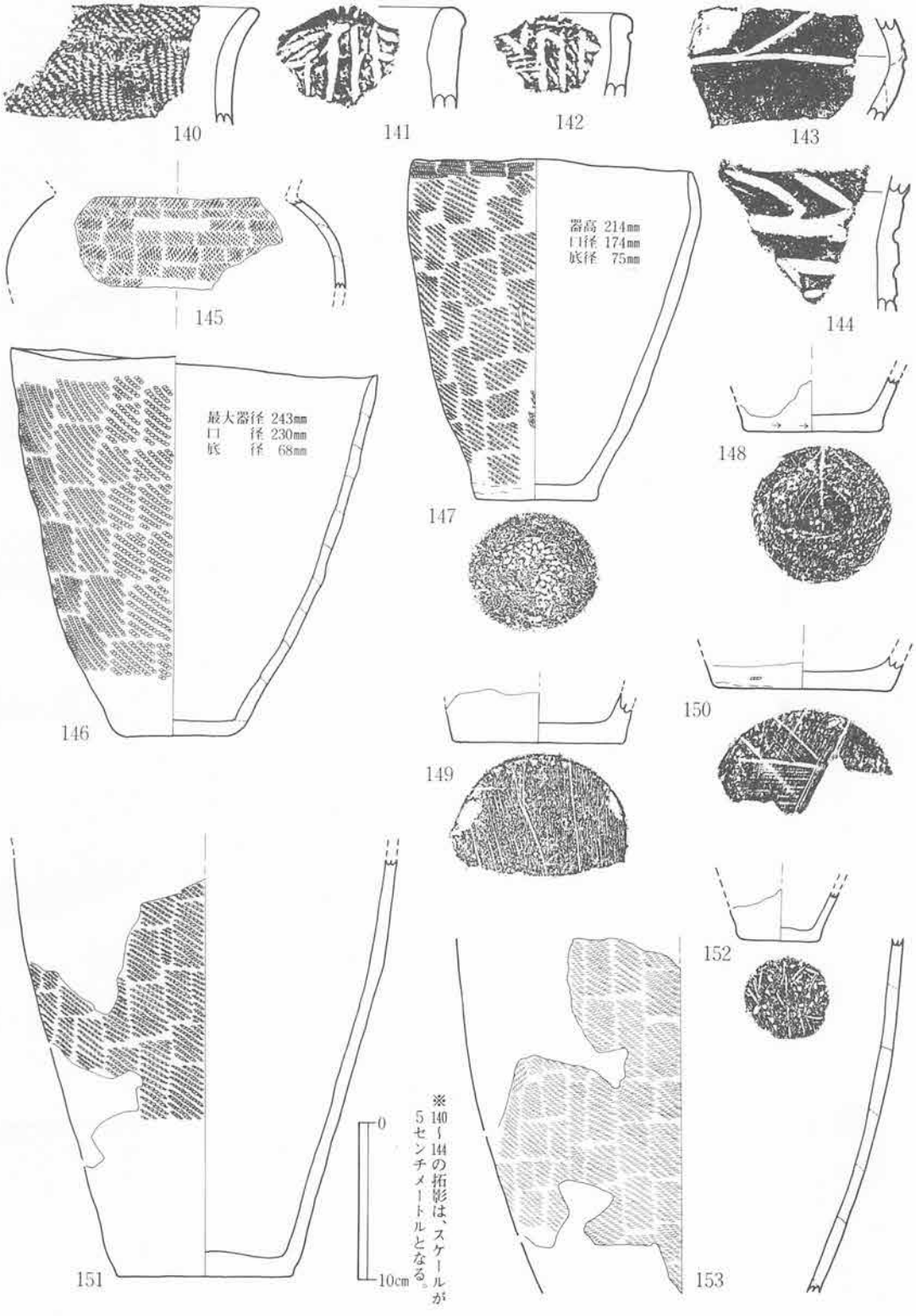
図版17：縄文土器実測図・拓影図(6)



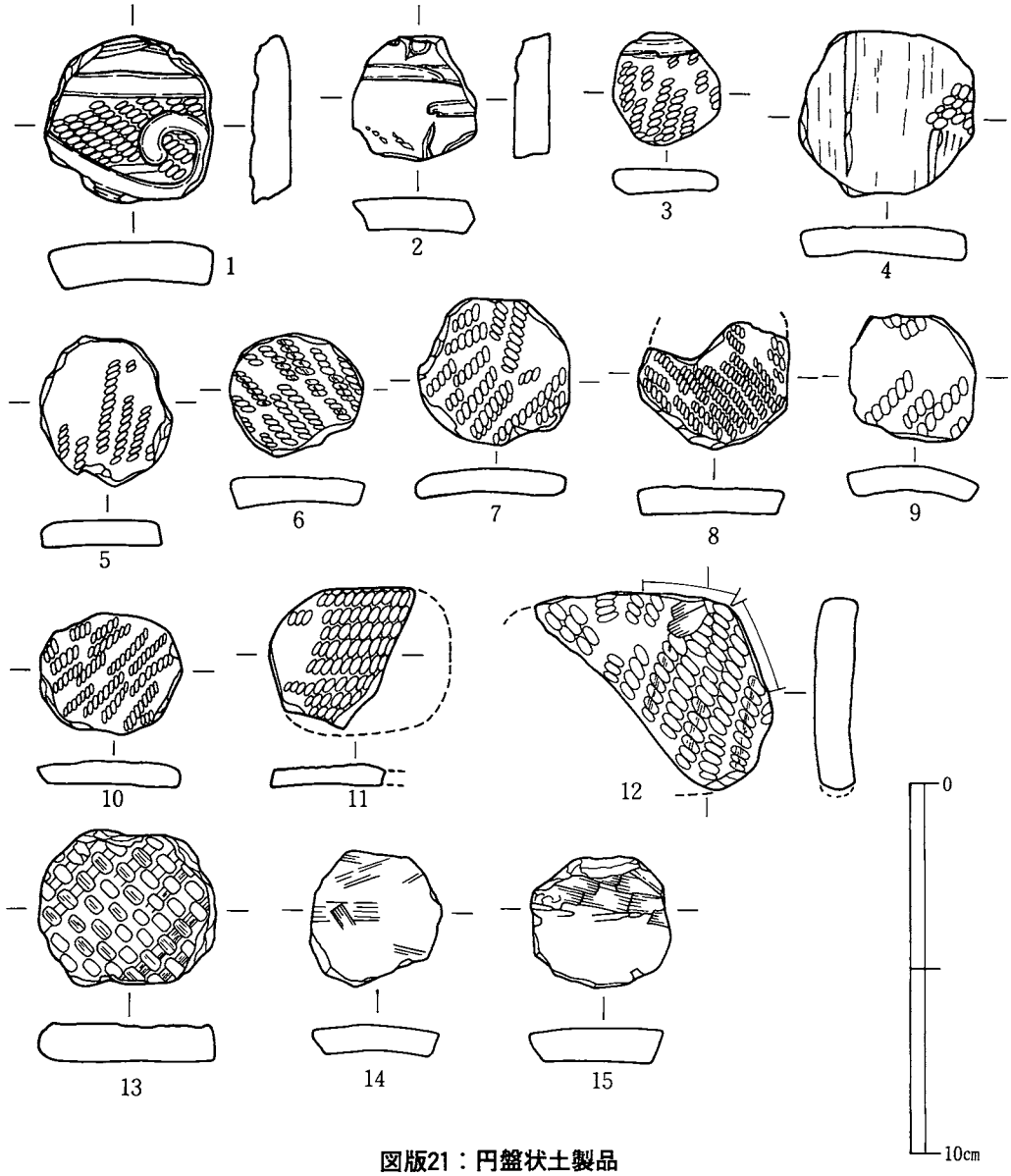
図版18：縄文土器実測図・拓影図(7)



図版19：縄文土器実測図・拓影図(8)



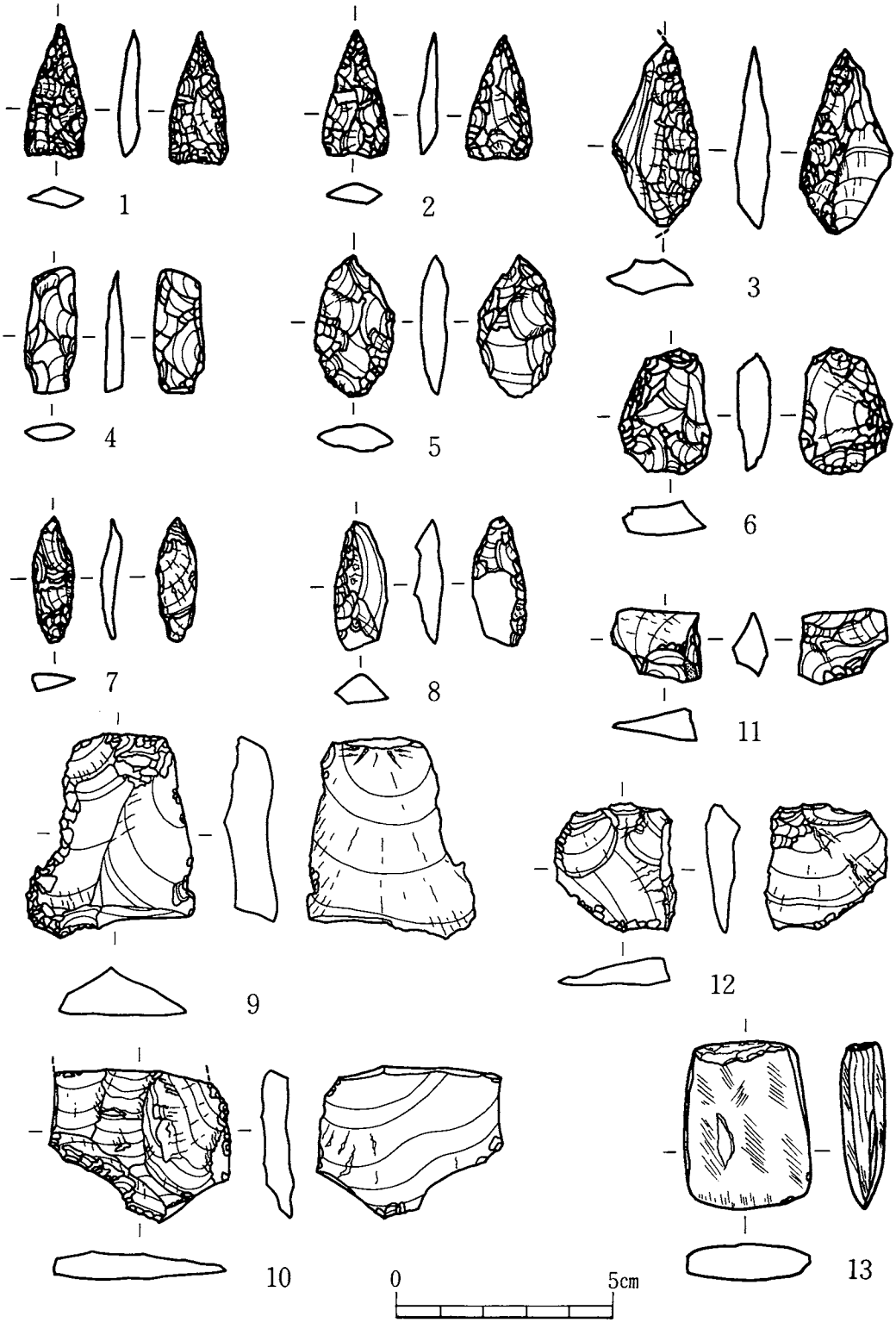
図版20：縄文土器実測図・拓影図(9)



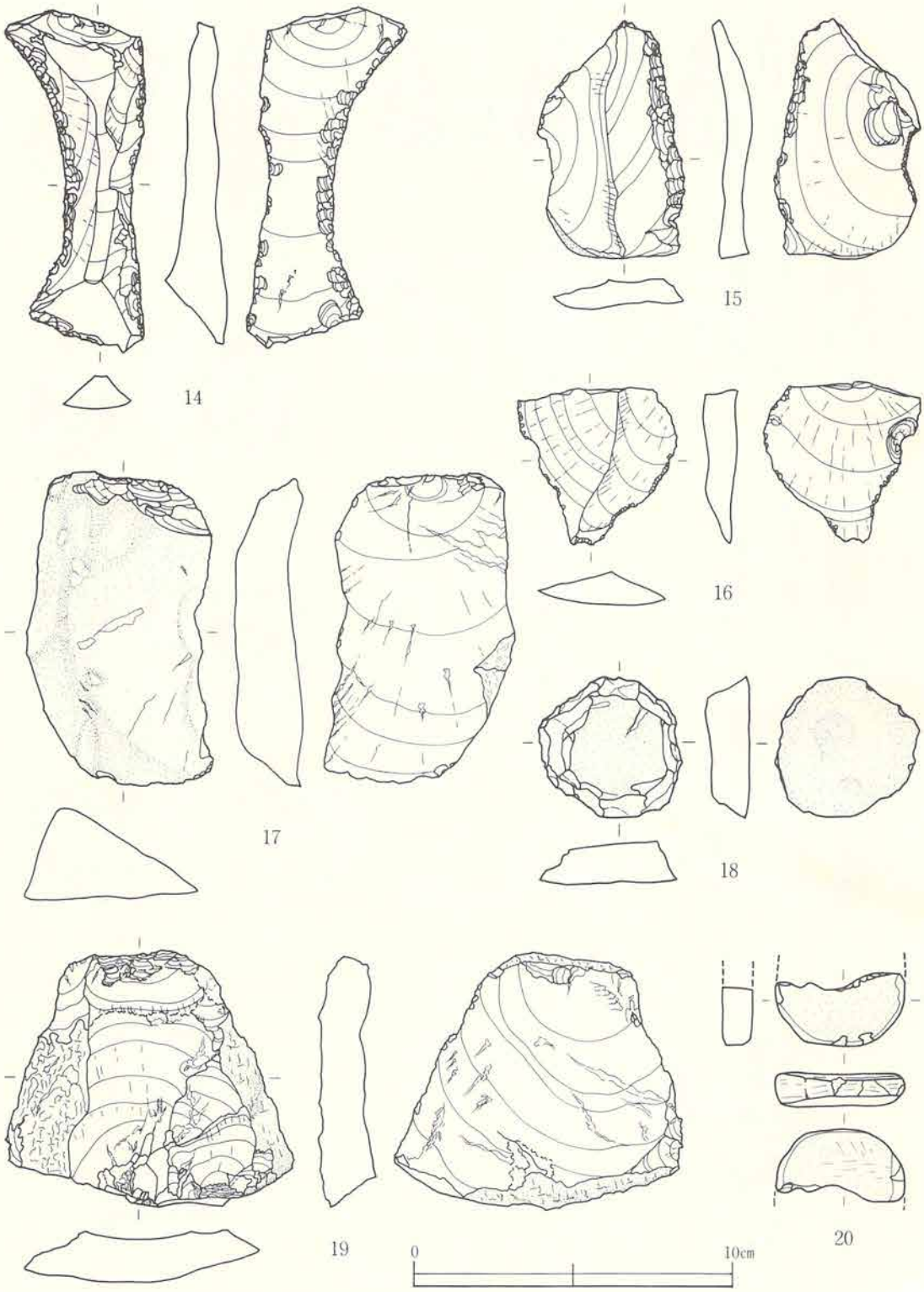
図版21：円盤状土製品

表２：土製円盤計測表 ※カッコ付数値は，欠損個体の現存値。・重量は，コンマ以下を切りすてとした。

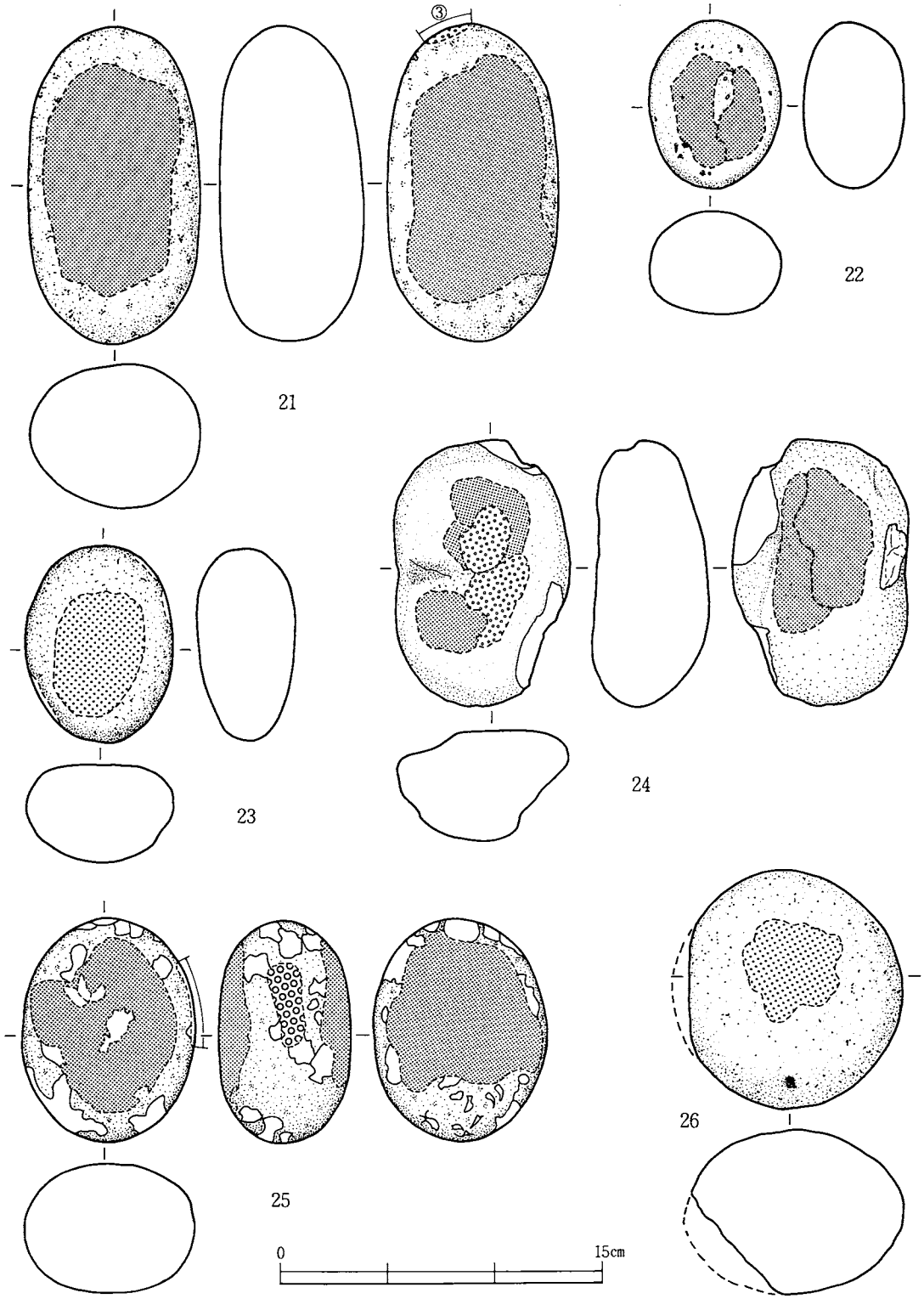
図版	出土区層位	法量(mm, g) 長径	短径	厚さ	重量	文様等	写真図版	図版	出土区層位	法量(mm, g) 長径	短径	厚さ	重量	文様等	写真図版
21-1	CⅣ-Ⅰ-Ⅳ	45	45	11	25	磨消縄、縄LRl、沈線	16-139	21-9	CⅣ-Ⅰ-Ⅳ	34	34	6	9	縄文ＬＲｌ	16-145
21-2	CⅥ-B-Ⅳ	34	33	9	12	磨消縄、沈線、刺突	16-140	21-10	CⅣ-Ⅰ-Ⅳ	38	32	6	7	縄文ＬＲｌ	16-148
21-3	BⅣ-X-Ⅰ	31	29	7	5	縄縄RLr、沈線	16-141	21-11	CⅥ-B-Ⅳ	(38)	(33)	6	(9)	縄文ＬＲｌ	16-149
21-4	BⅢ-Y-ⅣL	47	45	7	20	縄文LRl、沈線、磨消	16-142	21-12	CⅣ-G-Ⅳ	(58)	(51)	10	(24)	縄文ＬＲｌ	16-150
21-5	CⅣ-Ⅰ-Ⅰ	40	35	7	10	縄文RLr	16-146	21-13	BⅢ-X-ⅣL	48	42	10	26	アジロ痕	16-152
21-6	CⅣ-Ⅰ-Ⅳ	36	32	7	8	縄文LRl	16-147	21-14	BⅣ-N-Ⅳ	3636	35	8	10	無文(ナデ，研磨)	16-151
21-7	CⅢ-Ⅰ-J-Vu	41	40	7	12	縄文LRl	16-143	21-15	CⅣ-A-Vu	37	35	9	16	無文(ナデ，研磨)	16-153
21-8	CⅣ-Ⅰ-Ⅰ	40	(34)	7	(11)	縄文RLr	16-144								



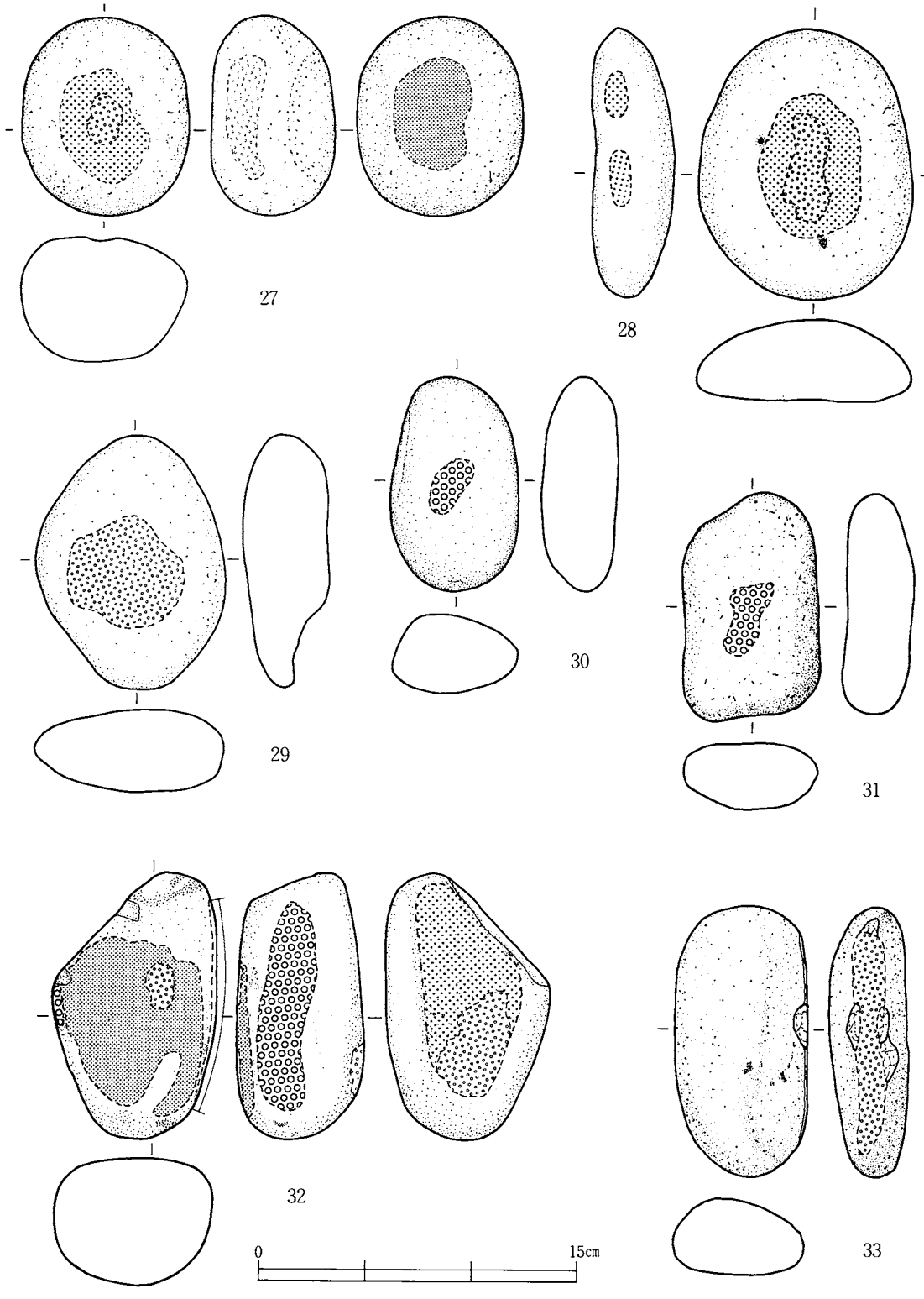
図版22：剝片石器(1) 他



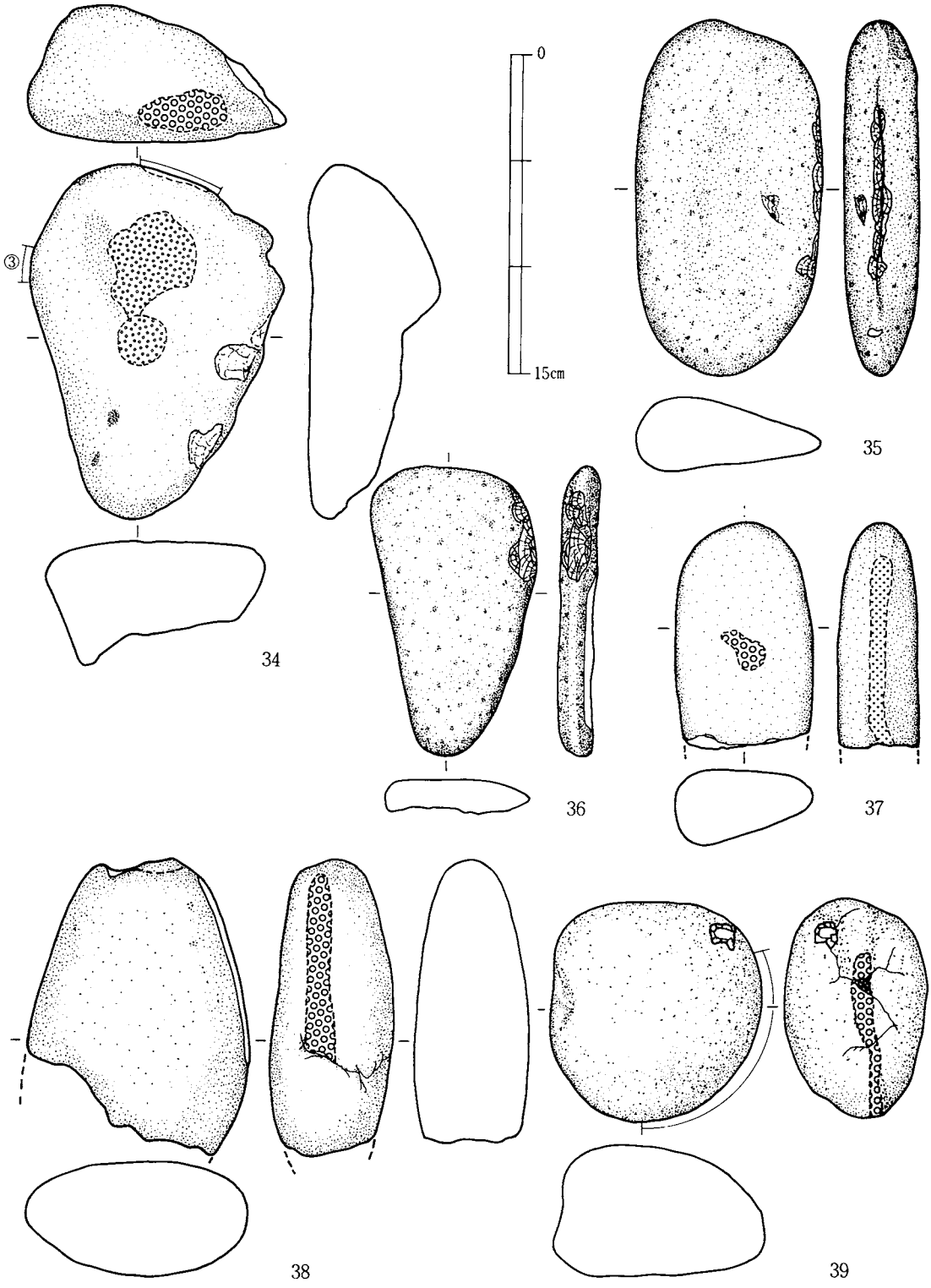
図版23：剝片石器(2) 他



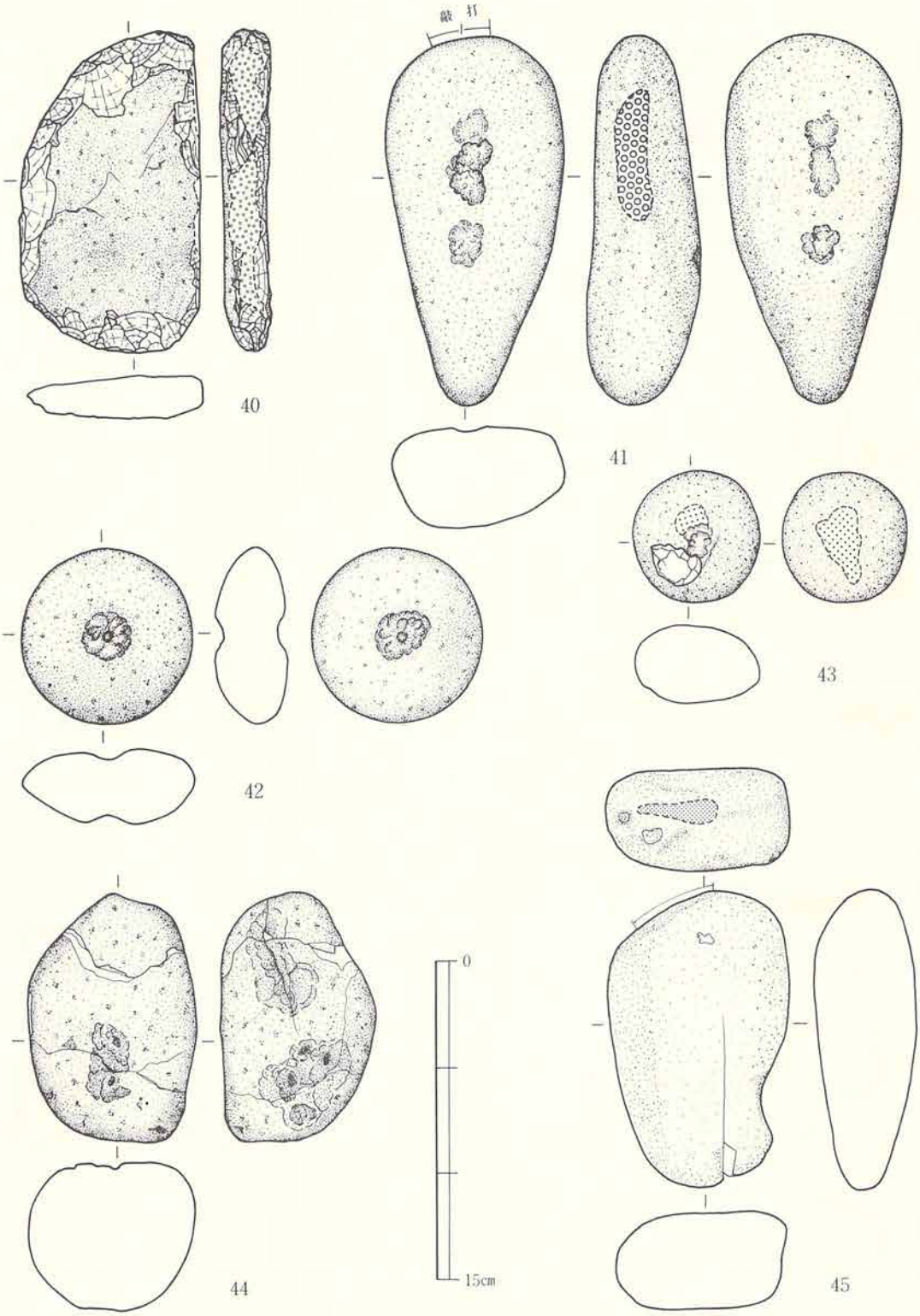
図版24：礫石器(1)



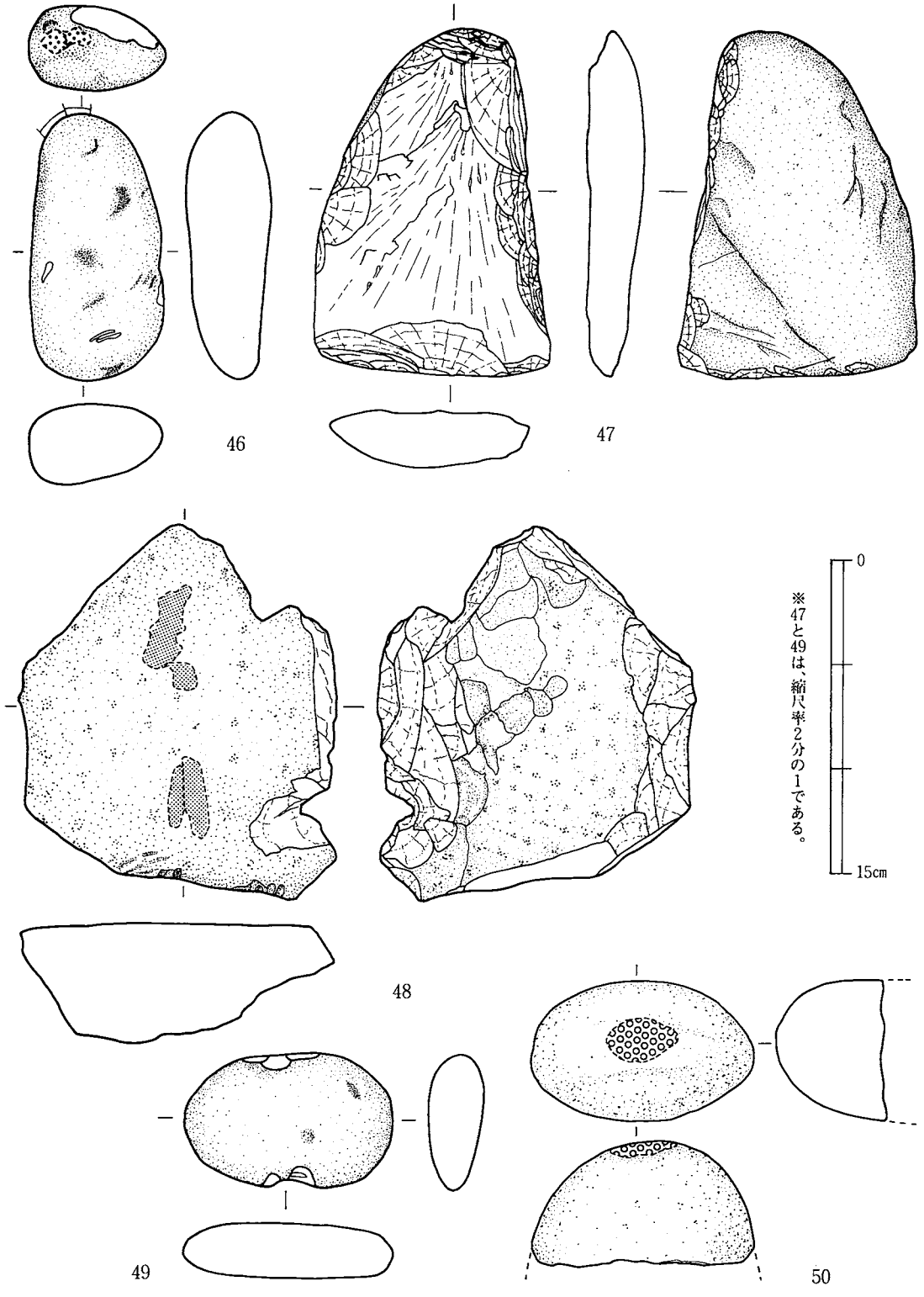
図版25：礫石器(2)



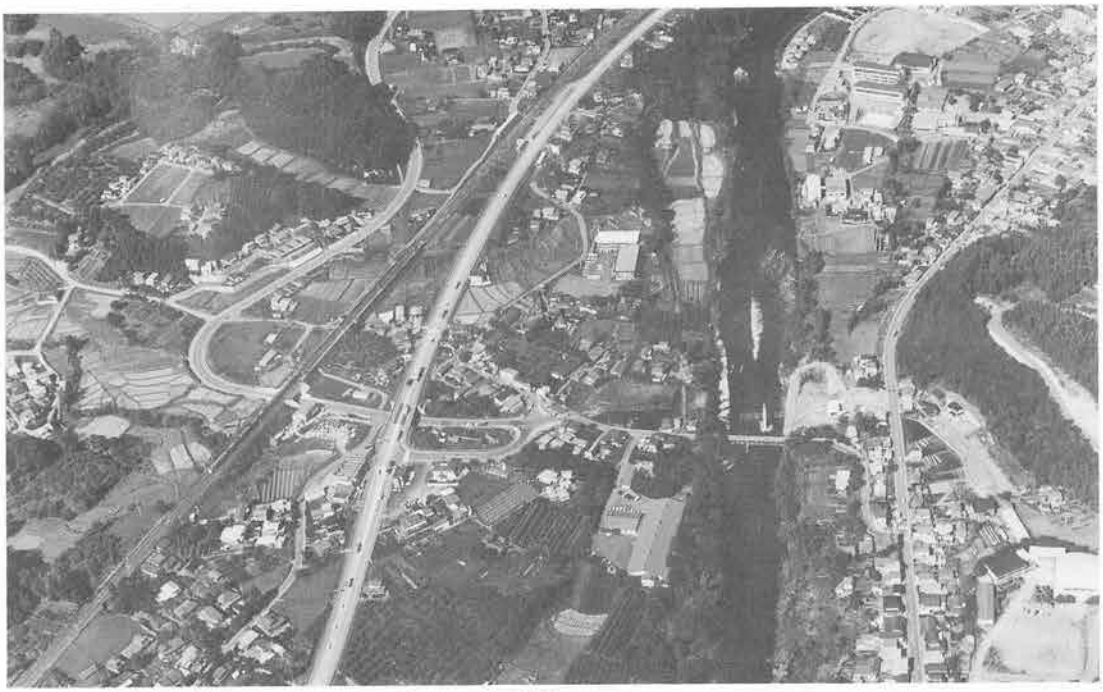
図版26：礫石器(3)



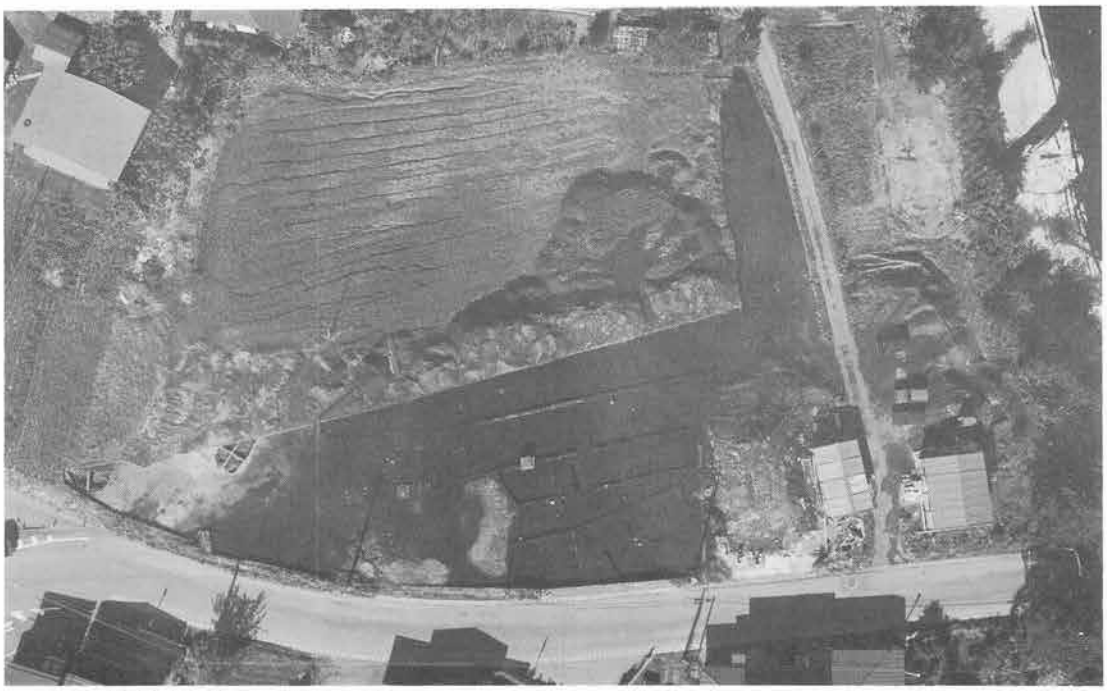
図版27：礫石器(4)



図版28：打製石斧、礫石器(5)

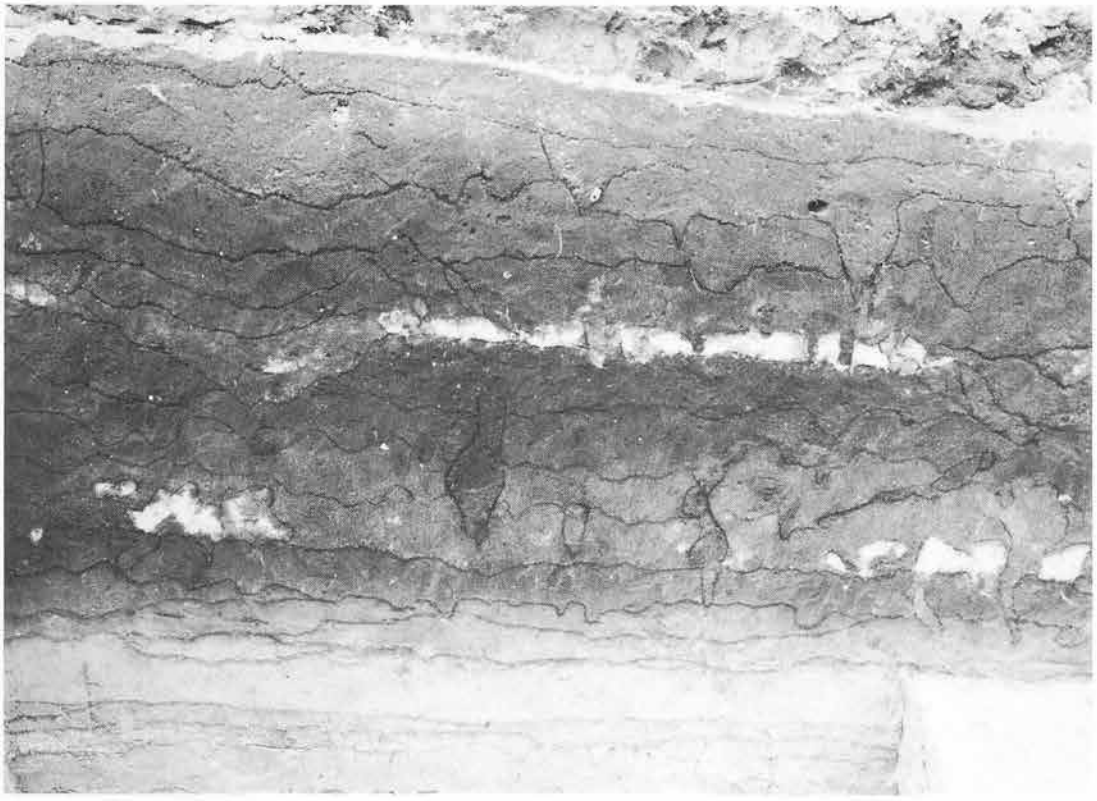


1．周辺の地形(1)（馬渕川上流方向…南々東…から撮影）

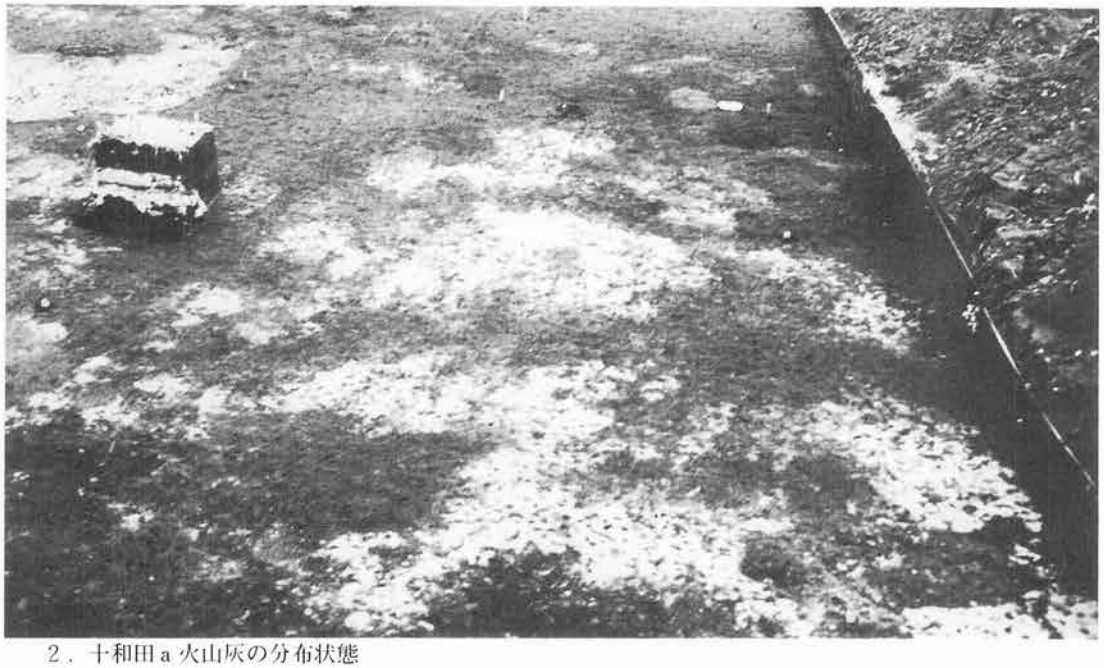


2．調査区域全景（南々東から撮影）

写真図版１：遺跡周辺の地形と調査区域

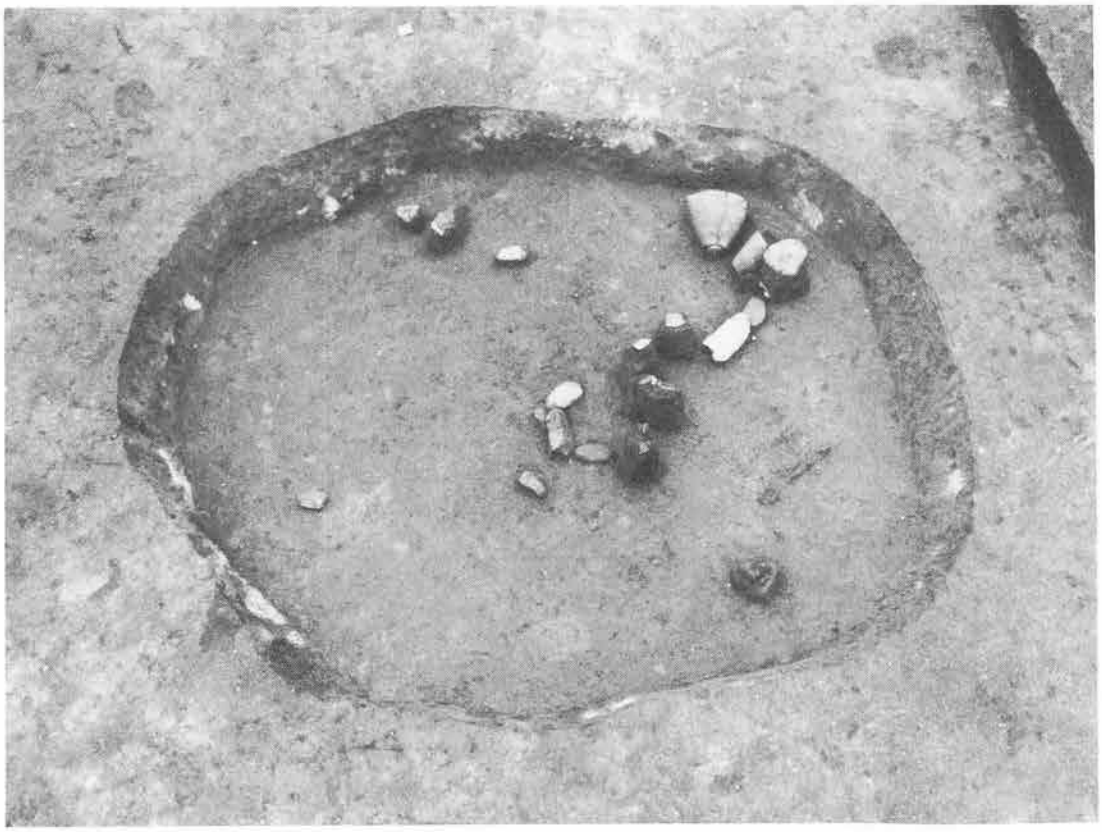


1．土層堆積の状態



2．十和田a火山灰の分布状態

写真図版2：土層の堆積・分布状態

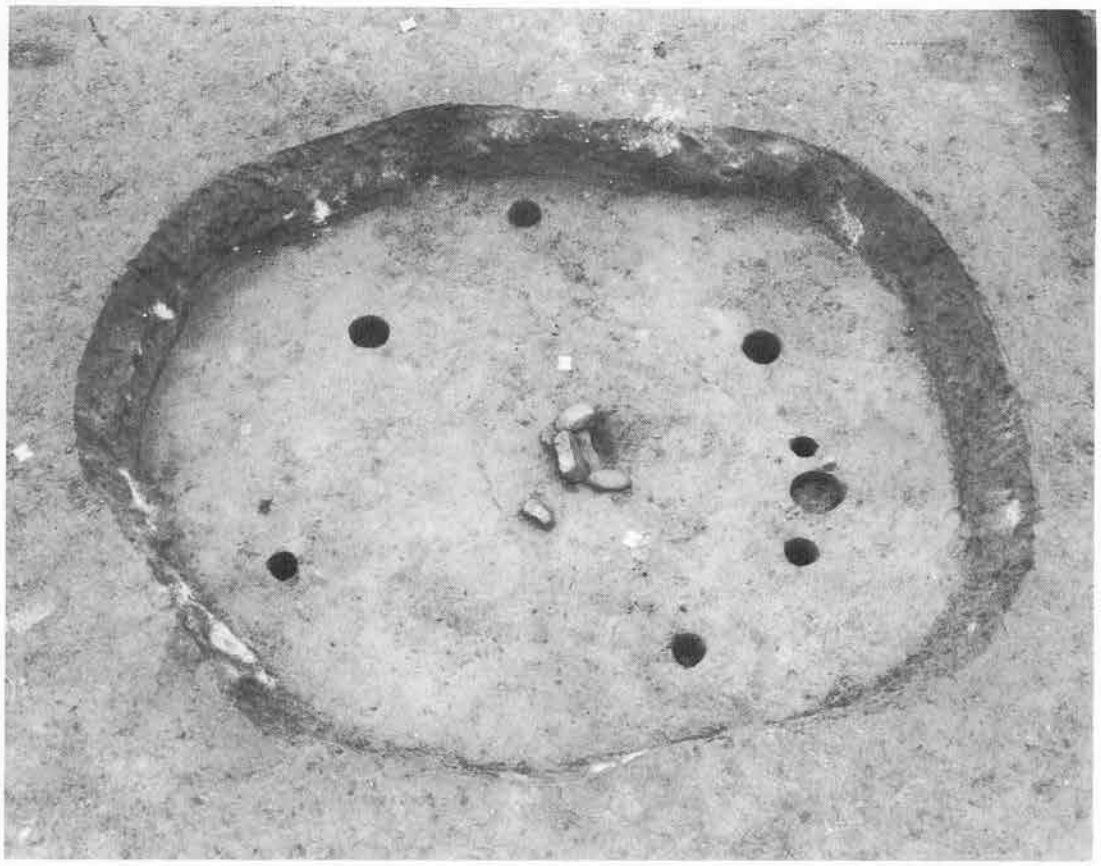


1．遺物出土状態全景

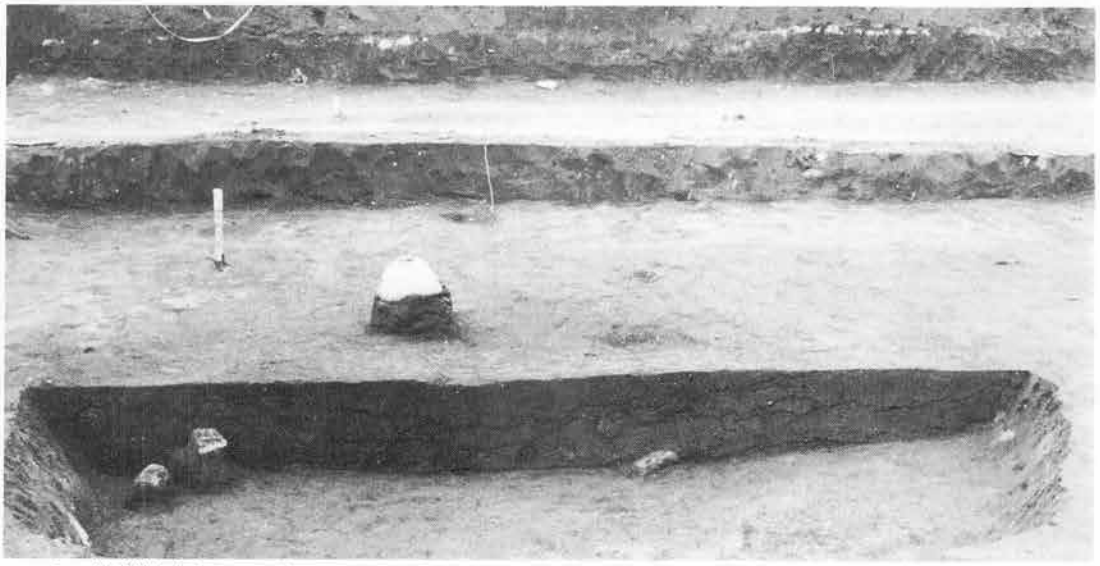
2．遺物出土状態（近接）

3．石囲炉

写真図版３：ＢⅣ—01住居址—(1)



1．住居址全景

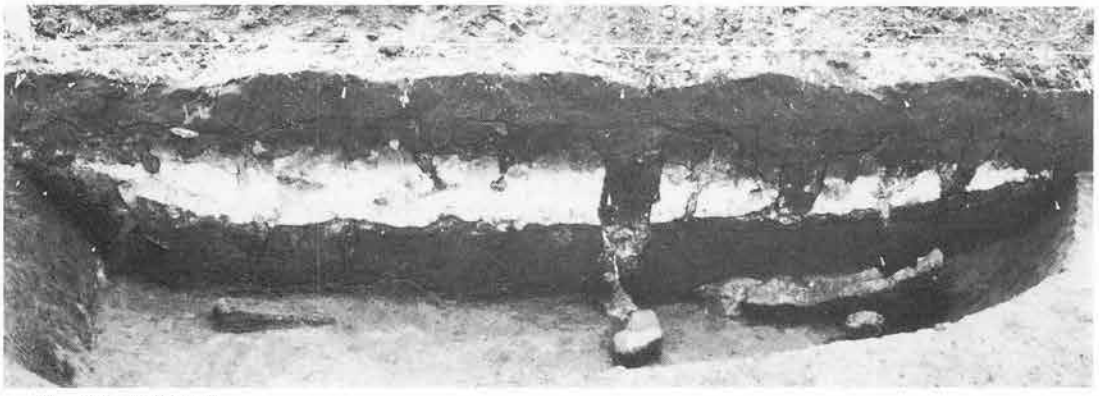


2．埋土断面（A～A′）

写真図版４：ＢⅣ—01住居址—(2)

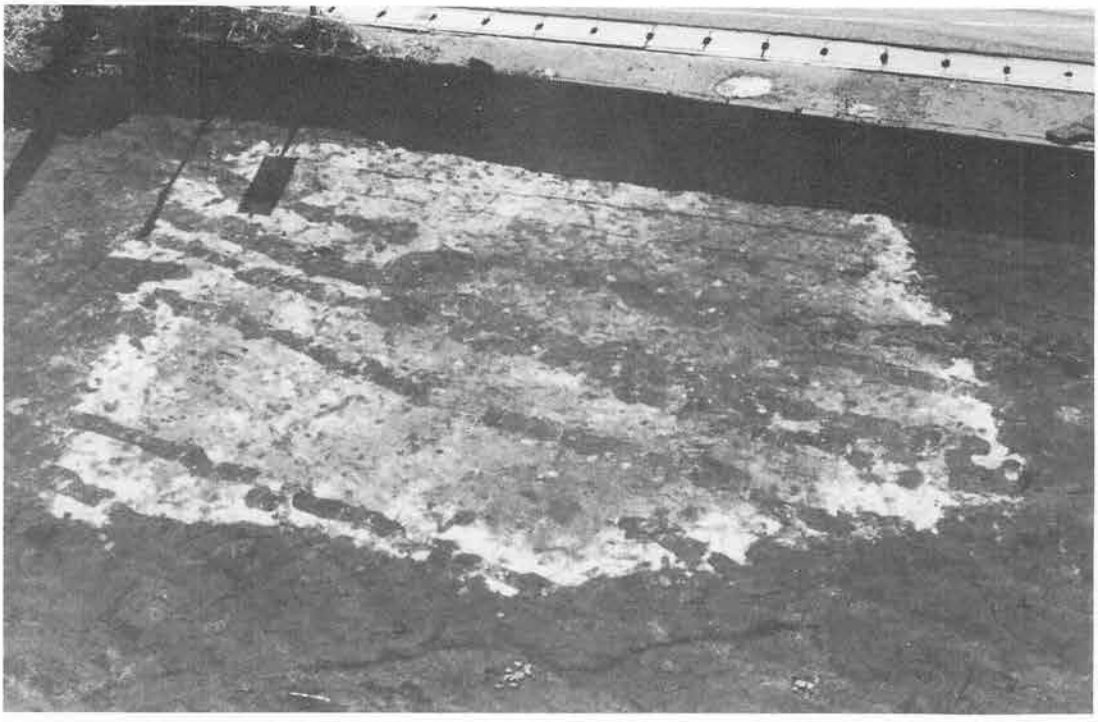
1．検出状態（To－a 火山灰分布状態）

2．調査範囲全景と遺物分布状態



3．埋土堆積状態

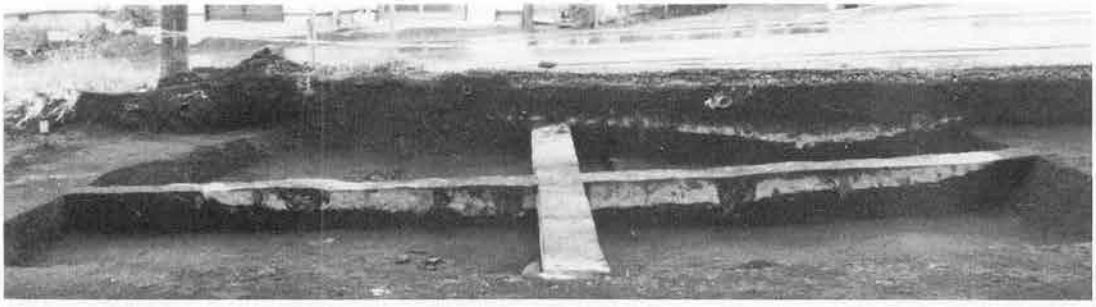
写真図版５：ＡＶ―01住居址



1．検出状態（To－a 火山灰分布）

2．住居址全景

写真図版６：ＣⅣ—01住居址—(1)



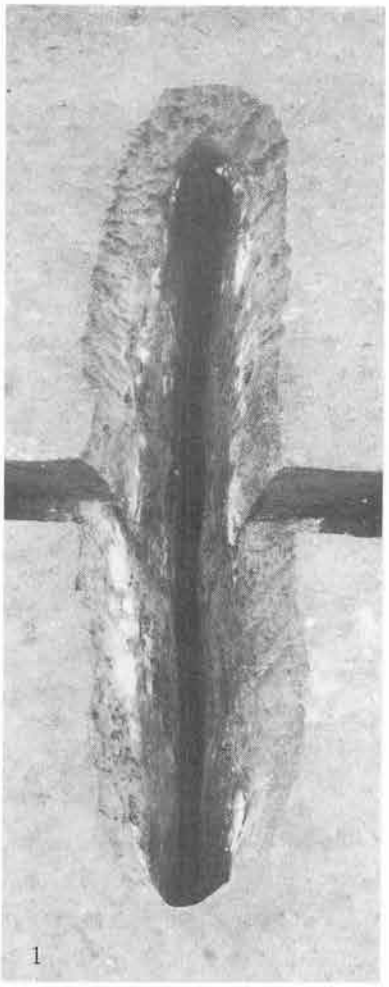
1．埋土堆積状態（A′～A）

2．カマド周辺の遺物出土状態

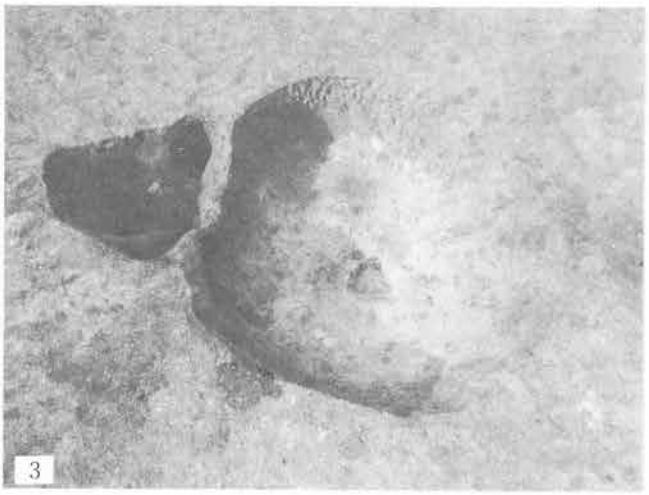
3．カマド周辺の精査状況

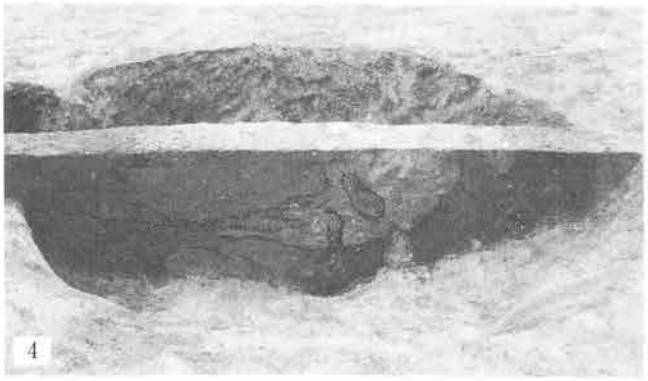
4．焼り出し部の遺物

写真図版７：ＣⅣ—01住居址—(2)



1・2．ＣⅢ—001陥し穴状遺構

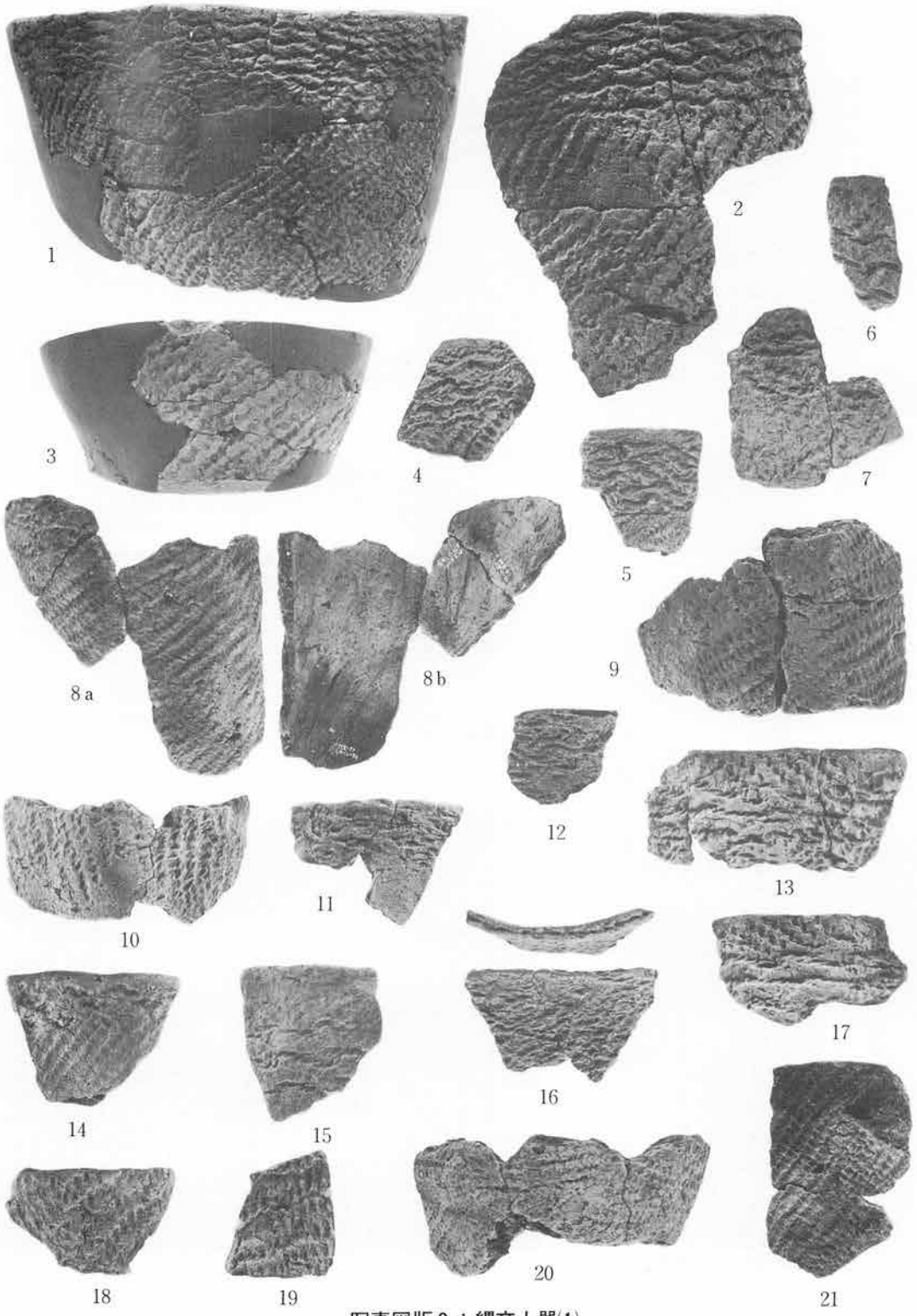




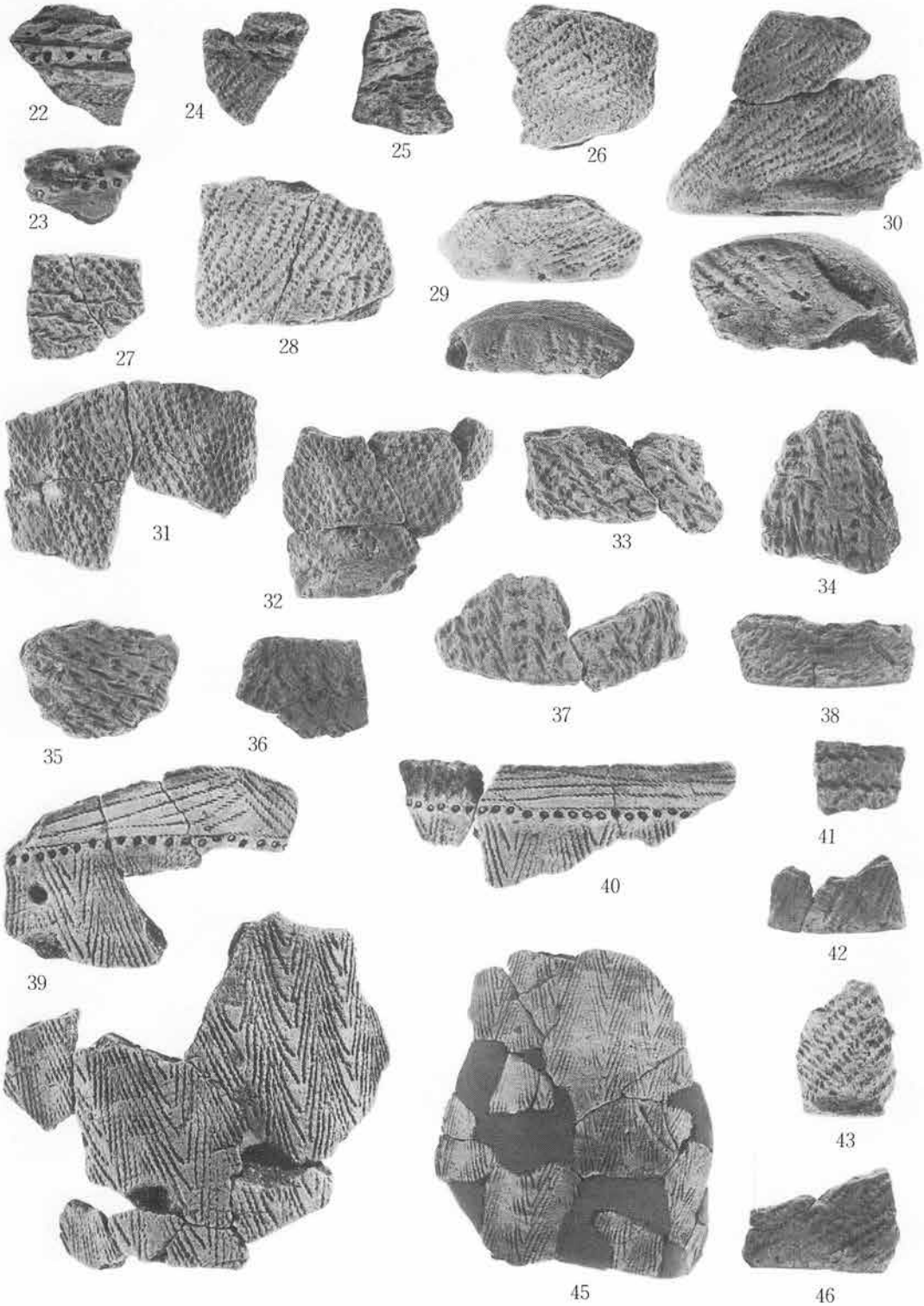
3・4．ＡＶ—001土坑

5．現代の土坑

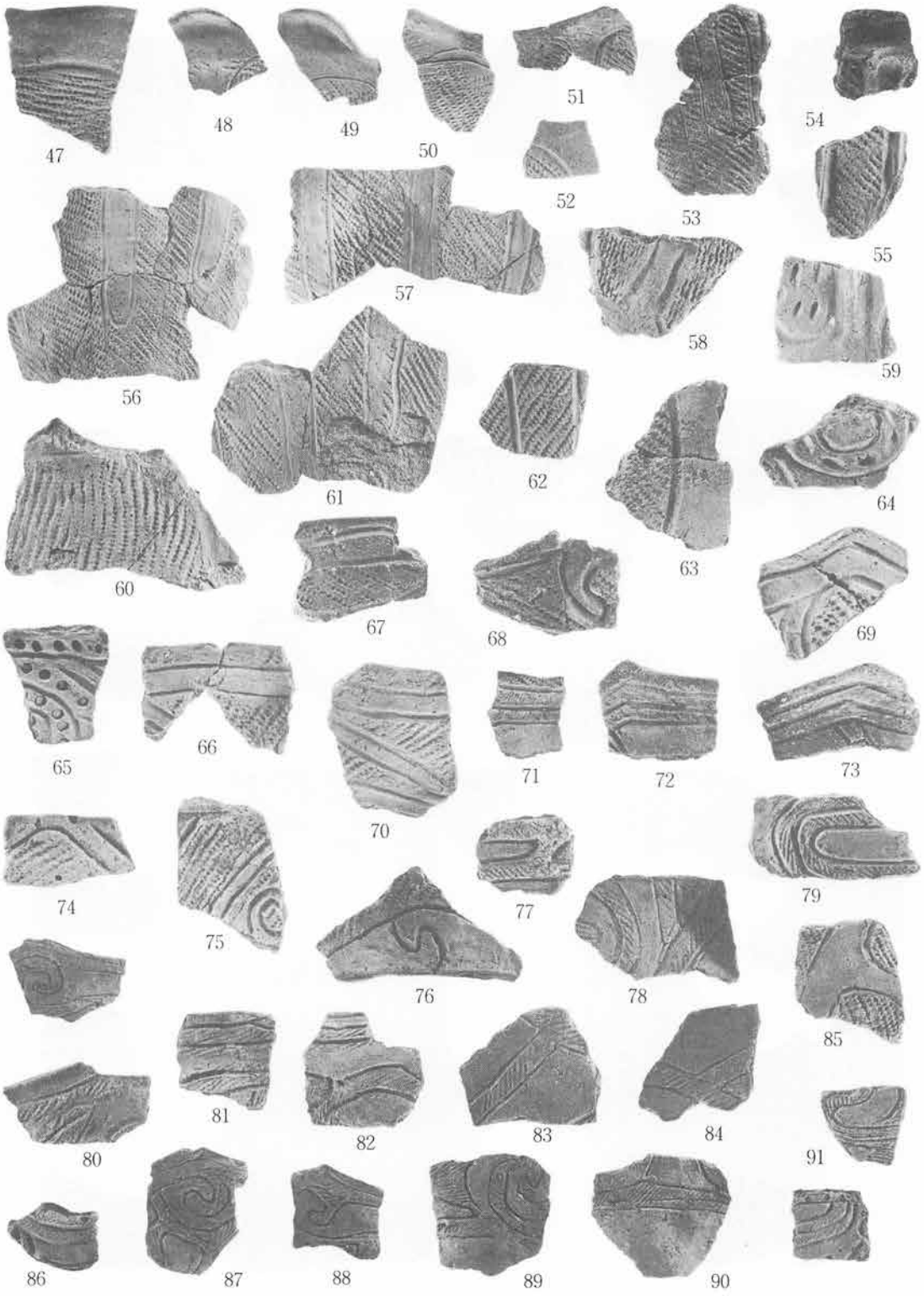
写真図版８：陥し穴状遺構・土坑



写真図版 9 ：縄文土器(1)



写真図版10：縄文土器(2)



写真図版11：縄文土器(3)

93

94

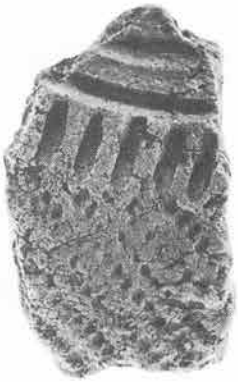
95

96

97

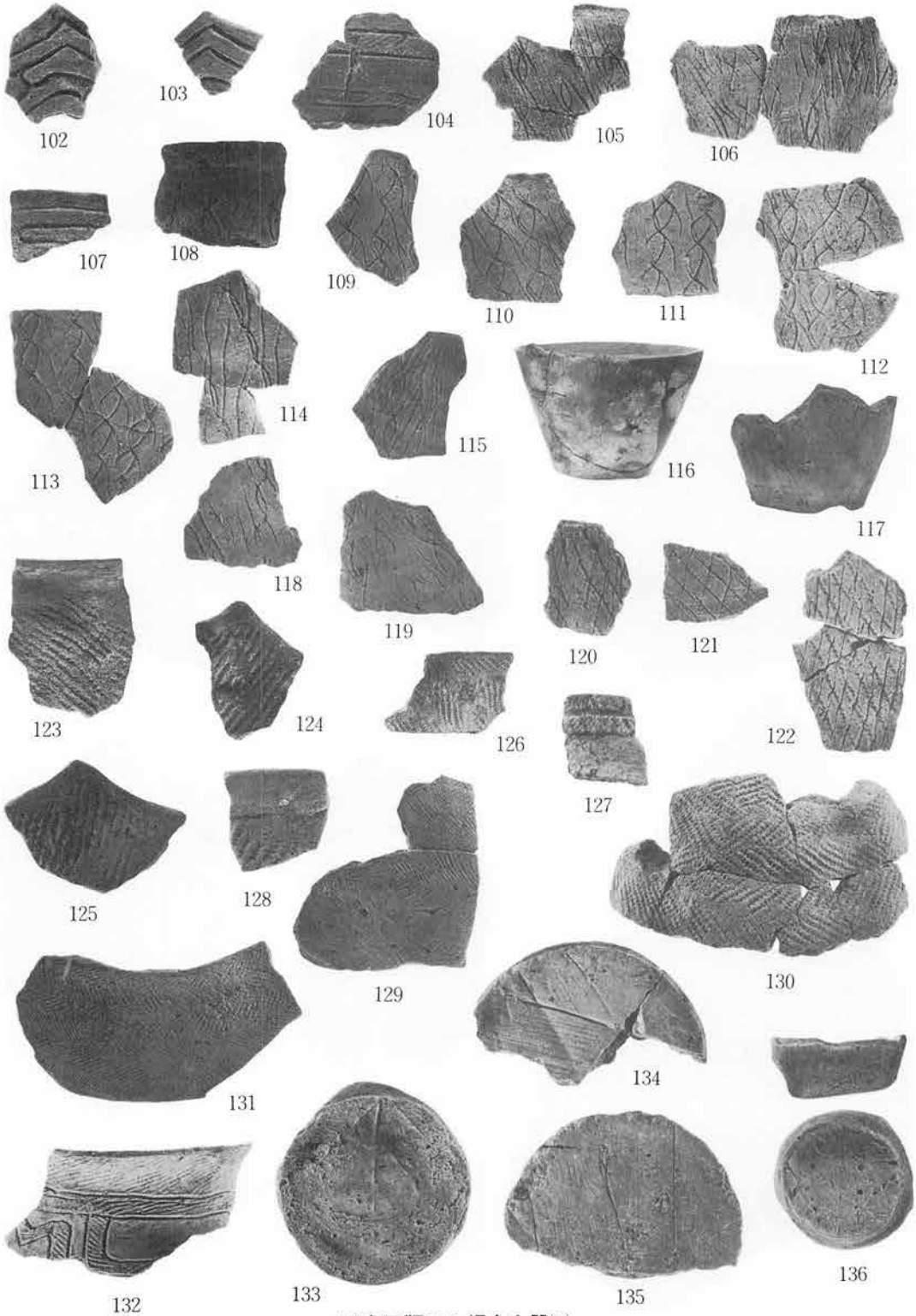
98

99

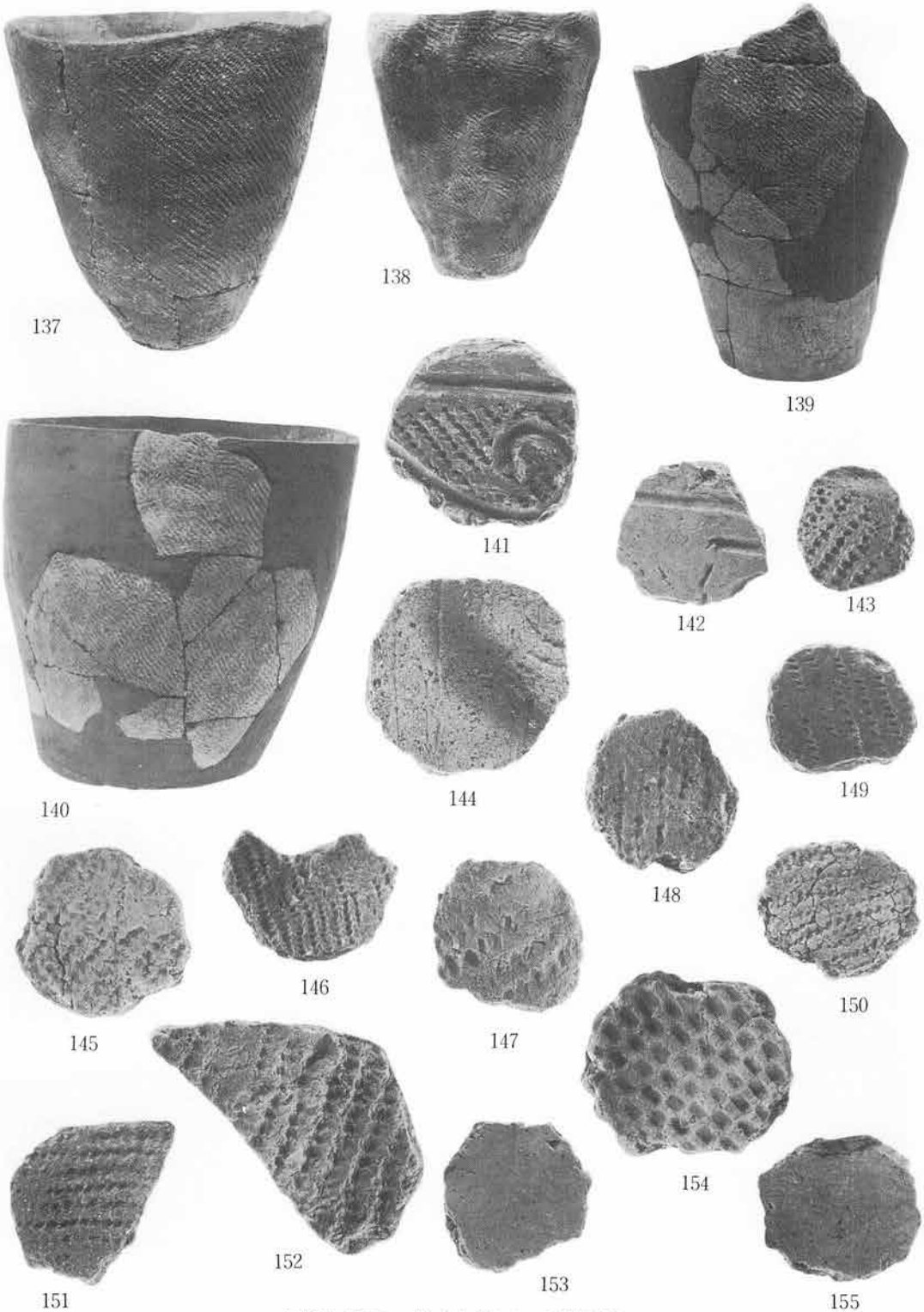

100

101

写真図版12：縄文土器(4)

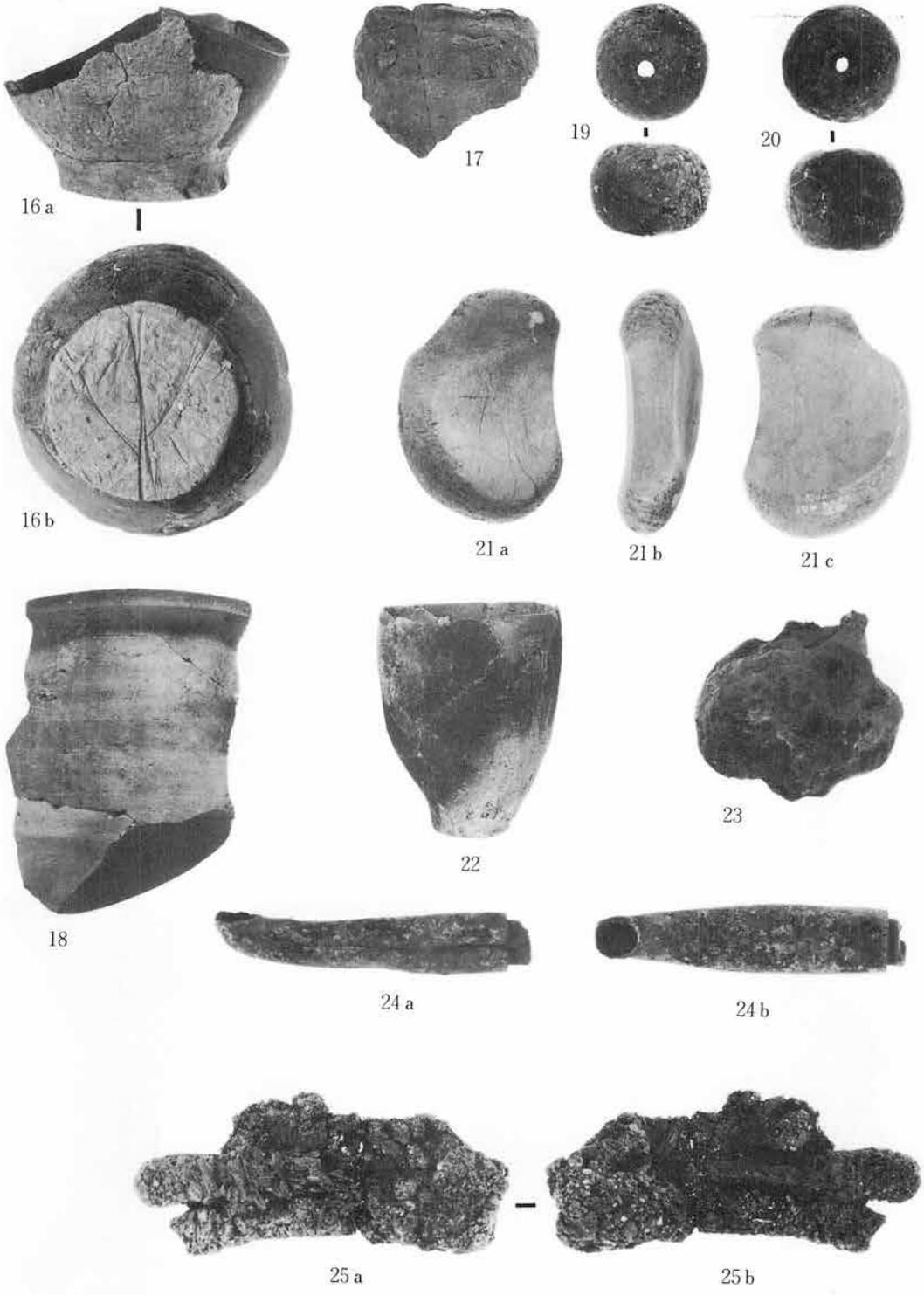


写真図版13：縄文土器(5)

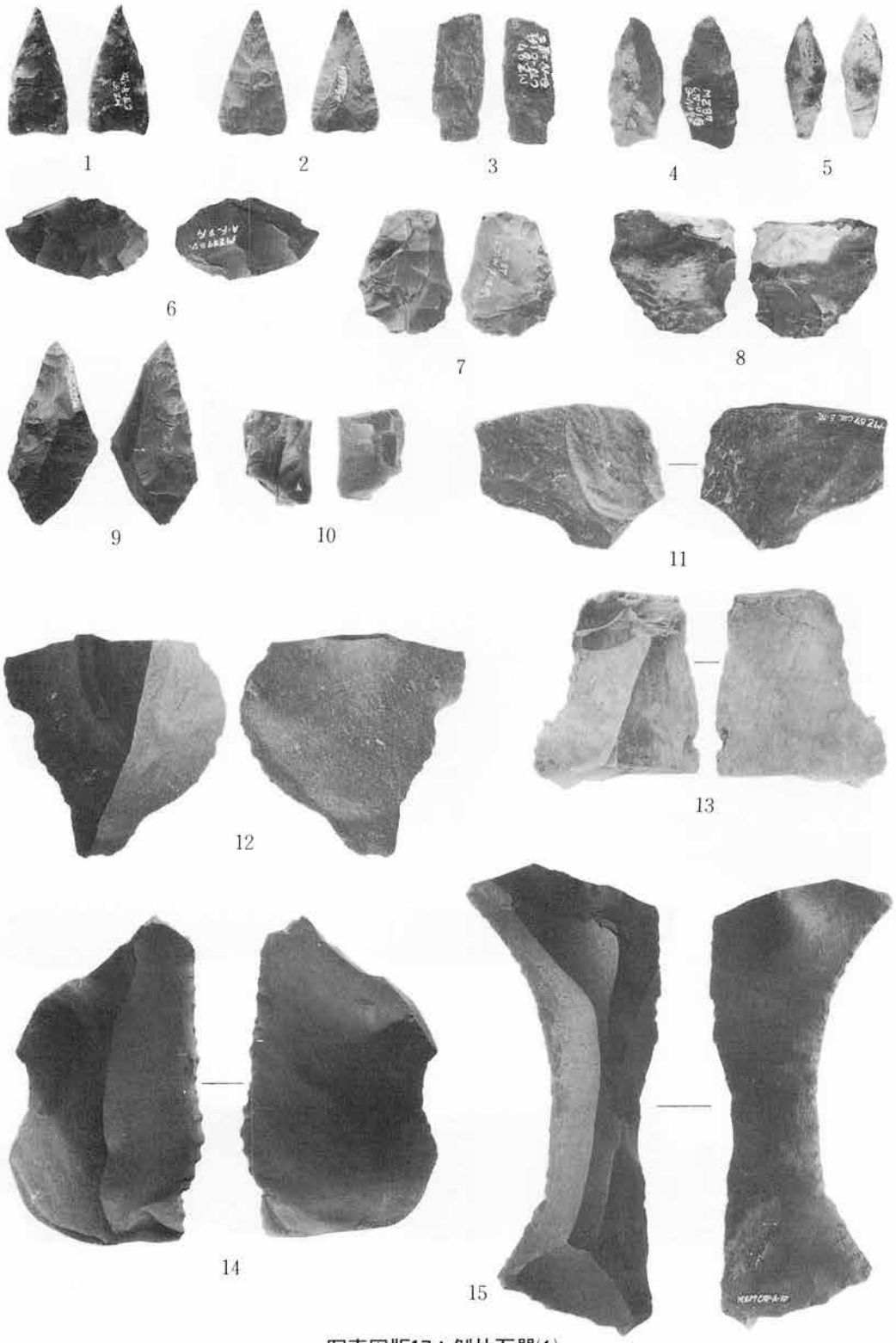


写真図版14：縄文土器(6)、土製円盤

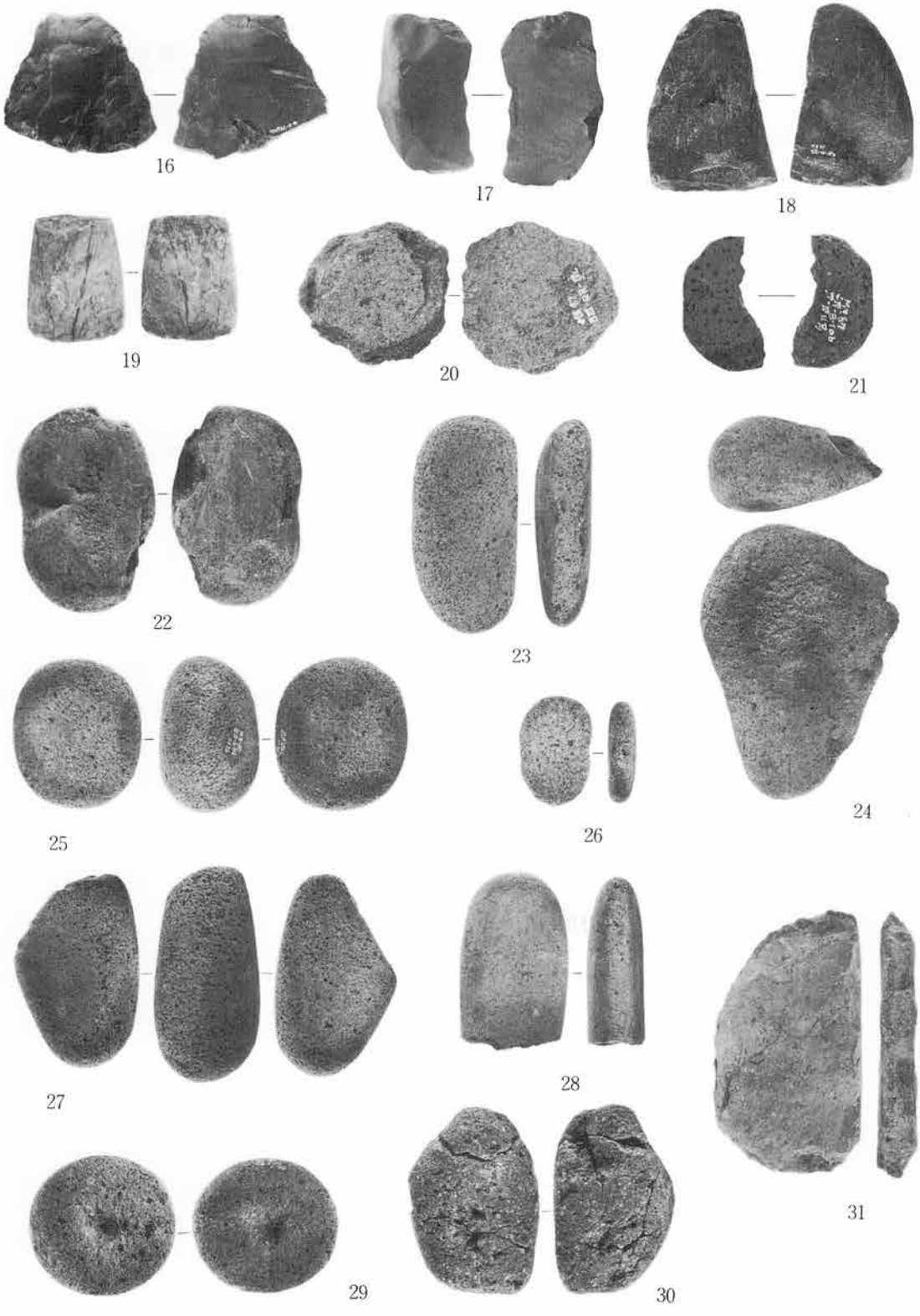
写真図版15：土師器・須恵器(1)



写真図版16：土師器・須恵器(2) 他



写真図版17：剝片石器(1)



写真図版18：剝片石器(2)、石斧・礫石器 他

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二		
副所長	鎌田良悦		
〔管理課〕			
管理課長（兼）	鎌田良悦		
課長補佐	伊藤吉郎	嘱託	似内喜兵
主事	阿部隆広	運転技士兼技能員	佐藤春男
〔調査課〕			
調査課長	昆野靖	文化財専門調査員	光井文行
主任文化財専門調査員	三浦謙一		佐瀬隆
〃	工藤利幸		玉川英喜
〃	高橋与右エ門		斎藤博司
〃	田鎖寿夫		東海林隆幹
〃	佐々木嘉直		遠藤修
〃	平井進		斎藤邦雄
〃	中村良一		高橋義介
〃	中川重紀		酒井宗孝
〔資料課〕			
資料課長	新田和雄		
主任文化財専門調査員	**小田野哲憲**		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第132集
主要地方道三十刈家ノ上線改良工事関連発掘調査
米沢遺跡発掘調査報告書

印刷　昭和63年10月25日
発行　昭和63年10月31日
発行　(財)岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL　(0196)38－9001・9002
印刷　河北印刷株式会社
〒020 盛岡市本町通二丁目8の7
TEL　(0196)23－4256

© 岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター1988